

杉田久女全句集 附やぶちゃん注

「やぶちゃん注…私は既に電子化した筑摩書房一九六七年刊

「現代日本文学全集 卷九十一 現代俳句集」に所収する「杉

田久女集」及び「杉田久女句集（やぶちゃん選）」を公開して

いるが、これはその私の選句集でも用いた一九八九年立風書房刊の「杉田久女全集」を用いた。この基本となるのは、久女の死後に刊行された角川書店昭和二七（一九五二）年十月二十日刊「杉田久女句集」である。但し、杉田久女（明治二三（一八九〇）年五月三十日～昭和二一（一九四六）年一月二十一日 旧姓は赤堀、本名は久）は戦前から活動した作家であり、しかもその活動期は事実上、昭和一四（一九三九）年で終わっていることから、私の特に俳句のテキスト化ポリシー（この理由については俳句の場合、特に私には確信犯的意識がある。それについては、私の「やぶちゃん版鈴木しづ子句集」の冒頭注で、私の拘りの考え方を示してある。疑義のある方は必ずお読み頂きたい）に従い、恣意的に漢字を正字化して示してある。但し、ポ

イントの違いや字空け・行空けは底本のそれを再現してはいない。特に前書を同ポイントで示し、句との間を一行空けにしたのは私のこれは一種の私の確信犯の仕儀と心得られたい。

本テキストは二〇一四年一月十三日に開始した私の[ブログ・カテゴリ「杉田久女」](#)で全電子化を終了したものを一括化したものであるが、注の一部を増補してある。

また、久女を俳壇から抹殺した高浜虚子の角川書店昭和二七（一九五二）年版の「杉田久女句集」の序文を附すことにした（本文同様に恣意的に正字化した）。「歸や兼ひ」である私は実際にこれを載せたくないのであるが、ブログ版の冒頭で約束もし、また久女の句集出版の執念とそれが成らずして逝った怨念を考えれば、あの殺人者を無言で弾劾するためにも、これを外すことはやはり出来ないと私は考える。

なお、本PDF版ではソフトの限界から一部の正字や環境依存文字が横転している。御寛恕願いたい。

【二〇一四年十二月二十八日 藪野直史】

序

杉田久女さんは大正昭和にかけて女流俳人として輝やかしい存在であつた。ホトトギス雑誌の投句家のうちでも群を抜いて居た。生前一時其の句集を刊行し度いと言つて私に序文を書けといふ要請があつた。喜んでその需めに應ずべきであつたが、其の時分の久女さんの行動にやゝ不可解なものがあり、私はたやすくそれに應じなかつた。此の事は久女さんの心を焦立たせてその精神分裂の度を早めたかと思はれる節も無いではなかつたが、併しながら、私は其の需めに應ずることをしなかつた。

久女さんの没後、その長女の石昌子さんから、母の遺稿を出版したいのだが一應目を通して呉れないか、といふ依頼を受けた。私は喜んで御引受けするといふ返事を出した。送つて來たその遺稿といふのを見ると、全く句集の體を爲さない、只亂雜に書き散らしたものであつた。それを整正し且つ清書する事を昌子さんに話した。昌子さんは丹念にそれを清書して再びその草稿を送つて來た。私は句になつてゐると思はれるものに○を附して、それを返した。その面白いと思はれる句は、曾てホトトギスの雑誌欄其の他で一通り私の目に觸れたものである様に思へた。他に遺珠と思はれるものはさう澤山は無かつた。試

みにその句數句を擧げてみようならば、

無憂華の樹かげはいづこ佛生會

灌浴の淨法身を拜しける

花衣ぬぐやまつはる紐いろいろ

むれ落ちて楊貴妃櫻尚あせず

咲き移る外山の花をめで住めり

櫻咲く宇佐の呉橋うちわたり

風に落つ楊貴妃櫻房のまゝ

むれ落ちて楊貴妃櫻房のまゝ

菊干すや東籬の菊もつみそえて

摘み競ひ企玖の嫁菜は籠にみてり

これらの句は清艶高華であつて、久女獨特のものである。尚、この種の句は他に多い。生前の序文を書けといふその依囑に應ずる事が出来なかつた私は、昌子さんの求める儘に丹念にその句を克驗してこれを返した。

昭和二十六年八月十六日

鎌倉草庵

高濱虚子

「やぶちゃん注…「花衣ぬぐやまつはる紐いろいろ」の「いろいろ」の後半は底本では踊り字「へ」。「克驗」見馴れぬ熟語であるが、よく点検するの謂いであろう。「精神分裂」は現在、統合失調症と呼称が変わっているが、杉田久女が統合失調症であつたという正式な診断や信賴するに足る情報は、私の知る限りに於いて、存在しない。この久女の切望した句集の序にあつてさえ、殺人鬼高浜虚子はいまわしき久女伝説の形成の一役を演じている。まあしかし、そんなことはどうでも好い。私は「歸子嫌ひ」であるから。――」

境町（大正七年より昭和四年まで）

「やぶちゃん注…「境町」杉田久女は大正七（一九一八）年二十八歳の時、夫で中学校美術教師であつた杉田宇内^{うない}と二人の娘とともに福岡県小倉市境町百十一番地に転居している。因みに彼女の句が「ホトトギス」に載つたのはこの前年大正六年一月号の「台所雑詠」欄であつた。そこに載つたのは、

鯛を料る俎せまき師走かな

皿破りし婢のわびごとや年の暮

冬野朝道々こぼす手桶^{てづけ}の水

へつついの灰かき出して年暮るゝ

風や流シの下の石乾く

以上の全五句であつた。」

春寒や刻み鋭き小菊の芽

麦の芽に日こぼす雲や春寒し

春寒の髪のはし踏む梳手かな

春寒やうけしまゝ置く小盞

揃はざる火鉢二つに餘寒かな

鳥の餌草摘みに出し餘寒かな

春曉の窓掛け垂れて睡りけり

春曉の夢のあと追ふ長まつげ

春曉の紫玉菜抱く葉かな

「やぶちゃん注…「紫玉菜」ムラサキキャベツ。アカキャベツともいう。今でこそポピュラーだが、俳句では珍しい。しかもこの時代である。その葉を「抱く」と捉えてクロース・アツプするところに久女のモダンさが垣間見えると私は思う。」

草庵やこの繪ひとつに春の宵

小鏡にうつし拭く墨宵の春

「やぶちゃん注…艶麗にして春怨を美事に描いた一句である。」

春の夜のねむさ押へて髪梳けり

鐵瓶あけて春夜の顔を洗ひ寢し

春の夜や粧ひ終へし蠹函か

「やぶちゃん注……夜化粧……ジジジ……と細る灯明……何
という妖艶！……」

春の夜のまどろみの中にゐて寂し

吊革に春夜の腕のしなはせて

「やぶちゃん注…久女には独特のアップの画像の妖しい美しさ

が光る。これもその一句。」

ゆく春やとげ柔らかに薊の座

ゆく春の流れに沿うて歩みけり

「やぶちゃん注…後の英彦山雜吟 百二十句の内の、

蝶追うて春山深く迷ひけり

を私は何処かで久女の辞世のように錯覚することを好んでい
る。……久女さん、この句はその迷い行くことを望んだ貴女の
最初の一步だったのではありませんか？……」

のぞき見て塀穴ふさぐ日永かな

あたたかや水輪ひまなき廂うち

「やぶちゃん注…「水輪」は「みなわ」であろう。庭の池塘か

雪解けの溜り水の水面みなものそれが煌めく晩春の陽光をしきりに

廂の下の蔭に差しかけてくる。タルコフスキイ好みのスカルプ
ディング・イン・タイムである。」

弥生盡芥子こまごまと芽生えけり

淡雪にみな現はれし葉先かな

東風吹くや耳現はるゝうなる髪

「やぶちゃん注…「うなる髪」髻・髻髪。昔、七、八歳の童児
の髪を項うなじの辺りで結んで垂らしたもの。また、女兒の髪を襟首
のあたりで切り下げておくもの。単に「うなる」とも言った。
そこから髪形をうない髪にした童児や幼い子の意ともなる。語
源は「項居うなゐ」の意かとされる。」

船板に東風の旗かげ飛びにけり

春の雨苗すこやかに届きけり

春雨や土押し上げて枇杷二葉

春雨の畠に燈流す二階かな

「やぶちゃん注…底本「燈」は「灯」。迷ったがここはシーク
エンスから見て正字を採った。」

春雨や疊の上のかくれんぼ

菓子ねだる子に戲畫かくや春の雨

齒莖かゆく乳首かむ子や花曇

「やぶちゃん注…フロイトなら鬼の首を獲ったように口唇期固
着と揶揄するであろうが、私は個人的にこの句がすこぶる附き
で好きである。下五の妖艶なる春怨の情が堪らぬのである。」

嵐山の枯木もすでに花曇

春泥に柄浸けて散れる木の實赤

浮きつづく杭根の泡や水ぬるむ

ぬるむ水に棹張りしなふ濁りかな

水ぬるみ網打ち見入る郵便夫

少し轉げてとどまる蜷や水ぬるむ

土出でて歩む墓見ぬ水ぬるむ

春著きるや裾踏み押へ腰細く

鬚重きうなじ伏せめに春著かな

春襟やホ句會つゞくこの夜ごろ

鬢かくや春眠さめし眉重く

風をいとひて鬢に傾げし春日傘

道のべの茶すこし摘みて袂かな

嫁菜摘むうしろの汽笛かへり見ず

草摘む子幸あふれたる面かな

草摘むとしもなく子等を従へし

簷に吊る瓢の種も蒔かばやな

芥子蒔くや風に乾きし洗ひ髪

青き踏むや離心を抱ける友のさま

「やぶちゃん注…この「友」は……もしかすると……[橋本多佳](#)

[子](#)（リンク先は私のブログ・カテゴリ「橋本多佳子」）かも知れない。橋本多佳子は久女より九歳下で、大正一一（一九二二）

年に夫雄次郎の小倉の櫓山荘のサロンで高浜虚子や久女と出逢って俳句を始めたが、その当初の師は久女であった（底本年譜によれば大正一四（一九二五）年五月に吉岡禪寺洞に指導を

譲っている)。私は多佳子の俳句の輝きはこの久女の情熱的な指導を濫觴とすると信じて疑わない人間である。」

姉るねばおとなしき子やしやぼん玉

「やぶちゃん注…宇内と久女の次女光子（大正五（一九一六）年生）。長女昌子は明治四四（一九一一）年八月二十二日生まれ。」

私立女學校に圖畫を教ふ 一句

押し習ふ卒業式の太鼓判

「やぶちゃん注…前書を持つ句はこれが最初である。久女は特別な絵画教育を受けたわけではないようだが、夫で中学校美術教師であつた宇内は東京上野美学校西洋画科卒でもあり、大正一一（一九二二）年に橋本多佳子が弟子入りした際も、『作句もしたし絵も描かされた』（底本年譜。因みにこの年譜は久女の長女石昌子^{いし}氏の編になる、めったにない書く人の情の伝わってくる優れた年譜である）とある。ここで言う「私立女學校に

圖畫を教ふ」というのは、年譜に於いて、大正一二（一九二三）年『四月に私立勝山女学校（現在の市立三萩野商業）にて宇内の代理として図画と国語を教える。校長吉村女史の経営の苦勞を援助して、市立に昇格するまで数年間教壇に立』ったとあることを指している（珍しく作句時期が限定出来る句である）。他にも大正一三（一九二四）年の項に福岡『県立京都高等女学校（福岡県京都郡行橋）^{ゆくはし}にて、卒業生と父母を対象とする手芸、フランス刺繡の講習会講師。鍛冶町にメソジスト教会建設のバザー出品のため、刺繡、手工芸品（貝合わせ玩具など）製作』とあり、久女には美術工芸の素養があり、手先も器用であつたことが窺われる。」

入學兒に鼻紙折りて持たせけり

「やぶちゃん注…長女昌子の小学校入学の景とすれば、大正七年四月の詠かと思われる。底本年譜は昌子氏の編になるが、同年の項にはしっかりと入学の記載があることからこの可能性は極めて高いと私は考えている。」

燕來る軒の深さに棲みなれし

「やぶちゃん注：個人的に閨怨の情頗る切にして好きな句である。」

藪風に蝶ただよへる歸鳥かな

蝶來初めぬ北窓畠に開けてすむ

もつれ映りて河を横切る蝶々かな

蝶の目に触れてきびしき小花かな

蝶去るや葉をとじて眠るうまごやし

蝶とまりて静に翅をたたむ花

すこし飛びて又土にあり翅破れ蝶

旭注ぐや蝶に目醒めしうまごやし

「やぶちゃん注…底本索引から「旭注ぐや」は「ひそそぐや」と訓じているものと思われる。久女は蝶を詠わせたなら右に出る者はない。彼女にとって蝶は傷心の自身の肉体であり、後に足袋つぐやノラともならず教師妻

と詠む「人形の家」のノラの自己投影の表象であり、そうして――そうして

蝶追うて春山深く迷ひけり

と詠んだ彼女の、魂の迷宮^{ラビリンス}への誘いでもあったのである。」

指輪ぬいて蜂の毒吸ふ朱唇かな

さしゝ蜂投げ捨てし菜に歩み居り

椿流るゝ行衛を遠くおもひけり

木立ふかく椿落ちゐし落葉かな

棲とりてこぐみ乗幌花の雨

「やぶちゃん注…和服の褌、人力の黒い幌、落ち散る桜——色彩と匂いの実に豊かな一句である。」

バイブルをよむ寂しさよ花の雨

花衣ぬぐやまつはる紐いろいろ

「やぶちゃん注…「いろいろ」は底本では踊り字「へ」。大正八（一九二九）年二十九の時の作。言わずもがな、久女の句の艶を最もシンボライズするヌーヴェル・ヴァーグ風のモンタージュである「花衣」は春の季語で花見に着る晴れ着のこと。大野林火「近代俳句の鑑賞と批評」（明治書院昭和四二（一九六七）年刊）で大野は本句の鑑賞文の中で、久女の作を『不羈奔放、華麗、情熱的で男をたじたじさせるものがある。始終誰かを恋いしないではいられなかったといわれるが、肯かれることだ。万葉の額田王、中国の魚玄機に擬せられる所以であろう』とし、同時期の画期的な女流俳人の中でも長谷川『かな女、久女ともにその作品で優に男に頷頷した作家である』と記す（こうした叙述はある意味で肥大した久女伝説を助長しており、的を射て

いる部分は部分として、批判的な読みも同時に不可欠であると言いたい）。本句について大野は、『肉体を幾重にも緊繫している紐類だが、それをいま、つぎからつぎへと解き捨ててゆくことに肉体の解放感が思われ、艶麗である。句に詠まれていることは作者の足許にすでに散らばり、また、まだ肉体にまつわり残る紐だが、脱ぐものが花見衣裳であるだけにこの紐類また華麗、肉体の解放感と相俟って艶麗さを一句に与えている。いえばヌード一步手前であり、女の匂いが濃厚で、つつましやかとは裏腹である』と評している。しかしこの評言、実に男の脂ぎった視線が感じられてなんだかいやらしい。三文の中で「肉体」という語を四度も用い、「緊繫している紐類」という謂いには恰もそれが生々しい猥雑なクリチャーでもあるかのような生理的嫌悪感をさえ私は抱く。最後の一文などは評者自身の中年男性の如何にも猥褻な視線が感じられて、まさに「鑑賞と批評」という「つつましやか」な標題「とは裏腹である」と返したい気がしてくる。」

木々の芽の苞吹きとべる嵐かな

今掃きし土に苞ぬぐ木の芽かな

晴天に苞押しひらく木の芽かな

莊の道躑躅となりて先上り

花ふかく躑躅見る歩を移しけり

「やぶちゃん注…この囑目吟、私は高い確率で橋本豊次郎・多佳子夫妻の小倉市中原（なかばる。現在の小倉北区中井浜）にあった豊次郎自ら設計建築になる、大正九（一九二〇）年落成の三階建和洋折衷西洋館櫓山^{ろざん}荘でのものと読む。櫓山荘については私のブログ電子テキスト『橋本多佳子句集「海燕」』昭和十年 櫓山日記』の注を参照されたい。」

青麥に降れよと思ふ地のかはき

青麥ややたらに歩み氣が沈む

青麥に潮風ねばく吹き狂ふ

捨てである花菜うれしや逢はで去る

花畠に糞する犬を憎みけり

花大根に蝶漆黒の翅をあげて

月おそき畦おくられぬ花大根

活くるひま無き小繡毬や水瓶に

「やぶちゃん注」：「小繡毬」バラ目バラ科シモツケ亜科シモツケ属コデマリ *Spiraea cantoniensis*。知られた花であるが、

続けた注とのバランスから[グーグル画像検索「*Spiraea*](#)

[cantoniensis](#)」を示しておく。なお、[鑑園誌](#)と書くと、歳時記

上は六月頃にアジサイに似た球形の青白い花を枝の両側につけるキク亜綱マツムシソウ目スイカズラ科ガマズミ属オオデ

マリ *Viburnum plicatum* 変種ヤブデマリ *Viburnum plicatum* var. *tomentosum* 若しくはその更なる変種を指す

([グーグル画像検索「*Viburnum plicatum* var. *tomentosum*」](#))^o]

春蘭にくちづけ去りぬ人居ぬま

「やぶちゃん注…「春蘭」単子葉類クサスギカズラ目ラン科セツコク亜科シュンラン連 *Cymbidinae* 亜連シュンラン *Cymbidium goeringii*。土壤中に根を広げる地生蘭の代表種。

春咲き。参照した[ウィキの「シュンラン」](#)の冒頭には、『古くから親しまれてきた植物であり、ホクロ、ジジババなどの別名がある。一説には、ジジババというのは蕊柱を男性器に、唇弁を女性器になぞらえ、一つの花に両方が備わっていることからついたものとも言われる』と記す。こういうところがウィキの粹なところ。無粋な私の評釈なんぞ、最早、不要。』

春燈消えし闇にむき合ひ語りぬし

大江戸の雛なつかしむ句會かな

雛菓子に足投げ出せる人形たち

手より手にめで見る人形宵節句

ほゝ笑めば簪かんざしのびらや雛ひなの客

「やぶちゃん注：「簪のびら」「びら」は銀などの金属性の簪の装飾具の一種で、細長い板状の下げ飾り。[ウィキの「簪」](#)によれば、これをメインにした簪には、例えば「ビラカン」「扇」「姫型」と呼ばれるものがある。これは『金属製の簪が頭の部分が扇子のような形状をしているものや、丸い形のものがあり、家紋が捺されている。頭の平たい部分の周りに、ぐると細長い板状のビラが下がっている。耳かきの無い平打に、ビラをつけたような形状。現代の舞妓もこれを用い（芸妓になったら使わない）、前挿しにする。その場合、右のこめかみ辺りにビラカン、左にはつまみかんざしを挿す』とあり（「つまみかんざし」とは布を小さくカットしたものを折り畳んで竹製のピンセットでつまんで糊をつけ、土台につけていき、幾重にも重ねたりなどして花を表現したものを纏めて簪にしたもの。多くは花をモチーフにしていることから「花簪」ともいう。布は正絹が基本で、かつては職人が自分で染めから手掛た。布製であったため、昔のものは残りにくい。その辺りも花らしいといえる。現代では舞妓たちが使うほか、子供の七五三の飾りとして使わ

れることが多い。少女向け。と同ウィキにはある）、また「びらびら簪」と称するものもある。それは『江戸時代（寛政年間）に登場した未婚女性向けの簪。本体から鎖が何本も下がっている、その先に蝶や鳥などの飾り物が下がっている派手なもの。裕福な商人の娘などが使ったもので、既婚者や婚約を済ませたものは身に付けない。天保二年から三年頃には、京阪の裕福な家庭の若い子女の間で、鎖を七・九筋垂らした先に硝子の飾り物を下げた豪華なタイプが人気を博していたと記録されている。本格的に普及したのは明治以降である。左のこめかみあたりに挿す用途のものとする』とある。」

幕垂れて玉座くらさや案の雛

函を出てより添ふ雛の御契り

古雛や花のみ衣みけしの青丹美し

「やぶちゃん注…「み衣」「御衣みけし」の形で「ころも」の意。上代の「着る」の尊敬語であるサ行四段活用動詞「着けす」の連用形が名詞化したもの。「青丹」は「あをに（あおに）」で、ここは

襲^{かきぬ}の色目の名であろう。表裏ともに濃い青に黄を加えた色で染めたもの、若しくは、表が濃い香色（赤味の強い茶色）、裏は薄い青色。」

雛愛しわが黒髪をきりて植ゑ

古雛や華やかならず臍たけれ

髪そぎて臍たく老いし雛かな

古りつつも雛の眉引匂やかに

紙雛のをみな倒れておはしけり

雛市に見とれて母におくれがち

雛買うて疲れし母娘食堂へ

瓔珞揺れて雛顔暗し藏座敷

雛の間や色紙張りまぜ広襖

＊

縫ふ肩をゆすりてすねる子暑さかな

髪の香のいきるる夜かな鳴く蛙

「やぶちゃん注」：「いきる」はラ行四段活用の自動詞「いきる」
「いる」と同じラ行下一段活用の自動詞「いれる」「いれる」。
あつくなる・ほてる・むしむしするの意。熱気のためにむっと
する「草いきれ」の「いれ」はこれが名詞化したもの。なお、
この一句前の前に打たれたアスタリスクは特異で、しかもその
意図が読者には判然としない。これは久女の中の隠された意識
の一つの区切りのようにも思われる。」

月の輪をゆり去る船や夜半の夏

日盛の塗下駄ぬげば曇りかな

早魃の舗道はふやけ靴のあと

萱の中に花摺る百合や青嵐

一間より僧の麝や青嵐

松の根の苔なめらかに清水吸ふ

「やぶちゃん注…大正七（一九一八）年二十八の時の作。彼女の句群の中にあるだけでこの叙景が妖艶になるというこれぞ久女マジック。」

衣更て帶上赤し厨事

みづみづとこの頃肥り絹裕

眉かくや顔ひき締る裕人

「やぶちゃん注…言わずもがな乍ら、「裕人」は「あはせびと（あわせびと）」。

夏の帶廣葉のひまに映り過ぐ

夏の帶翡翠にとめし鏡去る

後妻うはなりの姑の若さや藍ゆかた

「やぶちゃん注…笑顔の久女の見る目はいたって穏やかだが、その眼底に、何かどきつとする一閃が、私には感じられる。なお、「うはなり」の語源は未詳である。」

洗ひ髪かわく間月の籐椅子に

四季の句のことに水色うちわかな

「やぶちゃん注…「水色うちわ」（「うちわ」はママ）は高級品の奈良団扇と思われる。「大呂俳句会」公式サイト「[季語散策3 団扇](#)」に『淡い水色やほんのりとした鳥子色とりこのいろが特徴で、奈良の風物である鹿や、正倉院に伝わる文様などが切り絵にされて貼ってある』とある（他に両面に漆を塗った岐阜特産の岐

阜団扇の一種に、「水団扇」といつて透けるように薄い雁皮紙にニスを塗って作られた団扇がある。耐水性が高いために水で濡らして煽ぐことで涼味を楽しむものらしいが、採らない。季語そのものを詠唱の対象とした面白い一句である。」

なつかしき水色うちわ師の句かな

「やぶちゃん注…「水色うちわ」はママ。現在のところ、虚子の句に「水色うちわ」を詠んだ句を発見出来ない。識者のご教授を乞う。なお、さる方からは「手に當る五色團扇の赤を取る」ではないかという指摘があったが、この虚子の句は昭和二一（一九四六）年（奇しくもこの一月二十一日に久女は孤独に死んだ）の句であるからあり得ない。私は「歸々簾ひ」なので今後も、熱心にこの「うちわ」の句を探すつもりはない。奇特な方の御指摘を気長に待つこととする。」

照り降りにさして色なし古日傘

麻蚊帳に足うつくしく重ね病む

稻妻に面をうたす蚊帳かな

母の帶卷きつゝ語る蚊帳の外

コレラ怖ぢ蚊帳吊りて喰ふ晝餉かな

「やぶちゃん注…大正七（一九一八）年の作。この二年前の大正五（一九一六）年の夏、本邦ではコレラが流行、死者七千四百八十二人を数えた。これは呪いまじなの類いではなく、れっきとしたコレラ感染予防の蠅対策で、小児の昼寝の際などには奨励された。」

蚊帳の中團扇しきりに動きけり

上阪 一句

母と寝てかごときくなり蚊帳の月

「やぶちゃん注…「上阪」は小倉からの大阪行であろうが、久女の実家は東京であり不審（愛知県西加茂郡小原の義母杉田し

げは大正二（一九一三）年に逝去している）。編年式編集の角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」からこの句は大正一四（一九二五）年の句であることが分かり、底本年譜の同年の三月と思しい部分に『実母を訪う』とある。しかし年譜上の記載からも大阪と実母さよの接点は見当たらない。「かごと」（託言。心が満たされずに不平を言う・愚痴をこぼす・嘆く）の意の「かこつ」の名詞節「かこちごと」が元）という、（人のせいにしていう）恨み言・不平・愚痴という表現からは、大正九（一九二〇）年八月から腎臓病のために一年ほど東京上野桜木町の実家に戻った際、宇内との離婚問題が起こった（主に久女の実家側かららしい）ものの、翌年七月に小倉に帰っている。その際、実家で母さよから『子供のために辛抱して、夫が俳句を嫌うなら俳句をやめるように説得された』（久女長女石昌子さん編の年譜記載）とあるのは句柄と合致するが、やはり大阪ではないし、角川版の時系列とも齟齬する。」

蚊帳の中より朝の指圖や旅疲れ

蒼海の落日とゞく蚊帳かな

隣室に夏座布團をすゝめけり

打水に木蔭湿れる茶店かな

水打つて石涼しさや瓜をもむ

玄海に連なる漁火や窓涼み

夕風や釣舟去れば涼み舟

遊女らの涼める前を通りけり

遊船のさんざめきつゝすれ違ひ

灯せる遊船遠く現はれし

夏祭髪を洗つて待ちにけり

風鈴に黍畠よりの夜風かな

孤り居に風鈴吊れば黍の風

「やぶちゃん注：この「黍」が真正の单子葉植物綱イネ目イネ科キビ *Panicum miliaceum* を指しているか、それともイネ科トウモロコシ *Zea mays* の別称であるか、判定出来ずにいる。当時の福岡ではキビ *Panicum miliaceum* など栽培していなかったという情報があれば情景は知られた玉蜀黍畑で落ち着くのだが。実は私はその室内での立ち位置から見て、キビではなくトウモロコシと読みたくなるのであるが。識者の御教授を乞うものである。」

帽子ぬぐや汗に擦れあふもつれ髪

金魚掬ふ行水の子の肩さめし

「やぶちゃん注：この句は女性として母としてのみ創り得る句であり、そうしてしかも久女によってのみ描き得る少女のエロティシズムをも幽かに香らせている佳品である。」

蟲干やつなぎ合はせし紐の數

「やぶちゃん注…「蟲」は底本では「虫」である。容易に想像がお出来になると思うが、「蟲」の字を生理的に嫌悪する作家は芥川龍之介を始めとして殊の外多い（書くのが面倒臭いという意味もあるかも知れない）。ただ私の筑摩書房一九六七年刊「現代日本文学全集 卷九十一 現代俳句集」に所収する「杉田久女集」を底本とした「[杉田久女集](#)」を見て戴けば分かる通り、そこでは当該字を含む三句ある総てが「蟲」と表記されている（但し、これは久女没後の選集であり、編者による編集方針で正字化された可能性も頗る高いから確実な証左とはならない）ことに鑑み、「蟲」とした。以下、同様の仕儀を行うが、この注は略す。」

さうめんや孫にあたりて舅不興

新茶汲むや終りの雫汲みわけて

枕つかみて起上りたる晝寝かな

夏瘦のおとがひうすく洗ひ髪

夏瘦や湊も色どらず束ね髪

ホ句のわれ慈母たるわれや夏瘦ぬ

子らたのし夏瘦もせず海に山に

歸省子に糸瓜大きく垂れにけり

櫓山山莊一句

水汲女に門坂急な避暑館

「やぶちゃん注…私は本句には顕在的な弟子橋本多佳子の優雅な生活への明確な羨望と密やかな妬心が窺えるように思われる。」

湖を泳ぎ上りし木蔭かな

羅を裁つや亂るゝ窓の黍

「やぶちゃん注」：「羅」は「うすもの」と訓じている（底本索引から）。「黍」は单子葉植物綱イネ目イネ科キビ *Panicum miliaceum* か、イネ科トウモロコシ *Zea mays* の孰れであろうか？ 単漢字「黍」からは前者（トウモロコシならば「玉蜀黍」と書いて「きび」と振るか）なのであるが、どうしても私はこれはトウモロコシのように思われてならないのである。

薄絹の透明感——裁ち鋏のハレーション——ザワザワと乱れる窓外のトウモロコシ——乱れる悶々と鬱屈した久女の心——「羅」「裁つ」（切れ字）「亂る」という語彙の選びといい、ゴッホ張りの窓枠が額縁と化した向こうの玉蜀黍畑の動景といい、写生でありながら、その実、カメラは反転して——触れなばシャツ！——と——斬れんばかりの——窓の中に愁いに沈む女の心象を風景として描き出して余りある。——と感ずるからである。大方の御批判を俟つものである。」

夕闇の中に暮這ふけはひかな

つれづれのわれに暮這ふ小庭かな

晝灯すみ山燈籠やひきがへる

「やぶちゃん注…「山燈籠」とは「化け燈籠」ともいい、自然石を集めて石灯籠の形にしたもので鹿児島県の庭園でよく見かけると「ことぶき造園設計」（鹿児島市吉野町）の公式サイトの[こちらの解説ページ](#)にある。そこにある写真を見ると如何にも墓蛙を配すに相応しいものであることが分かる。」

生き鮎の鰭をこがせし強火かな

笹づとをとくや生き鮎ま一文字

鰻にもとられず小鮎釣り來し夫をかし

鮎やけば猫梁を下りて來し

登り來ては杭をとび散る羽蟻かな

「やぶちゃん注…「羽蟻」はアリ・シロアリ類で初夏から盛夏にかけての交尾期に羽化して巣から飛び立った女王アリと雄

アリ群を指す。この久女の描写からそれが孰れの羽蟻（はあり）であるかは判然としないが、杭とあるから屋外の景ではある。因みに両者の区別は「関東白蟻防除株式会社」公式サイト内には「[シロアリとアリの羽アリを見分けるには？](#)」に詳しく、そこには家の外で見かけただけであれば特に問題はなく、シロアリはどこにでもいる昆虫であるとある。」

雌を追うて草に腹返す蝾螈の緋

「やぶちゃん注…久女ならではの詠めぬ（少なくとも女流俳人にしてこの生臭くどぎつくしかも慄つとするエロテイシズムを湛えた誘惑的シチュエーションを詠もうとしたのは彼女を嚆矢とすると私は信じて疑わない）句である。老婆心乍ら「蝾螈」は「いもり」と読む（音は「エイゲン」で漢語）。両生綱有尾目イモリ上科イモリ科 *Salamandridae* のイモリ類の総称であるが、本邦では「イモリ」と言えばトウヨウイモリ属アカハライモリ *Cynops pyrrhogaster* を指すことが多い。「蝾螈」は「蜥蜴」（トカゲ）の意にも用いられるが、ここは後の「緋」という描写及び「雌を追うて草に腹返す」という特異な行動からもアカハライモリの特長的な成体個体と繁殖行動を描いて

いてすこぶる附きで正確なのである（私は高校時代に理科部でアカハライモリを用いた四肢の切断再生実験に関わった。従って通常人よりも遙かに彼らには親しいのである）。以下、[ウィキ](#)の「[アカハライモリ](#)」の「生態」の項にも、『春になり気温が上昇し始めると、成体が水中に姿を現す。オスがメスの行く先にまわりこみ、紫色の婚姻色を呈した尾を身体の横まで曲げて小刻みにふるわせるなど複雑な求愛行動を行う。このときにオスが分泌するフェロモンであるソデフリン（sodefrin、額田王の短歌にちなむ）が、脊椎動物初のペプチドフェロモンとして報告されている。メスが受け入れる態勢になると、メスはオスの後ろについて歩き、オスの尾に触れる合図を送ると、オスが精子嚢を落としメスが総排出腔から取り込む。その際にオスの求愛行動に地域差があり、地域が異なる個体間では交配が成立しにくいといわれる』とある。なお、彼らは両生類であるから湿った草地にも登ってくるので「追うて草に」も何ら問題ない。……因みに——ソデフリン——というこのケツタイな、万葉好きの科学者がつけたであろうペプチド・フェロモンの響きが、私はどうも今一つ好きになれないでいることを告白しておく。それはまさにこの性フェロモンが額田女王のそのの如く「フリン」という発音から寧ろ「不倫」という不道德のイメージ

ジを惹起させてしまうからに他ならない。……しかしその程度
の名で驚いていてはおられない。今やナマコの性フェロモンに
「クビフリン」、シリケンイモリ *Cynops ensicauda* が尻尾を
振って求愛している際に出しているフェロモンは「シリフリン」
なのだ(但し、これは逆に如何にも残念なことに「尻振(りん)」
が元義ではなく、最初のアミノ酸が「SIL」で始まるという
極めて厳粛なところの学術的命名なのである)。興味のある
方は私がかつて書いたブログ「[クビフリン・ソデフリン・シリ
フリン](#)」をお読みあれかし。なおこうした科学的事実はイモリ
が遙かな古代より媚薬や不倫(姦淫)の探知薬として知られて
いた旧来の本草学的博物学的知見と明らかに繋がっていると
私は考えている。その辺りに関心のある向きは、是非、私の電
子テキスト「[寺島良安 和漢三才圖會 卷第四十五 龍蛇部](#)
[龍類 蛇類](#)」の「[ゐもり 蝾螈](#)」の項をお読み戴ければ幸いで
ある。」

ゐもり釣る童の群にわれもゐて

「やぶちゃん注:この子どもたちのイモリを釣っている方法に
ついて、如何にも相応しい一つの釣り方の可能性が三重県在住

のムー氏のブログ「野人エッセイす」の「[イグサでイモリを釣る方法](#)」に示されてある。イグサの端で輪を作った簡便なものである。この輪の部分をイモリやカエルの顔の前に置いて待ち伏せするのだそうである。彼らが輪に入った瞬間に『勢いよく引っ張れば簡単に輪が締まるようになってい』る。イモリでもカエルでも『後ずさりをしないから飛び込んでくる。イモリが動かない場合は草で尾を突けば嫌々ながら輪に入ってくる。カエルは跳ぶときに両足がやや開く。つまり、輪を飛びぬけ抜けそうに見えて足元が引っ掛かって自分から締まってしまう。』
「キュ〜！」と両手両足おっぴろげた格好で釣られて来るが特に害はない。イグサの輪は簡単に緩んですぐに息を吹き返す。やり始めると面白いように釣れるからやめられない。やって見せたのはヤマハ音楽教室の子供達数十人だった』とある。まことにこれで私は本句の情景を心に確かに描けたのである。」

玉蟲や瑠璃翅亂れて疊とぶ

草に落ちし螢に伏せし面輪かな

「やぶちゃん注…個人的すこぶる好きな句である。」

螢籠廣葉の風に明滅す

こがね蟲葉かげを歩む風雨かな

燕に機窓明けて縫ひにけり

「やぶちゃん注：大正八（一九一九）年の作。私が莫迦なのか、本句は解釈に苦しんでいる。「機窓」はどう読んでも「はたまど」という熟語としか思えないのだが、これは、一体、何だ？ 機織り機の置いてある別棟の機屋はたやの窓か？ それとも何か独特の（機織り機に似た）構造の窓のことか？（「日本国語大辞典」にも「機窓」は乗らない。ネットで引っ掛かるのは、これ、飛行「機」の「窓」である。）——その窓を開ける（「明けて」の用字も気になるが暫く「開けて」の意で採る）のは「燕」（「つばくら」と訓じていよう）のため、というのは——例えばその機屋の内に燕が入り込んでいて巣を作っていたから、その巣に親鳥を通わすために機屋の窓を開けた——というシチュエーションが自然に浮かんでそこだけは腑に落ちるのだが、しかし下五でまた躓く。そこで機はたを織るのではなく、手で何かを「縫」

っているからである。これは何故？……これは貧しい私の知恵では……久女はこの時、機を織ろうと機屋へ入ったのだったが、気がつけばその屋内には燕が巣を作っており、その中には既に沢山の子が生まれていた（だからこそ餌を運ぶ燕を通わせるために「機」屋の「窓」を「明け」（開け）たのである）。だから……その燕の子たちを驚かさぬために久女は大きな音の出る機を織るのはやめにし、静かに別な手縫い仕事をそこで始めた……という牽強附会の謗りを受けそうな解釈しか出来ない。……私は……もしかすると……とんでもない思い込みと誤読をしているのかも知れない（でなければここまでの不審と解釈への自信のなさは募らぬはずだから）。どうか識者の御教授を乞う。目から鱗の解釈をお願いしたい。」

訪ふを待たでいつ巢立ちけむ燕の子

「やぶちゃん注：本句集は明らかに季題ごとに纏めたものであるから、この句が前句と必ずしも繋がるものとは言えないが、もし、前句が私の推測したような意であるとし、本句がその後日の同じ場所での詠とすれば、私は腑に落ちるのである。」

むきかはる通風筒に蚊喰鳥

「やぶちゃん注…「通風筒」これは炭鉱の坑内の換気のための
それではあるまいか。「蚊喰鳥」蝙蝠の別名。夏の季語。」

掃^{ひた}き^た斑^あびて掃^{ひた}き^た移^{うつ}る

掃^{ひた}き^たしわがよる机大いなる

雨のごと降る病葉の館かな

夕顔に水仕もすみてたゝずめり

「やぶちゃん注…昭和四（一九二九）年三十九の時の作。「水
仕」は「みづし（みずし）」と読み、台所で水仕事をする事。」

夕顔やひらめきかゝりて襞^{ひだ}深く

「やぶちゃん注…昭和二（一九二七）年の作。」

夕顔を蛾の飛びめぐる薄暮かな

「やぶちゃん注…昭和三（一九二八）年の作。」

逍遙や垣夕顔の咲く頃に

「やぶちゃん注…昭和二（一九二七）年の作。」

夕顔を見に来る客もなかりけり

「やぶちゃん注…昭和四（一九二九）年三十九の作。個人的にこの夕顔句群、頗る附きで好きである。但し、以上に注した通り、実際には連作ではない。」

仮名かきうみし子にそらまめをむかせたり

忍び來て摘むは誰が子ぞ紅苺

苺摘む盜癖の子らをあはれとも

睡蓮や鬢に手あてて水鏡

おのづから流るゝ水葱なづなの月明り

「やぶちゃん注：単子葉植物綱ツユクサ目ミズアオイ科ミズアオイ *Monochoria korsakowii* の別名。[ウィキの「ミズアオイ」](#)によれば、『かつては水田雑草としてよく見られたが、水路の改修や除草剤の使用などによって生息環境が悪化し、個体数が減少している』。「万葉集」では「水葱なづな」として『求愛の歌に詠まれるなど、人間に親しまれてきた。また、青紫色の花は染物に利用されたほか、食用に供されることもある』。『食用にする場合は、若芽や若葉を塩ゆでにして流水によくさらし、汁物、煮物、和え物に用いる』とある。万葉好きの久女らしい句である。」

笑みをふくんで牡丹によせし面輪かな

黄薔薇や異人の厨に料理會

「やぶちゃん注：大正八（一九一九）年二十九の時の作。「黄

薔薇」花言葉は——あなたを恋します／友情／友情／献身／可
憐／美／さわやか——薄らぐ愛／恋に飽きた／別れよう／誠
意がない／不貞／嫉妬……」

貧しき家をめぐる野茨月貴と

「やぶちゃん注…大正七（一九一八）年二十八の時、本格的な
作句最初期の作と思われる。私はこの句が好きである。」

夏草に愛慕濃く踏む道ありぬ

月光揺れて夏草の間を流れかな

露むくやまた襲ひきし齒のいたみ

住みかはる扉の蔦若葉見て過し

厨着ぬいでひとり汲む茶や若楓

「やぶちゃん注…「厨着」は「くりやぎ」と読むか。」

傘にすけて擦りゆく雨の若葉かな

茄子苗の日除し置いてまた縫へり

茄子もぐや日を照りかへす櫛のみね

「やぶちゃん注…私偏愛の久女の句。このハレーションは凄
い！」

茄子もぐや天地の祕事をさゝやく蚊

「やぶちゃん注…私偏愛の久女の句。蚊の音が気になるのはね
……それは私たちの悩ましい秘め事を……私たちの耳元で囁
いているからなのだった……」

富家の茄子我つくる茄子に負けにけり

月に出て水やる音す茄子畠

牛蒡葉に雨大粒や竿入るゝ

葉がくれに星に風湧く槐かな

關市俳句會 下ノ關にて

簀戸たてゝ棕櫚の花降る一日かな

「やぶちゃん注…「簀戸」は「すど」と読み、よしず葭簀を張った戸のことで、「棕櫚」とともに夏の季語である。季節と場所及び年譜の記載からは、大正八（一九一九）年五月の年譜にある『虚子先生歓迎関門俳句大会（下の関市三日会倶楽部）出席』の折りの句と思われる。久女二十九歳。」

針もてばねむたきまぶた藤の雨

寂しがる庵主とありぬ唐菖蒲

「やぶちゃん注…「唐菖蒲」は通常は「とうしやうぶ（とうしようぶ）」で单子葉植物綱キジカクシ目アヤメ科グラジオラス

属 *Gladiolus* に属するグラジオラス類。本邦には自生しない。オランダショウブ（阿蘭陀菖蒲）ともいう。属名はラテン語で古代ローマの「剣」の意「*Gladius*」（グラディウス）で葉が剣に似ることに由来するとされる。日本では明治時代に輸入されて園芸種として栽培されている。夏期七く八月にかけて開花する春植え球根として流通しているものが一般的で、晩夏の季語としている（[以上はウィキの「グラジオラス」に拠る](#)）。春咲き品種もあり、それを読んだら春であることを句や前書に記さねばならぬのを有季俳句の掟とするのなら、こんな馬鹿馬鹿しいことはない。」

子犬らに園めちやくちやや箒草

「やぶちゃん注…「箒草」は個人的には「ははきぐさ」と読みたい。ナデシコ目ヒユ科バツシア属ホウキギ *Bassia scoparia*。黄緑色の小花を穂状につける晩夏に合わせて季語としているが、秋の鮮やかに赤く色づく頃こそ歳時記としては相応しいように季語嫌いの私としては強く感じる。」

つれづれの小簾捲きあげぬ濃紫陽花

「やぶちゃん注」：「濃紫陽花」無論、ミズキ目アジサイ科アジサイアジサイ節アジサイ亜節アジサイ *Hydrangea macrophylla* で濃紫陽花なる種が存在するわけではない。俳句では比較的よく見かける語であり、仲夏の季語とするらしいが、この語、一見、情緒的には響きはよいが、すこぶる非博物学的でいい加減な俳語（季語）である。その証拠にこの紫陽花の色は読者によって紫陽花の別名の文字通り、「七変化」「八仙花」「四葩変化」よひらへんげすることになるからである（私は鑑賞者の自在勝手にそれはそれでよいと思う人間だが伝統俳句でそんな許容は噴飯物であろう）。「万葉集」に既に現れる「味狭藍・安治佐爲」（あぢさゐ。みなちのしだい）。源順の「和名類聚抄」では「阿豆佐爲」の字を当てている」という語の語源説の有力な一つは、「あづ」（集まる）に「さあい」（真の藍色）から生まれたとすることや「赤」「紫」ではなく一般的には青や空色が「紫陽花」（但し、ウイキの「アジサイ」によれば、『日本語で漢字表記に用いられる「紫陽花」は、唐の詩人白居易が別の花、おそらくライラックに付けた名で、平安時代の学者源順がこの漢字をあてたことから誤って広まったといわれている』とある）の一般的な囁目の色彩イメージであると考えれば、「赤」や「濃い紫」ひい

ては「白」を心象像に交えてはいけないことになるのであろうか？　ところがそもそもが「濃」とつけるのはその発色が最も鮮烈であることを指すから、例えば久女の句としてこの句をイメージするのに「赤」をそこから排除することは私には到底あり得ない。ところが、諸記載を見るとやはり俳諧サイトでは「濃紫陽花」とは濃い青の種を指すとする見解が主流のように見受けられる。そんな最大公約数的な陳腐感覚の歳時記事大絶対主義こそ非芸術的であり非博物学的であり非科学的であると私は断ずるものである。」

箒目に荅をこぼす柚の樹かな

「やぶちゃん注：ムクロジ目ミカン科ミカン亜科ミカン連ミカン属ユズ *Citrus junos*。五月頃に花が咲き、六、七月頃に実成、秋に黄色く色づくが、その時期で晩秋の季語とするらしい。二月末の今も私の家の下の庭には芳しい柚子の実はたわわに実っているというのに。」

蓮咲くや旭まだ盪に暑からず

「やぶちゃん注…歳時記では「蓮」は晩夏だそうである。この句は晩夏の句ではない。寧ろ「旭まだ盞に暑からず」こそが、総て季の詞ならざるものなしと喝破した芭蕉の言った優れた真正の「季の詞」というべきである。季語とは一箇の句の内的世界に於いて自然に湧き出る自然の持った本来的なパトスであると私は思っているのである。」

水暗し葉をぬきん出て大蓮華

日を遮る廣葉吹きおつ日ごと日ごと

汲みあてゝ花苔剥げし釣瓶かな

「やぶちゃん注…「花苔」（はなごけ）は仲夏の季語だそうである。無論、俳諧で用いられる「花苔」はそんな「生物種」を指しているわけではない（但し、蘚苔類ではなく地衣類に生物種としてのハナゴケ科ハナゴケ属 *Cladonia rangiferina* は存在する。極地及び温帯の高山帯に分布し体は灰白色、密に繰り返し分枝して長さ五センチメートル以上の樹枝状となっている。別名トナカイゴケとも。因みにこれを有季定型として詠ん

だ場合は「ハナゴケ」と片仮名表記した上、前書きに「*Cladonia rangiferina* を詠める」と記して、しかも句中には別の季語を配して初めて有季定型俳句として許されるということになる）。この「花苔」とは蘚類・苔類・ツノゴケ類（以上三類を蘚苔類とする）・地衣類から立ち上がる生殖器官としての胞子体等の視認形態（苔類では雌器床・雄器床、蘚類・地衣類では胞子囊）の総称で、梅雨の頃に形成された白色や薄紫色のそれを「花」に見立てて言った語である。」

瓜一つ残暑の草を敷き伏せし

「やぶちゃん注……ああ、いいな……この句！」

櫓山臨海學校 一句

麥湯湧かしくど日もすがら松の根に

「やぶちゃん注…橋本豊次郎・多佳子夫妻の別荘櫓山荘（現在の小倉北区中井浜。「櫓山」は地名としては「やぐらやま」と読む。江戸時代、この一帯は筑前と豊前の国境近くで海に突き

出た地形から「堺鼻」と呼ばれ、この小山には小倉藩見張番所があつた）の敷地内にあつた広場ではしばしば林間学校や催しが行われた。北家登巳氏のサイト「北九州のあれこれ」の「[山莊跡](#)」を参照されたい。」

親雀キヤベツの蟲を喰へ飛ぶ

秋來ぬとサファイア色の小鰯買ふ

秋のごと瞳澄めば嬉し鏡拭く

袂かむやまなじり上げて秋女

秋暑し熱砂にひたと葉つば草

「やぶちゃん注…「葉つば草」同定不能。福岡の方言か？ 識者の御教授を乞う。」

障子しめて灯す湯殿や秋涼し

新涼や紫苑をしのぐ草の丈

「やぶちゃん注：「紫苑」キク目キク科キク亜科シオン連シオン *Aster tataricus*。別名はオニノシコグサ（鬼の醜草）・ジユウゴヤソウ（十五夜草）。参照した[ウィキの「シオン（植物）」](#)によれば、草丈は一八〇センチメートル程までになり、『開花期は秋で、薄紫で一重の花を咲かせる』。本邦では園芸種として『花を觀賞するためによく栽培されている』が、『九州の山間部に、少数であるが自生している』ともあり、また、『その花の色から紫苑という色名の語源となった。花言葉は「君の事を忘れない」・「遠方にある人を思う」』であるとする。」

新涼や日當りながら竹の雨

新涼の雨吸ひ足りて砂畠

新涼やほの明るみし柿の數

新涼や濡れ髪ほのと束ねぐせ

新涼や障子はめある化粧部屋

秋涼し朝刊をよむ蚊帳裾濃すそど

「やぶちゃん注」裾濃」染めや織りの技法の一つ。同系色で、上方を淡くし、下方に向うに従って次第に濃くしてゆくもの。」

二百十日の月穩やかに芋畠

二百十日の月玲瓏と花畠

編物やまつ毛目下に秋似日かげ

白豚や秋日に透いて耳血色

秋の日や啼き疲れ寝し縛り犬

秋の夜の敷き寝る袴たゝみけり

汝を泣かせて心とけたる秋夜かな

さみし身にピアノ鳴り出よ秋の暮

うそ寒や黒髪へりて枕ぐせ

朝寒の窯焚く我に起き來る子

朝寒や小くなりゆく蔓の花

朝寒や菜屑ただよふ船の腹

朝寒の杉間流るゝ日すじかな

「やぶちゃん注…「日すじ」はママ。」

朝寒に起き來て厨にちづめる子

朝寒の峯旭あたり來し障子かな

汲みあてゝ朝寒ひづく釣瓶かな

鬘結うて前髪馴れぬ夜寒かな

齒きあはす夜寒の膝や机下

歸り路の夜寒くなれる句會かな

髪くゝるもとゆひ切れし夜寒かな

夜寒さやひきしぼりぬく絹糸きぬの音

夜寒灯に厨すむわれを待つ子かな

先に寢し子のぬくもり奪ふ夜寒かな

ひろ葉打つ無月の雨となりにけり

夜露下りし芝生を踏みて辭しにけり

秋晴や何を小刻むよその厨

秋晴や岬の外の遠つ洋

秋空につぶてのごとき一羽かな

湯さめして足袋はく足や秋の雨

秋雨に縫ふや遊ぶ子ひとりごと

秋雨に髪卷く窓を明けにけり

燈に縫うて子に教ゆる字秋の雨

「やぶちゃん注…「燈」は底本の用字。」

秋雨や母を乗せ去る幌車

片足あげて木戸押す犬に秋の雨

よそに鳴る夜長の時計數へけり

髪巻いて夜長の風呂に浸りけり

われに借す本抱へ來よ夜長入

いつつきし膝の繪具や秋裕

文使や子規忌に缺けしかの女より

「やぶちゃん注…「缺けし」は底本では「欠」。原句のも「欠」である可能性がある。昭和五（一九三〇）年四十歳の時の作。「子規忌」正岡子規の命日は九月十九日。糸瓜忌・獺祭忌ともいうが韻律の上で最も経済的で張りのある音のこれを久女なら選ぶであろう。そして女弟子と思われるその「女」に対する彼女の癪の強さが、初五の「ふみづかひや」の字余りによって増幅されてひしひしと伝わってくる気が私にはする。これは恐らく前年に大阪に転居した橋本多佳子（当時三十一、当時の彼女の俳号は「多加女」であつた）である。」

走馬燈に木の間の月や子らは寢し

走馬燈俄の雨にはづしけり

「やぶちゃん注…両句とも「燈」は底本の用字。私は走馬燈を偏愛する人間である。」

髪すねて遂に留守しぬ秋祭

「やぶちゃん注…きつと娘昌子を詠んだものであろうこの句、私はその光景が見えるまでに愛おしい……。」

岐阜提灯うなじを伏せて灯しけり

岐阜提灯庭石ほのと濡れてあり

「やぶちゃん注…私は個人的に岐阜提灯が好きである。」

蟲なくや帶に手さして倚り柱

秋蝶の羽すりきれしうすさかな

「やぶちゃん注…久女マジック。蝶は久女になる——」

玄海の濤のくらさや雁叫ぶ

西日して薄紫の干鰯

鯨煮るや夜寒灯にありし子等は寝て

花散りて甕太りゆく柘榴かな

「やぶちゃん注…大正八（一九一九）年二十九の時の作。この句、何か慄つとする妖しさがある。」

降り足らぬ砂地の雨や鳳仙花

大輪の藍朝顔やしぼり咲き

朝顔や濁り初めたる市の空

摘み摘みて隠元いまは竹の先

「やぶちゃん注」：「摘み摘み」の後半は底本では踊り字「へ」。

あてもなく子探し歩く芒かな

「やぶちゃん注」：私偏愛の句である。」

相寄りて葛の雨きく傘ふれし

白萩の雨をこぼして束ねけり

草苅るや萩に沈める紺法被

箒おいてひき抜きくべし髭鬚かな

「やぶちゃん注」：私偏愛の句。「髭鬚」は「けいと」と読んでいよう。これを「けいと」と読む例は、例えば白神山地は西津軽郡深浦町にある、十二湖の一つ「鶏頭場の池」を「けいとばのいけ」（或いは「けとばのいけ」とも）と読む例を挙げれば

十分であろう。なお、この「髻髷」は残念なことに、後に続く二句が葉鶏頭の句であることによつて——私にとつての第一読の印象は間違ひなくあの鮮烈な紅い色そして独特の形状の花穂を持ったヒユ科ケイトウ属 *Celosia argentea* であつたのだが——鶏頭ではなくて葉鶏頭の可能性が高いことが分かる。ナデシコ目ヒユ科 *Amaranthoideae* 亜科ヒユ属ヒユ亜種ハゲイトウ *Amaranthus tricolor* var. *mangostanus* である。……しかし……ここに至つても個人的にはやはり、これは葉鶏頭ではなく真正の鶏頭の方が「絵」になると感じてしまう私がいる。孰れも晩秋の季語であるから、必ずしもこれを葉鶏頭に同定する必要はないし、久女の家庭に両種が植えられていたとしても何らおかしくはない。ここはやはり私はあの真正の鶏頭と採つて鑑賞する。

ここで久女は自身の行動を映画のようにモニタージュしている。

——庭掃除をする私

——ふと何か堪走つた視線を送る私の眼！（クロース・アップ）

——箒を タン！ と置き放つ私

——花壇に近づく私

——枯れかけ萎みかけた赤い鶏頭（クロース・アップ）

――齒む私の手（クロース・アップ）

――力を込めて一気に！ ひき抜く！

――庭の落ち葉焚き

――投げ入れられる赤い鶏頭

――くすぶり煙を上げて燃え始める鶏頭

――見つめる私……

……そうして……その「私」が、あの妖艶な久女の顔であつて
みれば……この句、凄絶と謂わずして何と言おう。」

葉雞頭のいただき踊る驟雨かな

葉雞頭に土の固さや水沁まず

草の花靡くところに井戸掘らん

草花にかげ澄む纜をほどきけり

「やぶちゃん注…「纜」は船尾にあつて船を陸につなぎとめる
「ともづな」「もやいづな」であるが、ここは「つな」と訓じ
ていよう。」

穂に出でて靡くも哀れ草の花

「やぶちゃん注…前句「草花」及びこの「草の花」は秋に咲く草々の花で晩秋の季語である。」

露草や飯嘔くまでの門歩き

「やぶちゃん注…竈で朝食の御飯が炊けるまでの、一時のそぞろ歩きの折りの、朝露に瑞々しい花の色を見せている露草の
瞩目吟。」

草むらや露草ぬれて一ところ

花蕎麥に水車鎖して去る灯かな

花蕎麥や濃霧晴れたる莖雫

浅間曇れば小諸は雨よ蕎麥の花

聖壇や日曜毎の秋の花

好晴や壺に開いて濃龍胆

龍胆りゅうたん莊園背戸に籬せず

龍胆や入船見入る小笹原

「やぶちゃん注…角川学芸出版二〇〇八年刊の坂本宮尾「杉田久女 美と格調の俳人」に、『龍胆も久女が好んだ花で、門司近くの大里だいりの野にこの花を摘みに行った』として、前の二句と、

龍胆の夕むらさきは戻りけり

の句を引く（「戻りけり」は「かげりけり」と読む）。そして、『一句目、気持ちよく晴れた日に、摘んできて活けた野の花が咲けば、家の中にも爽やかな秋の気が満ちてくる。「好晴こうせいや」という固い響きの上五は、「濃龍胆こりゅうたん」という古武士のように凛とした花のイメージ、また画数の多い漢字三文字とよく調和している』と、読みを含め、まさに目から鱗の評釈をなさってお

られる。なお、大里は現在の福岡県北九州市門司区の地名及び地域名で門司区の南西部に位置する。参照した[ウィキの「大里」](#)によれば、『九州最北端の宿場町として古くから繁栄し』、『かつては内裏だいりであつたが、享保年間』（一七一六年～一七三六年）『に大里に変更された』。この旧地名は、寿永二（一一八三）年にこの地に安徳天皇の御所であつた柳の御所があつたことに由来し、現在、御所神社がある門司区大里戸ノ上一丁目辺りが、その柳の御所の比定地となっているとある。『享保の頃、この地に海賊が出没し、内裏の海に血を流すのは恐れ多いとして大里に変更された』とあり、明治三五（一九〇二）年の明治天皇熊本行幸の際には『御所神社の社殿が明治天皇の休憩場所に使われた。安徳天皇の慰霊が目的だったとされる』ともある。』

この夏やひさご作りに餘念なく

咲き初めし簾越しの花は瓢垣

「やぶちゃん注：昭和四（一九二九）年三十九歳の時の句。「簾越し」は「すごし」、「瓢垣」は「ふすべがき」か「ふくべがき」か「ひさごがき」か。私は初読、個人的な韻律の好みから「ふ

すがき」と読んだが、次の句の「繭瓢」を角川書店昭和二七（一九五二）年刊の「杉田久女句集」では「まゆひさご」と読んではいから、「ひさごがき」か。」

露けさやうぶ毛生えたる繭瓢（まゆひさご）

「やぶちゃん注：昭和二（一九二七）年三十七歳の時の句。「繭瓢」とは聞きなれない語であるが、後掲する昭和二（一九二七）年九月発行の『天の川』に掲載された、随筆「瓢作り」によって、久女が好んだ自庭での瓢簞作りの中で、『子供のつくつてゐるので、二尺たらずのかはいゝ棚に小まゆ程のが、二つ三つ漸く最近になりはじめた』とある、まさにその「小まゆ程の」ものを「繭瓢」と呼んでいると考えてよからう。造語っぽいが、ヒョウタンを育てたことのある方や親しく見たこのとある方は、当該随筆を読まずともこのイメージは比較的容易に腑に落ちるものである。少なくとも私はそうである。なお、当時久女三十七歳、長女昌子は満十六、次女美津子は十一歳であった。」

青ふくべ地をするばかり大いさよ

晩涼やうぶ毛生えたる長瓢

「やぶちゃん注…底本は「晩涼」であるが、ここは後掲する久女の随筆「瓢作り」の表記を採用した。」

颯風に傾くまゝや瓢垣

枯色の華紋しみ出し瓢かな

「やぶちゃん注…夕刻に咲くスミレ目ウリ科ユウガオ属 *Lagenaria siceraria* 種 変種 ヒョウタン *Lagenaria siceraria* var. *gourda* の白い花卉には独特の紋様がある。[グ](#)

[ーグル画像検索「ひょうたん 花」。](#)」

反古入れの大瓢箪に左右の塵

「やぶちゃん注…「瓢箪」の「𪛗」の字は底本のママ。

以下、底本第二巻にある昭和二（一九二七）年九月発行の『天の川』に掲載された、随筆「瓢作り」の全文を恣意的に正字化して示す。太字は底本では傍点「ゝ」、踊り字「へ」「へ」は正

字に直した。

*

瓢作り

今年私は瓢作りを楽しみに、毎朝起きるとすぐ畠へ出てゆく。まづ門傍のポプラの枝へはひ登つて、ぶらりと下がつてゐる大瓢が一つ。これはまるでくりのない、丁度貧乏徳利みたいにそこ肥りのした奴。私がこないだ歸子先生にお目にかかりに別府迄行つてきて、汗の單帶をときすてるとすぐ見に行つたら、ほんの二日の間に見違へるほど快よくまつ青く太つてゐた。あんまりのつぺりとくくりがないので一體瓢箪だらうか白瓜か、もしくは信州邊でゆふごと言つてゐるかんぺうを作る瓜なのか、などと家中で評定とりどりだつたが、やはりずばらながら瓢箪であるらしい。實に大まかな氣樂げなかつかうをして、夕立雨の時などはうぶ毛の生えたまつ青な肌をポトポトと雫がつたふ。夕立晴の雲がうごく頃には、柄の長い純白な瓢の花が、涼しげに咲き出す。この外にもポプラの樹に這ひついてゐる瓢が三木。之れはアダ花が咲くのみで、まだドンな形のとも見當がつかない。

一體うちでは柵をつらうつくらうと話しあつてゐる中に、樹に垣に地面にどの蔓もが青々と這ひまはり、そこら中に花が咲き出したのであつた。

さて私は、茄子や葉鶏頭の露にふれつつ徑を歩むと、そこには瓢の葉をきれいにまきつけた低い垣根が、あちこちに長瓢をぶら下げてゐた。この瓢嚢は頸の長い、瓢逸ないかにもごまな呑氣げなかほして、一とゝころに四つも五つもよりあひ、はては蔓が重くなつて地べたに尻を落ちつけてしまつてゐるものもある。こつちのえにしだの枝に抱きついてゐる一尺餘りの長瓢は、丁度窓から見るのにころあひな長短で、かつかうよく宙ぶらになつてゐた。そしてその一つの蔓先は、隣の爺さんの畠へ垣根ごしに侵入し、そこに尻曲りの長瓢が、くびをもたげかげんに二つ。ころりと地上に露出してゐる。そこぎりで蔓先をとめてしまつたので徑のへりに尻をむけたこの青瓢嚢は、時々雨露をいつぱいふりため、青草を敷いて涼しげに太つてゆくのであつた。幸ひに朝夕潮あびのゆきかへりにこの畠徑をぬける近所の子供らにももがれず、此の頃はむしろに敷きかへて先づ健在。

それに引かへ、垣根の方の長瓢は敷わらも吊もかけなかつたので、地面につけた尻の先がすこし黒いしみになりかけて來た。

二三目前の朝、露つばい草の間にかぐんで私は瓢を吊したり、わらをしいたりしてやつたが、今朝行つて見ると、折角きれいに抱きついた青い葉は、むざんにうらがへしに亂れ、瓢は誰かに頗るぐわんこに荒縄でうごきのとれぬ様しばらくりあげられてゐた。そして鄰畠の南瓜の蔓が勢よく幾筋も瓢垣ねのあほひからこちらへ侵入してゐた。

旭はすでにポプラ並木を透して光り、征矢の如く輝き出し、大向日葵の濃蕊の霧がきらめく。市街の空は煤煙でにがりそめ、海上の汽笛にあはせて、所々の工場の笛がなりつゞける。私は更らに愛すべき千成瓢罍の垣へと歩を移し、きまりの様にかがみこんで眺め入る。

蔓毎にたれ下つた小瓢罍の愛らしさ。くゝり深く丸々と小肥りの青い瓢はうぶ毛が柔らかくはえてゐる。小さい蟻が這つてゐたり、時には曉雨の名残の小つぶな玉が汗をかいたやうにたまつてゐたりして一層愛着をまさしめる。子供らも毎日こゝへ必らずしやがみにきては、二十五なつてゐるとか、葉のかげにもう三つなつてたとか、數へてはたのしみにしてゐた。

更らにその横手の樹に、やせこけた一本の蔓が中位の瓢をつけてはひのぼつてゐた。澤山の瓢の中これが一番形も面白く俗ぬけがしてゐて、しかもひねくれすぎず、私の一番好きな瓢な

のであるが、肥が足らぬのか木かげのせみか一向ずばずばと成長せず、ほんとの一瓢きりなのである。

最後にもう一本。之れは子供のつくつてゐるので、二尺たらずのかはいゝ棚に小まゆ程のが、二つ三つ漸く最近になりはじめた。

此の夏や瓢作りに餘念なく

青々と地を這ふ蔓や花瓢

晩涼やうぶ毛はえたる長瓢

數年前俳句をつくりはじめた頃、板櫃河畔の假寓でも大瓢嚙をつくつたが、その美事な青瓢は軒に吊るす中作りかたを知らず腐らしてしまった。

くくりゆるくて瓢正しき形かな

梯子かけて瓢のたすきいそぎけり

今年はどうかして一つでも實が入つて、ほんとの瓢嚙を得たものである。（八月十日雨の草庵にて）

（「天の川」昭和二年九月）

*

・「いかにもごまな」の「ごまな」は不詳。底本にも右にママ注記がある。

・「板櫃河畔の假寓」大正三（一九一四）年から大正七年八月

に小倉市堺町に移るまで住んでいた、小倉市外の福岡県企救郡板櫃村字日明の家（何と美しい住所名であろう）。長女晶子氏の年譜によれば、『郊外の板櫃川河口に面し、極楽寺橋より五〇メートルぐらいの場所。海鳴りも聞こえ、朝夕の潮の干満が家の石段まで及んだ』とある。北家登巳氏のサイト「北九州あれこれ」の「[板櫃川河口 小倉北区](#)」に詳細な解説や地図とともに、まさにその頃、久女が住んでいた家が写真で紹介されている。

この実に巧みのない美しい文章がそのまま、前に掲げた瓢箪の句群の優れた評釈、自然な映像化を誘って余りある。」

唐黍を焼く間待つ子等文戀へり

「やぶちゃん注…私が莫迦なのか、下五の意が今一つ、分からない。句柄から「文」を恋うているのは子等であるが、その相手は今ここにいない父か、実家の親族の久女方の祖母か？「子等」とあり、「唐黍を焼く」で季語は秋だから、久女方の祖父は考えにくい（次女光子は大正五（一九一六）年生まれであるが、久女の祖父廉蔵は大正七年七月に脳溢血で死去している。四歳の昌子はいいとして、未だ一歳の光子は「唐黍を焼く

間待つ子等」「文戀」う「子等」には含まれ得ないからである。そうすると、これはもう少し後年、大正九年八月に信州松本に父の骨を納骨に行った際（恐らく二人の子を連れて）、腎臓病を発症、東京上野の実家へ戻って入院加療に入り、そのまま実家にて療養に入った（この時、当然の如く、専ら久女側からの意志で離婚問題が生じたことが年譜に記されてある）。この時の夫宇内との別居は約一年の及んでいる（小倉への帰還は大正十年七月）。この句はその病み上がりの大正九年秋の句かも知れない。父と離れて数ヶ月、昌子九歳・光子四歳、「唐黍を焼く間待つ子等」が父の「文戀」う「子等」であって不思議ではない。」

紅葉狩時雨るゝひまを莊にあり

「やぶちゃん注…「莊」はつい、櫓山莊を想起してしまう。何故、「しまう」かであるか？——そう想起すると、この句柄には必ずしもしつとりと落ち着いたものとしての感懷の背後に、そうでない微かな心の動きが感じられようになってしまうからである。しかも私はそれを秘かに楽しんでもいるのであるが。」

知らぬ人と黙し拾へる木の實かな

「やぶちゃん注…これもやはり櫓山荘っぽい。」

髪よせて柿むき競ふ燈下かな

「やぶちゃん注…大正八（一九一九）年「燈」は底本の用字。
角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」は下五を
「燈火」とする。従えない。これは作句年代から櫓山荘ではな
い。」

甕たのし葡萄の美酒がわき澄める

「やぶちゃん注…これもまたしても櫓山荘っぽい。但し、本句
集は編年型ではあるものの、季題別編集であるから、これらの
句が全く別々のシーンの中で作られた（それは全く同じか幾つ
か同じ場所かも知れず、また、そうではないのかも知れない）
可能性も当然あるわけではある。」

くぐり摘む葡萄の雨をふりかぶり

みがかれて櫃の古さよむかご飯

露けさやこぼれそめたるむかご飯

蔓起せばむかごこぼれぬし濕り土

むかごもぐまれの閑居を訪はれまじ

菊畠に干竿躍りおちにけり

菊苗を植ゑる母にきかすこと

菊の日に雫振り梳く濡毛かな

しろしろと花びらそりぬ月の菊

白菊に棟かげ光る月夜かな

日の隣に羽織ぬぎ捨て菊に掃く

夏菊に病む子全く癒えににけり

黄豆菊に汲みあぐる水や輝けり

「やぶちゃん注…「黄豆菊」は「きまめぎく」で黄の小菊であろう。井筒の脇に一叢をなしていると見たい。」

野菊摘んで水にかぐめば愛慕濃し

咲きほそめて花辨するどき野菊かな

わが傘の影の中こき野菊かな

「やぶちゃん注…菊は正しく久女の花である。菊枕などの話ではない。清廉にして気品高く、そうしてどこか慄つとさせるような堪の鋭い香を匂わせる、稀有の才媛久女にとって、まさに菊の香は彼女そのものである。」

萬難に堪えて萱草五年振

「やぶちゃん注：「萱草」は「くわんざう（かんぞう）」で単子葉植物綱ユリ亜綱ユリ目ユリ科ワスレグサ属（標準種はワスレグサ *Hemerocallis fulva*）に属する多年草の総称で、ノカンゾウ *Hemerocallis fulva* var. *longituba*・ヤブカンゾウ *Hemerocallis fulva* var. *kwanso*・ハマカンゾウ *Hemerocallis fulva* var. *littorea*・ユウスゲ *Hemerocallis citrina* var. *vespertina*・ニシコウキスゲ（ゼンテイカ・禅庭花）*Hemerocallis dumortieri* var. *esculenta* などを含む。葉は刀身状で、夏に黄や橙色のユリに似た大きい花を数個開く。多くの園芸品種や近縁種がある。「けんぞう」ともいう（生薬として知られる双子葉植物綱マメ目マメ科マメ亜科カンゾウ（甘草）属 *Glycyrrhiza* とは全くの別種であるので注意）。ワスレグサ（忘れ草）という和名は概ね花が一日限りで萎むことに由来し、英語でも“Daylily”と呼ばれる。」

日面に揺れて雪解の朱戀かな

「やぶちゃん注：「朱戀」は「ざぼん」でムクロジ目ミカン科

ミカン属ザボン *Citrus maxima*。ボンタン・ブンタンとも呼ばれる。[ウィキの「ザボン」](#)によれば、『原生地は東南アジア・中国南部・台湾などであり、日本には江戸時代初期に』『鹿児島県の阿久根市』に伝わったとされ、『第二次世界大戦前にはジャボンと呼ばれるのが一般的であり、これは文旦貿易に関与したジアブントアン（謝文旦）の略と考えられるが、ジャボンから転じたザボンの名前については、ポルトガル語の *zamboá*（元の意味は「サイダー」）から転じたという説もある』とある（但し、最後の説には出典要請が附されてある）。

塀そとの盧橘^{たちばな}かげを掃き移り

「やぶちゃん注：「盧橘」普通に我々が呼ぶ橘^{たちばな}はムクロジ目ミカン科ミカン亜科ミカン属タチバナ *Citrus tachibana* であるが、「盧橘」（読みは「ろきつ」）と書くと、一般にはミカン属ナツミカン *Citrus natsudaidai* 又はミカン科キンカン属 *Fortunella* のキンカン類の別名としての用法が一般的ではあり、また、盧橘で食用柑橘類を広く総称する語としても用いられる。個人的にはキンカンがこの句柄には合うと思っている（私の亡き母が好きな木で今も私の家の猫の額の庭に実をつ

けているから。」

落葉道掃きしめりたる箒かな

わが歩む落葉の音のあるばかり

「やぶちゃん注…私の愛する久女の一句である。」

栗むくやたのしみ寝ねし子らの明日

ゆく年や忙しき中にもの思ひ

元旦や束の間起き出で結び髪

松の内社前に続べし舳かな

松の内海日に荒れて曇けり

松とれし町の雨來て初句會

正月や胼の手洗ふねもごろに

「やぶちゃん注…老婆心乍ら、「胼」は「たこ」で胼胝のこと、「ねもごろに」は後に音変化した「懇ろ」の万葉以来の古形の形容動詞。清音「ねもころに」の方が古いか。」

戯曲讀む冬夜の食器漬けしまゝ

「やぶちゃん注…大正一一（一九二二）年の作。久女が「冬の「夜」に「食器」を厨の桶の中に「漬けしまゝ」に食い入るように「讀」んでいる「戯曲」——となれば——これは如何にもながら——イプセンの「人形の家」——でなくてはなるまい——。編年式編集の角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」ではまさにこの句の後に「足袋つぐやノラともならず教師妻」が載る——」

水焚や入江眺めの夕時雨

「やぶちゃん注…「水焚」は「みづたき（みずたき）」で水辺での櫓火と思われるが、これもロケーションから見て私は高い確

率で櫓山荘での景と思う。」

訪れて山家は暗し初時雨

初風げる湖上の富士を見出でけり

「やぶちゃん注…「初風げる」「初風」は一般には「はつなぎ」で、元日の風も波もない穏やかな海や湖の様をいう新年の季語であるが、私は韻律上、「そめなげる」と読みたくなる。なお、逆さ富士を写すところからは富士五湖の孰れかと考えられ、そうすると在京していた大正一〇（一九二一）年の年初の瞩目吟かとも思われるが、病み上がりの久女でもあり、不審。」

更けて去る人に月よし北の風

北風に訪ひたき塀を添ひ曲る

夫留守や戸揺るゝ北風におもふこと

北風の藪鳴りたわむ月夜かな

寄鍋やたそがれ頃の雪もよひ

寒風に葱ぬくわれに絃歌やめ

「やぶちゃん注…大正八（一九一九）年二十九の時の作。「絃歌」の「絃」は広く和楽器の琵琶・琴・三味線などの弦楽器であるが、特に三味線を弾き鳴らして歌を謳う、「絃歌の巷」ちまた「絃歌さんざめく傾城の街」という風に用いるような、町屋や遊郭での遊興のさまをいう。私はこの「やめ」という命令形に久女を強く感ずる。」

寒林の日すぢ争ふ羽蟲かな

「やぶちゃん注…「蟲」は底本「虫」。しかしこの句の場合、断然、「虫」ではなく「蟲」でなくてはならぬ。」

枯野路に影かさなりて別れけり

冬川やのぼり初めたる夕芥

「やぶちゃん注…私の偏愛の句。写生とは単なる実景ではない。タルコフスキイ風に言えば、それをスカルプティング・イン・タイムする瞬間の詩人の心象として焼き付けてこそ、その風景はまさに写「生」として「生」を享けるのだと思う。」

唇をなめ消す紅や初鏡

櫛巻に目の鬚細ずむ冬女

「やぶちゃん注…大正九（一九二九）年三十歳の時の句。「櫛巻」女性の髪のかい方の一つで、びん・たば・前髪・まげなどを紐で結んだり成形することをせず全体に一体として崩し、その束ねた髪の毛先を一枚の櫛の歯に巻きつけて、頭頂部で束ね留めただけの簡単なもの。洗髪後などの仮の髷。若い女は櫛の棟むねを上にして根を高く作り、年増は櫛の歯を上根は幾分低く結つた。」

炭つぐや髷の粉雪を撫でふいて

炭ついでおくれ來し人をなつかしむ

「やぶちゃん注…この二句、中七の確信犯の字余りが如何にも
久女らしく、心地よい。」

足袋つぐやノラともならず教師妻

「やぶちゃん注…久女一番の代表句と言ってよい。それはスキ
ヤンダラスなものであり、そうしてあらゆる意味で久女伝説の
濫觴ともなった句ではある。底本の久女の長女石昌子^{いし}さんの編
になる年譜の大正一一（一九二二）年の項によれば、『二月、
「冬服や辞令を祀る良教師」（ホトトギス2）の句をめぐり家
庭内の物議をかもす。このときの発表句は次の五句』として句
を掲げる（以下、恣意的に正字化した）。

足袋つぐやノラともならず教師妻

遂に來ぬ晚餐菊にはじめけり

戯曲讀む冬夜の食器漬けしまゝ

枯れ柳に來し鳥吹かれ飛びにけり

冬服や辭令を祀る良教師

この連作の特に奇数句の流れは確かに鮮烈である。

さて、大野林火「近代俳句の鑑賞と批評」（明治書院昭和四二（一九六七）年刊）によれば、昭和二七（一九五二）年角川書店刊の「杉田久女句集」には、

足袋つぐや醜ともならず教師妻

として収めている、とある。ところが、私の所持する立風書房版全集には、この句形が何処にも載っていないのである。これは如何にも不思議なことである。しかも、この初出形を知る人は少ないと思う（不肖、私も今回、この電子化作業の中で実は初めて知った）。以下、この一句について徹底的に追究した倉

[田紘文氏の素晴らしい論文「杉田久女の俳句——ノラの背景——」](#)

」（PDFファイル）に拠りながら簡単に述べたい。

まず、この句は大正一一（一九二二）年の『ホトトギス』二

月号に発表された句であるが、それが「杉田久女句集」（昭和二七（一九五二）年角川書店刊）では中七が、かく「醜ともならず」と推敲された形で入集されている、とある。ところが、再版本（昭和四四（一九六九）年角川書店刊）や私が底本としている立風書房全集では、初出の「ノラともならず」に再び改められている、とある。倉田氏は『久女は昭和二十一年に五十六歳で没しており、昭和二十七年の句集で「醜ともならず」となっていることについては、同句集が久女生前に自ら編集されていたということと理解できるが、再版及び全集で「ノラ」に改められたいきさつは分らない』と記しておられる。これについて倉田氏は注で小室善弘「鑑賞現代俳句」の言を引き、「ノラともならず」の斬新な措辞には及ばない、というような意見によって再び改められたのであろう、と記してはおられるが、後の全集に「醜ともならず」の句形が全く示されていないというのは、頗る奇怪と言わざるを得ない。また、作者の没後に『「ノラともならず」の斬新な措辞には及ばない、というような意見によって再び改められ』るなどということが行われているとしたら、これは文芸創作上、とんでもない行為ということになり、そう指示したのが何者であるのかは明らかにされなければならない。

考証部分はリンク先の原典で確認して戴くとして（大変興味深い）、まず倉田氏は本句が大正一〇（一九二一）年作と同定され、さらに「ノラ」は実はイプセンの「人形の家」の主人公であると同時に、当時、スキャンダラスな事件として新聞で報道され巷を騒がせた夫との離縁状の公開、そして情人宮崎龍介（辛亥革命の志士宮崎滔天の長男）へと走った歌人柳原白蓮その人であった、という極めてリアリズムに富んだ魅力的な推理を展開しておられる。最後には更に、この句の製作時期を大正一〇（一九二一）年の冬十一月初旬から十二月初旬（もっと厳密にいうなら立冬の日から投句稿が十二月十五日までに『ホトトギス』に必着するまでの閉区間）でなくてはならないと、快刀乱麻切れ味鋭く同定なさってもおられるのである（個人的にこういう拘った手法はすこぶる私好みである）。

ここで再び大野林火氏の評釈に戻ろう。氏はまず、この句集の句の『「醜」の意曖昧であ』るとして、「ノラ」の方を提示句としては採っている。これは無論、先の小室氏の謂いとともに肯んずるものではある。しかし彼は続いて、以下のように語り始めるのである（下線部やぶちゃん）。

（引用開始）

この句については久女の略歴に触れねばならない。煩をいと

わず記せば、明治二十三年鹿児島に生れた赤堀久女は、幼時、大蔵省官吏であつた父の任地、琉球、台湾等に転住、のち、東京に移り、名門お茶の水高等女学校を卒業した。同級にのち理学士三宅恒方に嫁いだ加藤やす子がいた。やす子の文才は同輩に重きをなし、久女はひそかにやす子にライバル意識を燃やした。卒業翌年（明治四十二年）、上野美術学校群画科出身の杉田宇内と結婚、収入は乏しくも、苦しくも、芸術に生きる画家の妻たり得たよろこびを久女は持った。結婚と同時に杉田宇内は小倉の中学の図画の教師となった。久女は芸術家の妻であり、たかったが、良人の宇内はただ謹直な図画の教師であり、一枚の絵も描こうとしなかった。久女はそれを責めたが、良人は謹直な教師であることに満足した。久女は金子元臣の注釈つきの源氏物語をひろげ、ノートに注釈と首引きで意識の文章を書き綴ってみずからを慰める。しかし、良人には心の触れあうことなしの生活だったのであろう。遺子石昌子は「主として私の目に写つたのは、争ひがちの家庭生活」（『久女句集』あとがき「やぶちゃん注」…ここは底本では割注でポイント落ち二行。）とその幼時を語るが、その争いでも久女だけがヒステリックに声を荒げ、良人宇内は黙々としていたのではないか。そのことがまた久女をますますいらだたしくさせたのであろうと推察する。

この句は田舎教師の妻として、凡々の日夜を送り、そこから脱しようとしないう自分を嘲る句だが、その背景には三宅やす子が着々と文名を高めて行くことへのコンプレックスもあるう。いずれにしてもこの句は久女の我のつよさが露骨に出ている句であり、それが有名にもしたのだが、親しめない。「足袋つぐや」に一抹のあわれさがただようにしても――。しかし、久女を知るには欠くことの出来ない句といえようか。

（引用終了）

これをお読み戴いて、あなたはこの句の評釈が正統にして冷静なアカデミックな（私はアカデミズムをせせら笑う人間ではあるが、少なくともこれは俳句評論という公的認知の頂点にある書籍であることは疑いようがない。実際に多くの国語教師がこれを虎の巻とし、恰も自分が鑑賞したかのように（！）俳句の授業を実際に行っている事実をかつて高校の国語教師であった私はよく知っている。詩歌ぐらい、一般の国語教師が避けようとする苦手な教材はないと言ってよく、実際に詩歌教材に関してお리지ナルな授業案を創れる国語教師というのは一握りしかないと思う。感想を書かせてお茶を濁す、やらずに読んでおきなさいというのはまだよい方で、受験勉強には不要という伝家の宝刀を抜いて堂々とスルーするのを正当化する同僚も

悲しいことに実に多かった)「近代俳句の鑑賞と批評」と名打つに足るものであると思われるか? 私は断じて到底肯んじ得ないのである! それはまず、大野氏の引用が、大野氏自身が自分の中に創り上げてしまった歪んだ久女像に合わせて、極めて恣意的に情報のパッチ・ワークを行っているという事実に於いてである。

氏は最初に、全集年譜にも載らず、倉田氏の緻密な論文にさえも出ない、加藤(三宅)やす子を登場させて、この句の遙かな淵源としている。三宅やす子(明治二三(一八九〇)年〜昭和七(一九三二)年)は作家で評論家、本名は安子。京都市生。

京都師範学校校長加藤正矩の娘で久女とは同い年である。お茶の水高等女学校卒業後、夏目漱石・小宮豊隆に師事、昆虫学者三宅恒方と結婚するも、大正一〇(一九二一)年に夫が死去すると文筆活動に入って、大正十二年には雑誌『ウーマン・カレント』を創刊、作家宇野千代とも親しかった人物である(以上はウィキの「三宅やす子」に拠る)。この句は先に示した通り、

大正十一(一九二二)年二月の発表句であり、それは確かに三宅やす子の文壇デビューと軌を一にしているように見える。新しい女性の文化進出の旗手として登場してくるかつてのライバルやす子を、この時、小倉の中学教師の妻であった久女が

強く意識したということは十分あり得る話ではある。しかし何より二人が同級生であったのは東京女子高等師範学校附属お茶の水高等女学校を卒業した明治四〇（一九〇七）年以前の話で（大野氏は久女の卒業年を一年間違えているので注意）、ここまで実際に十五年以上の隔たりがある。この句の情念が、その後、連絡も文通もなかった（と思われる）、十五年も前の特定の同級生に対するライバル感情を濫觴とする、などという仮説は私なら鼻でせせら笑う（後文で「その背景には三宅やす子が着々と文名を高めて行くことへのコンプレックスもあろう」と述べておられるが、これは一体、如何なる一次資料から論証されるものなのか？ 亡き大野氏に訊いてみたい気が強くする。そのような特殊な偏執的淵源があるとすれば倉田論文も当然それを示さないはずはない）。ともかくもこの三宅やす子を枕、否、額縁とするこの評釈の論理展開や論理的正当性は——その推理の出典や情報元の提示が殆んどない上に、如何にもな推量表現だらけの文末を見ただけでも——失礼乍ら、どう考えても全くないと私には思われるのである。

次に、夫宇内が美術の教師でありながら一枚の絵も描こうとせず、「久女はそれを責めたが、良人は謹直な教師であることに満足した」とあるが、これはどうも、久女の小説「河畔に棲

みて」の「十一」辺りからの謂いであろうということに注意せねばならない。同小説は明らかなモデル私小説ではある。しかし『小説』である。大野氏は恰もこれらを何らか客観的な事実記録や杉田家をよく知る親族知人の確かな証言によって書いているかのように読める（但し、私は次に示す二冊の「杉田久女句集」に石昌子さんの書いた文章を読んでいないのでその中にそうした叙述が全くないと断言は出来ない）。しかし、続く叙述から見えてくるのは、これらは寧ろ、既に出来上がってしまっていた久女伝説に基づく尾緒や曲解・噂の類いを都合よく切り張りした謂いであるという強い感触なのである。しかもそこで大野氏は「満足した」「良人には心の触れあうことなしの生活だったであろう」と鮮やかな断定と、久女の心に土足で踏み込んで指弾するような推定を附しては、結局、読者をして――我儘な久女は強烈な欲求不満のストレスを抱え夫を追いつめ、病的なまでに只管にその利己的な鬱憤を溜めに溜めていったのだ――と思わせるように仕向けているとしか読めない点に注意しなければならない。

続く長女昌子さんの引用であるが（この割注の書名は正確ではない。句集名は「杉田久女句集」である。また、ここには「あとかき」とあるから、これは大野氏の著作が後に改訂されたも

のと考えれば（私の所持するものは昭和五五（一九八〇）年刊の改訂増補八版である）、これは昭和二七（一九五二）年の角川書店版「杉田久女句集」ではない。何故なら、その巻末の石昌子さんの文章は「あとがき」という題名ではなく「母久女の思ひ出」であり、「あとがき」と題する昌子さんのそれは昭和四四（一九六九）年の角川書店版「杉田久女句集」の巻末にあるものだからである。但し、残念ながら私は両原本ともに所持しないので内容の確認は出来ない）、ここで大野氏は昌子さんの幼時の記憶として「主として私の目に写ったのは、争ひがちの家庭生活」という箇所をのみ採り、そこから畳み掛けるように「その争いでも久女だけがヒステリックに声を荒げ、良人宇内は黙々としていたのではないか。そのことがまた久女をますますいらだたしくさせたのであろうと推察する」と、またしても久女の異様なヒステリー状態の想像を安易に開陳し、しかも「推察」という語で読者をナーバスで病的な久女像へと確実に導こうとしているのが見てとれる。

ところが翻って、私が底本としている立風書房版全集の石昌子さんの編になる、まことに素晴らしい年譜の叙述を見ると、これ——相当に印象が違——のである。これは無論、永年、異常なまでに歪曲された久女伝説に基づく久女像を正そうと

努力されてきた昌子さん（底本全集出版の一九七九年当時で既に七十八歳であられた。ネット上の情報では既に鬼籍に入られている）の中で、美化された母親像への正のバイアスがかからなかったとは言わない。昌子さんご自身の人生経験も当然そこに加わった述懐ともなつてはいよう（因みに御主人の石一郎氏（故人）はスタインベックの「怒りの葡萄」の翻訳で知られる米文学者）。しかしともかく、その叙述はどうみても大野氏が誘導するような――内部崩壊寸前の愛情の通わぬ夫婦や狂気へと只管走る悲劇の才媛の物語――なんぞでは、これ、全くないのである。

幾つかの記載を見てみよう。

昌子さんの母の記憶は『玩具を玩具箱にしまってくれた母、その箱が張り絵で美しかったこと、破いた絵本を和綴じにして人形の絵など描き、ワットマン紙で表紙をつくってもらった』という映像に始まり、小倉での生活は『この頃の宇内は釣やテニスを趣味とし、玄海の夜釣や沖釣などをたのしんだ。田舎育ち』（宇内の実家は愛知県西加茂郡小原）『の野性的な一面があり、久女の方はおだやかな人といえた』（大正三（一九一四）年の項）。翌五年から俳句にのめり込んでいった久女は、大正六年一月の『ホトトギス』台所雑詠に初めて五句掲載、虚子や

鳴雪の好評を得て、大正八〜九年まで句作はすこぶる順調であったが、他の注で述べるように大正九年八月の実父の納骨に赴いた信州で腎臓病を発症、東京の実家へ帰ったのを機に離婚問題が起きた。同年の項には『小倉での生活が痛ましすぎると実家では考えた。旅暮らしの家庭生活に波風が多く、二十代は泣いて暮らしたと久女はよく言ったが、編者にはおとなしい静かな印象しか残っていない』（当時久女三十歳）とある。翌大正十年七月に小倉へ戻るが、その項には以下のようにある（下線やぶちちゃん）。

《引用開始》

編者の記憶では、宇内は腹の悪い人ではないかわり単純で、久女の離婚したいという気持を夜昼責めたてた。亭主関白ともいえる時代だったので、久女は泣きの涙で家を飛び出さねば喧嘩は止まなかった。宇内は病的なくらい執拗で、久女を怒らせ、目を吊り上げるまでにしなければすまなかった。怒れば久女の方が強かったにせよ、怒らせるまでに挑発するのはいつも宇内の方であつた。中学教師は嫌いといった久女の言い分は表面的な単純なものではなく、宇内の性格的なものに対する批判と非難が籠っている。

《引用終了》

「怒れば久女の方が強かった」という辺りはご愛嬌であるが、寧ろ、昌子さんはちゃんと真実をなるべく公平に語ろうとしていることが、ここからも逆に垣間見れるとも言えよう。これ以降、久女のキリスト教への接近・宇内の受洗・久女の教会からの離反、などが記されるが省略する（また、久女の人生を大きく狂わせ、まさに天地が裂けたに等しかった『ホトトギス』除名（昭和一一（一九三六）年十月）もあるが、これも宇内との関係ではないからこの注釈では記さない）。この頃から逝去するまでの部分の年譜上には、宇内との軋轢や具体的な記載は殆んど書かれていない。敢えて附記しておくなら、昌子さんは昭和一六（一九四一）年に次女光子さんの結婚式のために上京して来た久女について、『精神に精彩なく、悲痛で胸が痛んだ』と記され、また最後の対面となった昭和一九（一九四四）年七月の上京（実母赤堀さよの葬儀のため）対面の項には、『何時にもなくあせりも消えて、落ちついていた』『俳句より人間です』「私は昌子と光子の母として染んでゆこうと思う」「子供を大切に育てなさい」「もし句集を出せる機会があったら、死んだ後でもいいから忘れないでほしい」といっ』たとある。『自分に好意を持たない人とは没交渉だったにちがいないが、編者宅では子供を遊ばせてくれ、子どもにやさしかったし、「子供を

あまり叱ってはいけない。のびのびした子に育てるように」と言いおいて帰った』とある。翌昭和二十年十月末に福岡市郊外大宰府の県立筑紫保養院に入院、翌昭和二十一年（一九四六）年一月二十一日、この病院で腎臓病の悪化により久女は亡くなった。満五十五歳であった（久女は明治二三（一八九〇）年五月三十日生まれである）。夫宇内は小倉を引き上げて実家の愛知に戻ったがその際、久女の遺品は句稿・文章・原稿などを含め、宇内の手で收集整理がなされていた。この事実、夫宇内の優しさもすっかりと押さえておくべきことであろう（宇内は実際、当時の教え子たちからも非常に人気があったという）。宇内は昭和三六（一九六二）年五月十九日に七十八歳で亡くなった。さて、ここで、大野氏の物言いと昌子さんのこれらの叙述とを煩を厭わず再掲して比較してみよう（大野氏の割注と改行は除去した）。

（石昌子さんの叙述）

編者の記憶では、宇内は腹の悪い人ではないかわり単純で、久女の離婚したいという気持ちを夜昼責めた。亭主関白ともいえる時代だったので、久女は泣きの涙で家を飛び出さねば喧嘩は止まなかった。宇内は病的なくらい執拗で、久女を怒らせ、目を吊り上げるまでにしなければすまなかった。怒れば久女の

方が強かったにせよ、怒らせるまでに挑発するのはいつも宇内の方であつた。中学教師は嫌いといった久女の言い分は表面的な単純なものではなく、宇内の性格的なものに対する批判と非難が籠っている。

（大野林火氏の叙述）

しかし、良人には心の触れあうことなしの生活だったのである。遺子石昌子は「主として私の目に写つたのは、争ひがちの家庭生活」とその幼時を語るが、その争いでも久女だけがヒステリックに声を荒げ、良人宇内は黙々としていたのではないか。そのことがまた久女をますますいらだたしくさせたのである。と推察する。この句は田舎教師の妻として、凡々の日夜を送り、そこから脱しようとしないうち自分を嘲る句だが、その背景には三宅やす子が着々と文名を高めて行くことへのコンプレックスもある。いずれにしてもこの句は久女の我のつよさが露骨に出ている句であり、それが有名にもしたのだが、親しめない。

*

前者は親しく久女の傍にいた肉親である長女の生の証言である。後者は赤の他人の、スキャンダラスなものを女に帰する傾向の強い普遍的な男性の属性を有する一人の男の（それが

「俳人」であろうが何であろうが実は余り関係ない）、不完全な伝聞と、ただの憶測に基づく記述である。

先に述べた昌子さんの母に対するバイアスを考慮に入れるとしても、この叙述は同一の夫婦の心的複合を叙述しながら、ほぼ正反対のそれとなっているといつてよい。そうしてこれは、単に――母と娘対女と男――の感じ方の相違――どころの騒ぎではなく（但し、女流俳人に対する評価にはこの評者の側の性差の問題が「絶望的」なまでに影響すると私は思っている。これは女流歌人や小説家等よりも、シンボリックな要素が大きい俳句の場合、遙かに「絶望的」に顕著なのである）、明らかに――この大野林火氏の認識そのものに致命的な誤りがある――としか私には言いようがないのである。

大野林火（明治三七（一九〇四）年～昭和五七（一九八二年））は、まさに昌子さんの言った「亭主関白ともいえる時代」に生きた〈男〉の俳人である。そうした彼にして「いずれにしてもこの句は久女の我のつよさが露骨に出ている句であり」「親しめない」という如何にもなそっけなく、乱暴な評言は反対に実に私には腑に落ちるのである。その代わりに、異様なまでに、ここまでの枕や分析が長いのは、まさに〈男〉の俳人としての大野が（単なる俳人としてではない！）〈女〉としての

久女（「女の俳人としての久女」ではない！）を断罪しているに過ぎぬからである。私は過去現在未来を通して、少なくともこの句に対する大野氏のこの「鑑賞と批評」は「鑑賞」なんぞでも「批評」なんどでもない、只管、バレだらけになった小道具をふんだんに使った、おぞましく誤った、男の女への、物言いの安舞台でしかないと断ずるものである。」

軒の足袋はづしてあぶりはかせけり

白足袋に棲みだれ踏む疊かな

絨毯に足袋重ねゐて椅子深く

椿色のマント着すれば色白子

「やぶちゃん注：「色白子」は「いろじろぎ」と読んでいよう。」

遊學の我子の布團縫ひしけり

「やぶちゃん注：これはずっと後に載る「遊學の旅にゆく娘の

布團とぢ」の極めて酷似した類型句で、しかも「遊學の旅にゆく娘の布團とぢ」の方は角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」で『〈昭和四年——昭和十年〉（創作年月未詳）』のパートにある。長女昌子は明治四四（一九一一）年八月二十日生、次女の光子は大正五（一九一六）年八月二十二日生で、後に「光子県立小倉高女卒業」と前書する昭和八（一九三三）年作の「青き踏む靴新らしき處女ごころ」以下二句が載ることから、昭和四（一九二九）年時点でも昌子満十八歳・光子十三歳である。

さてここからちよつと迂遠な注になる。実は当初私は以上の事実から次のように注を続けていた。

『従つて、この「遊學」というのが泊を伴う修学旅行のことであり、久女の縫っているのがそれに持参する蒲団であるとすればそれは光子の修学旅行である。高等女学校の修学旅行は四年で実施されたという体験者の記載がネット上にあるから、光子の高等女学校四年は昭和七（一九三三）年となり（高等女学校は五年制）、本句の創作年代が限定出来ることになる。また、当時ならば蒲団持参であつたとして不思議ではない。穿つて考えると、前の句の鮮やかな紅い「椿色のマント」を「着すれば色白子」に見えるというのは実は修学旅行のための装いででも

あつたものかも知れぬ。』

ところが底本全集第二巻に載る昭和八（一九三三）年の「日記抄2」を見ると、小倉高等女学校を卒業後すぐに次女光子は合格していた東京の女子美術専門学校（現在の女子美術大学）に「遊學」していることが分かった（坂本氏の「杉田久女」によれば夫宇内の強い『反対を押し切って』『送り出した』とある。以下の日記でもそれが分かる）。そしてその日記には冒頭（この部分は日付が入っていないが二月三日以前）から彼女の学資のための儉約の誓いが記され、

遊學の春まつ娘なり靴みがく

遊學やかゝとの高き春のくつ

という句が載る一方、三月五日に『ホトトギス』雑詠欄へ投句したもの的一句として、

ひなかざる子の遊學は尚ゆりず

とある（「ゆりず」は「許りず」で下二段活用「許る」は、許

される・許可が下りるの意味の古語である)。次に続く日附不詳(三月六日から十二日の間)の項に、『此頃光子出立のしたくの前着わたぬき』『洗濯、テガミ、セン句、歳時記しらべ等にて、十二時前ねし夜はまれ也。多忙多忙』とか、『光子』『フトン布地五円也』とあり、三月二十日の条には『光子遊學の三年間は世とたち、習字と藝術著作等自分も勉強して暮さう。一点に集中すべし。』、続く三月二十一日の条では『光子の遊學問題を中心にして、夫との争ひますます深刻。金も百円以上に入用なのに、夫はがみがみ叱言と朝夕の怒罵叱言のみにて、一錢も出してくれぬから私はしかたないけなしの預金をはたいて皆出してやらねばならぬ。私はどこまでも光子の味方だ。いのりてすゝむ所、よき方法あらんか?』と綴る。光子の東京への「遊學の旅」立ちは三月二十八日であつたが、『光子東上。／夜來より風雨はげしくかつ夫の異議出たれば、光子もしくしくなく。』『「いんきな出立ね」と光子のしづむもあはれ也。』光子を送った後、『誰もぬ家へ十二時歸宅して心うつろ、淋しさにたへず。』とある。また、三月二十九日の条にも後送の荷作りが語られ、『荷ごしらへす。／まだ布団團袋一個のこしあり。カルトンを入れる。』とまたしても「蒲團」が出るのである。以上からこの句は東京での生活のために母久女が布団を縫

っているのであった。都合三度に亙ってこの注は改稿した。お騒がせの段、深謝するものである。」

六つなるは父の布團にねかせけり

「やぶちゃん注…この句は編年式編集の角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」には大正七（一九一八）年のパートに載る。前句の注に示した通り長女昌子は明治四四（一九一一）年八月二十二日生であるから、この句は前年大正六年末の冬（季語「布團」）の作と考えられる（満年齢で昌子六歳。次女光子は大正七年では数えでもまだ三歳である）。実は私は当初、作句年代の同定をいい加減にし、これらを完全な連作と思ひ込んだ上、さらに救いようもなく、「遊學」を姉昌子の方の修学旅行だと思ひ込み誤認し上に、

＊

…姉が修学旅行でいなくなつて一人では寝られぬと光子がむづがるから「父の布團にねかせ」と本句を読むなら、これら三句と次の夫婦で「右左に」一人次女の光「子をはさみ寝る」という一句は実は四枚の組写真、連作と読めるようになっていくように私には感じられる。二句後に続く風邪をひいた娘（こ

れも次女光子であろう)の連作の方にこれらを属させるとする考え方も出来ようが、であるならば、風邪をひいていることをこの句で示さなければ連作句としてはおかしい、失敗となると私は思う。久女にしてそんなミスはしない。大方の御批判を俟つものではある。

*

などという(トンデモ)二乗の解釈をしていた。これはもうお笑いの世界であつた。……」

右左に子をはさみ寝る布團かな

風邪の子や眉にのび來しひたひ髪

瞳うるみて朱唇つやゝか風邪に臥す

熊の子の如く着せたる風邪かな

その中に羽根つく吾子の聲すめり

笑み解けて寒紅つきし前齒かな

寝ねがての蕎麥湯かくなる庵主かな

玻璃の海全く暮れし煖爐かな

ホ句たのし松葉くゆらせ煖爐たく

「やぶちゃん注：これらの二句も間違いなく櫓山荘での句であろう。」

風を飾りて子等籠りとるかるたかな

胼の手も交りて歌留多賑へり

書初やうるしの如き大硯

縫初の糸の縫れをほどきけり

空似とは知れどなつかし頭巾人

櫓やがて吹雪の渦に吸はれけり

雪道や降誕祭の窓明り

な泣きそと拭へば胼や吾子の顔

柚子湯出て身伸ばし歩む夜道かな

緋鹿子にあご埋めよむ炬燵かな

「やぶちゃん注…「緋鹿子」は炬燵の掛け布団の模様であろうが、そこに頤おでかけなですつぽりと埋めて読み耽おぼろっているのは、「伊達娘恋緋鹿子」、八百屋お七の浄瑠璃本でもあろうか。――久女とお七……こんなに相応しい組み合わせはあるまいと、私は思うのだが……」

眉根よせて文巻き返す火鉢かな

狐火や風雨の芒はしりゐる

「やぶちゃん注…久女には比較的珍しい鬼趣の句。私は好きである。」

我作る菜に死にてあり冬の蜂

掃きよする土に冬蜂這ひいたり

「やぶちゃん注…本句は角川書店昭和四四（一九六九）年刊『杉田久女句集』の『大正七年——昭和四年（創作年月未詳）』にあり、先行する村上鬼城の大正四（一九一五）年五十一歳の折りの名吟「冬蜂の死にどころなく歩きけり」に、遙かに及ばないインスパイアである。」

牡蠣舟に上げ潮暗く流れけり

けふの糧に幸足る汝や寒雀

枯芝に松影さわぐ二月かな

枯草に粉雪さゝやけば胼の吾れ

枯枝に残月冴ゆる炊ぎかな

寒獨活に松葉掃き寄せ圍ふなり

思ひつつ草にかゝれば寒雀

木苺の寒を實れり摘みこぼす

葱ぬいて訪ひ來し婢をばもてなせり

葱植うる夫に移しぬ廂の灯

肥かけて冬菜太るをたのしめり

わが蒔いていつくしみ見る冬菜かな

縫ひ疲れ冬菜の色に慰む目

肥きいて日を吸ひふとる冬菜かな

「やぶちゃん注…「冬菜」は冬に出回る根菜類の総称。白菜・京菜・唐菜とうな（アブラナの変種で葉は大形で厚みがあって柔らかく漬物にする。つけな。まさに「ふゆな」とも呼ぶ）・小松菜など。」

寒椿に閉ぢ住む窓のありにけり

炭ついで吾子の部屋に語りけり

歸中并歓迎句會 下關公會堂 二句

春の灯にこころおどりて襟かけぬ

バナナ下げて子等に歸りし日暮かな

「やぶちゃん注…「春の灯」は春の、「バナナ」は夏の季語であるが、角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」には次の「リオデジャネイロ丸入港」の一句と合わせて大正八（一九一九）年の項に載せるから、これは年譜の同年五月にある『虚

子先生歓迎関門俳句大会（下の関市三日会倶楽部）へ出席』した折りに詠んだ句である。」

リオデジャネイロ丸入港 一句

上陸のたのしき學徒バナナ買ふ

「やぶちゃん注…「リオデジャネイロ丸」りおでじゃねろ丸は大阪商船所属の初代「りおで志ゝやねろ丸」であろう。貨客船として西回り南米航路に就航し、主に移民輸送に活躍した。後、太平洋戦争で日本海軍の特設潜水母艦・特設運送船として艤装、昭和一九（一九四四）年二月のトラック島空襲によって沈没している（[ウィキの「りおでじゃねろ丸」](#)に拠った）。西回り航路であるから下関とは関係がある。ポイントは「學徒」で、これは船旅の修学旅行の景ではなからうか？ およそそんな修学旅行が戦前にあったのかと疑われそうだが、ネット検索したところ、実は実際にある。しかもそれはまさにこの「りおで志ゝやねろ丸」なのである。群馬県立桐生高等学校の関連ブログ「[桐中・桐高外史](#)」の「[其の四十二 修学旅行①](#)」に、同校が関西方面への修学旅行に汽船を利用していた旨の記載があり、そこ

には（アラビア数字を漢数字に代えた）『なぜ「汽船」利用が始まったのかは分からないのだが、一般的には昭和四年からの世界恐慌で海運業界が不況となり利用が促され、「海無し県」群馬の生徒に体験させる良い機会と考えられたと言われる』とあり、県内では高崎中学校『が昭和五年に利用している。桐中は、昭和六年は不明だが昭和七年から十四年まで八年利用しており、恐らく県下中学校の中では最も多く利用したのではなかろうか』とあつて、利用した船舶としてハワイ丸の次に、南米移民船であるリオデジャネイロ丸九千六百二十九トンとあるのである（ウィキの記載では総トン数は九千六百二十六トン）。但し、この句は大正八（一九一九）年の作で果してそんな頃から、このリオデジャネイロ丸利用の修学旅行があつたものかどうかまでは辿り得ていない。」

長女チブス入院 十二句

童話よみ盡して金魚子にに吊りぬ

親ごころ

梶の葉に墨濃くすりて願ふこと

「やぶちゃん注…「梶の葉」「かぢのは（かじのは）」はイラク
サ目クワ科コウゾ属カジノキ *Broussonetia papyrifera* の葉。
神道では神に捧げる神木として尊ばれ、主として神事の供物の
敷物に使われた。また昔は七夕の祭りでは短冊ではなく、この
葉七枚に歌などを認めて手向ける風習があつた。」

七夕百句青き紙にぞ書き初むる

子等は寢し簷端の月に涼みけり

七夕竹を病む子の室に横たへぬ

水上げぬ紫陽花忌むや看る子に

退院

面瘦せし子に新しき單衣かな

昌子快復

七夕や布團に凭れ紙縫る子

庭木のぼる蛇見てさわぐ病兒かな

銀河濃し救ひ得たりし子の命

床に起きて繪かく子となり囁きし

全快

初秋の土ふむ靴のうす埃

「やぶちゃん注…大正七（一九一八）年二十八の時の句。長女昌子数え八歳であった。」

子等の幼時 四句

まろ寝して熱ある子かな秋の暮

熱下りて蜜柑むく子の機嫌よく

熱とれて寢息よき子の蚊帳のぞく

熱の瞳のうるみてあはれ蜜柑吸ふ

「やぶちゃん注…以上四句は大正七（一九一八）年二十八の時の最初期の句群である。」

大正七年實父逝く 四句

父逝くや明星霜の松になほ

湯婆みなはずし奉り北枕

椀一つ足らずと探す寒さかな

み佛に母に別るゝ時雨かな

「やぶちゃん注…杉田久女（本名久）の父廉蔵は大正七（一九一八）年十二月七日に脳溢血のために東京の実家で亡くなった。昌子さんの年譜によれば、この上京の時、『連絡船に乗り遅れ』『関門海峡を急行に間に合』わあせるために漁船』を傭い途中ポンポン蒸気に曳航してもらって間に合った。後年、若かったから出来た無鉄砲だと言った』という息女ならではの書けぬエピソードを記しておられる。久女らしい、いい話である。」

父の喪 一句

松の内を淋しく籠る今年かな

「やぶちゃん注…前注したように父廉蔵の死は大正七（一九一八）年十二月七日であった。大正八年初中旬の感懷を詠んだものであることが特定される句である。」

耶馬溪羅漢寺一句外 五句

苔をまろく踏み凹めたる木の實かな

深耶馬の空は瑠璃なり紅葉狩

洞門を出れば濶し築の景

濃龍胆浸せる溪に櫛梳り

茸やく松葉くゆらせ山日和

耶馬溪の岩に干しある晩稻かな

「やぶちゃん注…大正九（一九二〇）年三十歳の時の作。「耶馬溪羅漢寺」これは「羅漢寺」から景勝地として知られる大分県中津市にある山国川の上中流域及びその支流域を中心とした溪谷である。以下、私は訪れたことがないのでウィキの「耶馬溪」より引く。『日本三大奇勝や新日本三景の一つに選ばれている』（大正一二（一九二三）年に名勝指定、昭和二五（一

九五〇年には一帯が耶馬日田英彦山国定公園に指定された。以下、「地域別の主な景勝」による（アラビア数字を漢数字に代え、記号の一部も変更した）。

（引用開始）

本耶馬溪

本耶馬溪（ほんやばけい）は、青の洞門や競秀峰を中心とする山国川上流一帯。青の洞門は羅漢寺の禅海和尚が、参拝客が難所を渡る際に命を落とさないよう、ノミ一本で掘り抜いたトンネルで、菊池寛が『恩讐の彼方に』を上梓したことで、全国にその名を知られることになった。なお、禅海和尚は遂道を開通させた後は利用者から通行料を徴収したことから国内初の有料道路とも言われている。現在は車道拡幅工事により当時の痕跡は歩行者用通路の一部にノミの痕跡が認められる程度となっている。目立たないが、遂道を通らずに難所であった崖側を通るルートが今も残っており、険しい場所ではあるが鎖などを伝って通ることができる。

「青の洞門」より五百メートルほど下流にある耶馬溪橋は、全長百十六メートル、日本最長の石造アーチ橋である。アーチは十二メートルスパンでやや偏平であり、その西洋的な外観から「オランダ橋」との愛称で呼ばれる。この近辺には他にも石造

アーチ橋が多くかけられている。耶馬溪橋の一・五キロメートル上流には、橋長八十九メートルの三連アーチの羅漢寺橋が、また、さらに四キロメートル上流には橋長八十三メートルの馬溪橋がある。

深耶馬溪

深耶馬溪（しんやばけい）は、山国川支流山移川支流に位置する溪谷。一目八景が有名。一度に海望嶺、仙人岩、嘯猿山、夫婦岩、群猿山、烏帽子岩、雄鹿長尾嶺、鷲の巣山の八つの景色が眺望できることから名付けられた。近くには鳴良、深耶馬溪などの温泉がある。

裏耶馬溪

裏耶馬溪（うらやばけい）は、金吉川上流の溪谷で玖珠町との境界に位置する。浸食を受けた岩壁が屏風のように屹立する。近くには伊福温泉があり、温泉水を使って養殖したスッポン料理が名物。

奥耶馬溪

奥耶馬溪（おくやばけい）は、山国川上流に位置する。猿飛の景と名付けられた猿飛千壺峽が知られる。耶馬溪猿飛の甌穴群は天然記念物に指定されている。

椎屋耶馬溪

椎屋耶馬溪（しややばけい、しいややばけい）は、宇佐市と隣接する駅館川支流の温見川源流付近の溪谷。近隣には岳切溪谷（たつきりけいこく）という谷底が一枚の大きな岩盤でできた溪谷があり、椎屋耶馬溪に含められることがある。

津民耶馬溪

津民耶馬溪（つたみやばけい）は、山国川支流の津民川に位置する溪谷。手付かずの自然が残る穴場。

その他の地域

かつてはこの他に羅漢寺耶馬溪（現在では本耶馬溪に含まれる）、麗谷耶馬溪（うつくしだにやばけい、現在では深耶馬溪に含まれる）、東耶馬溪、南耶馬溪があり、これらも加えた十か箇所の溪谷は総称して耶馬十溪と呼ばれていた。現在、この四つの呼び方はほとんど使われていないために、耶馬十溪という呼び方をするとはまずない。

（引用終了）

その他、『耶馬溪には数々の絶景が点在しており、総称して耶馬溪六十六景と呼ばれている』とあって景名が示されてある。

「羅漢寺」大分県中津市本耶馬溪町にある曹洞宗の寺院。前注と同じ理由から以下、[ウィキの「羅漢寺（中津市）」](#)から引く（アラビア数字を漢数字に代えた）。『山号は耆闍崛山（ぎしゃくつ

せん）。本尊は釈迦如来。日本国内の羅漢寺の総本山である。『羅漢山の中腹に位置する。岩壁に無数の洞窟があり、山門も本堂もその中に埋め込まれるように建築されている。洞窟の中に三千七百体以上の石仏が安置されており、中でも無漏洞（むろどう）の五百羅漢は五百羅漢としては日本最古のもので、二〇一四年三月十八日には国の重要文化財への指定が答申されている。』『伝承では大化元年（六四五年）、法道仙人の創建というが、伝説の域を出ない。』『延元二年（一三三七年）ないし暦応元年（北朝年号、一三三八年）、円龜昭覚が当地に十六羅漢を祀ったのが実質的な開山である。この時の寺は、現羅漢寺の対岸の岩山にある「古羅漢」と呼ばれる場所にあったと推定されている。延元四年（一三三九年）には中国から逆流建順という僧が来寺し、円龜昭覚とともにわずか一年で五百羅漢像を造立したという。』『寺は当初臨濟宗であったが、慶長五年（一六〇〇年）鉄村玄さく（「さく」は「族」の下に「鳥」）が来寺してから曹洞宗となった。』昭和一八（一九四三）年に火災で本堂を焼失し、現在の本堂は昭和四四（一九六九）年の再建であることから、久女の見たであろうそれは消失前の本堂である。

「築」老婆心乍ら、「やな」と読む。河川の両岸又は片岸より

列状に杭や石等を敷設して水流を堰き止め、誘導されて中に入
った魚類を捕獲する川漁の仕掛けをいう。

なお、この句までが冒頭から続いた「堺町」句群である。」

信州吟（大正九年八月 病中吟とも百六十五句）

「やぶちゃん注…以前にも注したが、これらは大正九（一九二
〇）年八月に信州松本に父の骨を納骨に行った際（恐らく二人
の子を連れて）、腎臓病を発症、東京上野の実家へ戻って入院
加療に入り、そのまま実家にて療養に入った（この時、当然の
如く、専ら久女側からの意志で離婚問題が生じたことが年譜に
記されてある）。この時の夫宇内との別居は約一年の及んでい
る（小倉への帰還は大正十年七月）。」

松本城山の墓地に父の埋骨式、弟の墓と並ぶ

野菊はや咲いて露けし墓参道

墓の前の土に折りさす野菊かな

屋根石に炊煙洩るゝ豆の花

父の忌林檎二籠鯉十尾

夏雨に母が爐をたく法事かな

茄子煮るや爐邊に伏せし大十能

「やぶちゃん注…「十能」炭火を載せて運ぶための柄のついた器またはスコップ状の火掻き。季語としては冬であるが、ここは「茄子」が季語で夏。」

夏爐邊に電燈ひきし法事かな

目にしみて爐煙はけず茄子の汁

雨暗爐煙籠るすゝけ哉

風呂焚くや梁に漂ふ楳煙

茄子買ふや^{なす}框濡らして數へつゝ

夏雨に爐邊なつかしき夕餉かな

屋根石にしめりて旭あり花棗

「やぶちゃん注…久女の父廉蔵の祥月命日は十二月七日（大正七（一九一八）年）であつたが、この大正九年の信州松本城山墓地への納骨は前書にあつたように八月のことであつた。」

紫陽花に秋冷いたる信濃かな

濃霧晴れし玻璃に映れる四葩かな

「やぶちゃん注…「四葩」は「よひら」と読み、紫陽花の異名。」

山冷に羽織重ねしゆかたかな

落ち杏踏みつぶすべくいらだてり

秋宮に髪むしり泣く女かな

障子締めて爐邊なつかしむ黍の雨

雨降れば爐邊の雑話黍を焼く

「やぶちゃん注…この句を読むと実は前の下五は——黍に降る雨の音——のではなく、「爐邊なつかしむ黍の」で切れているのであって、まさに「雨」の「障子締めて」、「黍を焼く」「爐邊の雑話」を「なつかし」んでいる久女という情景が自ずと見えてくるように私には思われるのであるが、曲解であろうか？」

忌に寄りし身より皆知らず洗ひ鯉

爐のほとりに集りて雑話や青なんば焼く

「やぶちゃん注…「青なんば」 青南蛮。 青唐辛子のこと。」

新蕎麥を打つてもてなす髪鄙び

掘つて來し大俎板の新牛蒡

精進おちの生鯉料理る筈かな

芋汁や紙すゝけたる大障子

三軒の孫の喧嘩や青林檎

鬼灯やきゝ分さときひよわの子

「やぶちゃん注…ここまで、父納骨式後の精進落しの囑目吟と
とる。平凡社「世界大百科事典」の「精進落し」の項には、仏
教関係行事が終わって再び日常生活に帰る際に行われる行事
で、肉食を精進落しの象徴としている地域が多いとあり、まさ
に『長野県上伊那郡では葬式から帰った人々が仏前に膳を並べ
鯉の吸物などを食べることを精進落しという』とある。」

浅間温泉 鷹の湯

秋雨に翅の雫や網の鷺

つれづれに浸る湯壺や秋の雨

「やぶちゃん注…「浅間温泉 鷹の湯」長野県松本市北東部に
ある同市の奥座敷といわれる温泉で、その七ヶ所ある源泉の内
の一つが鷹の湯源泉。泉質はアルカリ性単純温泉。「浅間温泉
旅館協同組合」公式サイトの「歴史」によれば、明治以降は『多
くの文人墨客に愛されるようになり、特に正岡子規や伊東左千
夫からなるアラギ派発祥の地として知られ』、『竹久夢二、与
謝野晶子、若山牧水、田山花袋ら多くの文人墨客が訪れて、こ
の地で優れた作品を残してい』るとある。」

信濃に病む

山廬淋し蚊帳の裾飛ぶ青蛙

霧雨に病む足冷えて湯婆かな

障子はめて重ねし夜着や秋の雨

病中吟

浅間温泉枇杷の湯

衰へて今蠶飼ふ温泉宿かな

簾捲かせて銀河見てゐる病婦かな

屋根石に四山濃くすむ蜻蛉かな

今朝秋の湯けむり流れ大鏡

林檎畠に夕峰の濃ゆき板屋かな

八月の雨に蕎麥咲く高地かな

行水の提灯^ひの輪うつれる柿葉うら

行水や肌に粟立つ黍の風

「やぶちゃん注…「浅間温泉枇杷の湯」浅間温泉で現在「湯々庵 枇杷の湯」として営業している。[公式サイトはこちら](#)で、その「[歴史](#)」によれば、『信州・松本の奥座敷、浅間温泉に佇む伝統の湯。「湯々庵 枇杷の湯」の歴史は、今を遡ること』四百年の昔、『初代松本城主 石川氏が浅間に湯御殿を造営し、湯殿を整備したことから始まり』、『初代の湯守である当館の先祖「石川晶光（改易後 小口楽斎）」は、石川数正公の三男康次の子であり、戦で負傷し歩行困難の身となったことで御殿守の役職をあずかるに至り』（文禄三（一五九四）年）、『以後、小口家は代々御殿湯の湯守を勤め、松本藩の最藩政資料となる「信府統記」にも、「湯守小口治庵と云う者代々之を務む」とあるとある由緒ある温泉である。』

母病む

かくらんやまぶた凹みて寝入る母

かくらんに町醫ひた待つ草家かな

病人癒えてすゝれる粥や秋の蚊帳

夏服や老います母に兄不幸

「やぶちゃん注…「兄不幸」不詳。」

難苦へて母すこやかに障子張る

朝な梳く母の切髪花芙蓉

葉洩日に碧玉透けし葡萄かな

葡萄暗し顔よせ粧^くる夕鏡

落葉松に浮雲あそぶ月夜かな

葡萄投げて我儘つゝのる病婦かな

山の温泉や居残つて病む秋の蚊帳

鏡借りて發つ髪捲くや明けやすき

草いきれ鐵材さびて積まれけり

病人に干草のいきれ迫りけり

馬車停る宿かと胸つく草いきれ

草いきれ連山襞濃く刻みけり

北斗爛たり高原くらき草いきれ

草いきれ妖星さめず赤きかな

赤き月はげ山登る早かな

東京へ歸りて

蟲鳴くや三とこに別れ病む親子

「やぶちゃん注」…「三とこ」 富士見書房平成一五（二〇〇三）

年刊の坂本宮尾「杉田久女」に、この頃、『小倉の宇内も痔で入院し、長女は宇内の郷里の小原村に、次女は久女の実家に預けられていた』という事実を指す。」

西日して日毎赤らむ柿の數

頓に色づく柿數へつゝ病む久し

こほろぎや鼯靜かに看護人

葉を打つてしほみ落ちたる芙蓉かな

おいらん草こぼれ溜りし殘暑かな

松名にある昌子をおもふ

鬼灯や父母へだて病む山家の娘

「やぶちゃん注…「松名」 夫杉山宇内の実家愛知県西加茂郡小原村松名（現在は豊田市に編入）。」

山馴れで母戀しきか三日月

かな女様來訪。十月振りの來訪とぞ嬉し。

秋雨や瞳にこびりつく松葉杖

「やぶちゃん注…前書末尾の句点はママ。「かな女」杉田久女とともに大正期を代表する女流俳人長谷川かな女（かなじよ明治二〇（一八八七）年～昭和四四（一九六九）年）。本名カナ。東京日本橋生。私立松原小学校卒業後、小松原塾で学び、明治三六（一九〇三）年、十六歳で三井家に行儀見習いで入ったが心臓の病気により辞し、明治四二（一九〇九）年二十二歳の時、英語の家庭教師でホトトギスの俳人であった富田諧三（後の長谷川零余子）と結婚、その頃より自身も句作を始め、大正二（一九一三）年には高浜虚子が女性俳人育成のために始めた婦人俳句会『婦人十句集』の幹事役を務めた。大正一〇（一九二一）年に夫零余子が『枯野』を創刊して主宰となるとそれをよく助けた。昭和三（一九二八）年に零余子が死去し、その直後に新宿柏木の自宅が全焼、埼玉県浦和市（現在のさいた

ま市）に転居した。また夫の俳誌を『ぬかご』と改題、後に『水明』を創刊して没年まで主宰した（以上はウイキの「長谷川かな女」に拠った）。久女より三つ年上で、大正六（一九一七）年以来の『婦人十句集』の先輩で盟友でもあった（無論、夫零余子とも親しかった）。本句の大正九（一九二〇）年当時は三十三歳。久女にはこの時の、腎臓病による入院時を綴った随筆「病院の秋」がある（末尾に『大正九年十月十八日 病床にて認む』というクレジットがある）が、冒頭にまさに雨の中を見舞いに來たかな女が描写されており、そこに『御病氣以來、十月ぶりで外出なさったといふかな女様を、四年ぶりで拜し』（底本の第二巻所収のものをを用いたが恣意的に正字化した）とあるから、この「松葉杖」をついているのはかな女である。」

入院、隔日に食鹽注射

壁に動く秋日みつめて注射すむ

「やぶちゃん注」：「食鹽注射」「鹽」は底本では「塩」であるが、筑摩書房昭和四二（一九六七）年刊「現代日本文学全集 卷九十一 現代俳句集」に所収する「杉田久女集」では「塩」の用

字はなく、「かきならす鹽田ひろし夕千鳥」とある。「食鹽注射」は体液を補充するために生理的食塩水を注入することを指すが、所謂、現在の点滴の類いをかく言っているようには思われるが、もしかすると久女の病氣は腎臓病であつたことから無塩に近い減塩食を与えられていたのを、これで最低限補助する目的もあつたか。医家の御教授を乞うものである。」

秋風やあれし瀝へぬる糸瓜水

秋風の枕上なる櫛鏡

色どれど淋しき瀝やな花芙蓉

蟋蟀も來鳴きて默す四壁かな

椀に浮くつまみ菜うれし病むわれに

窓掛をさす月もがな夜長病む

門限に連れ立ち去りし夜長かな

我を捨て遊ぶ看護婦秋日かな

廊通ふスリッパの音夜長かな

仰臥して腰骨いたき夜長かな

姉より柔かき布團贈られる

ふわと寝て布團嬉しき秋夜かな

仰臥して見飽きし壁の夜長かな

柿熟るゝや臥して迎へし神無月

病める手の爪美しくしや秋海棠

我に逆ふ看護婦憎し栗捨てよ

我寢息守るかに野菊枕上

目ひらけば揺れて親しき野菊かな

閉ぢしまぶたを落つる涙や秋の暮

秋の灯をくらめて寝入る病婦かな

看護婦をのゝしる句

椅子移す音手荒さよ夜半の秋

汝に比して血なき野菊ぞ好もしき

芋の如肥えて血うすき汝かな

我ドアを過ぐ足音や秋の暮

薬つぎし猪口なめて居ぬ秋の蠅

病む卓に林檎紅さやむかず見る

寝返るや床にずり落つ羽根布團

昌子を二月振りに病院に見る

にこのこと林檎うまげやお下げ髪

「やぶちゃん注：」「にこにこ」の後半は底本では踊り字「へ」。

扉の隙や土三尺の秋の雨

九月盡日ねもす降りて誰も來ず

雨降れば暮るゝ早さよ九月盡

終電車野菊震はし過ぎしかど

よべの風に柿の安否や家人來ず

土が見たし日日に見飽きし壁の秋

寢返れば暫し身安き夜長かな

秋夕やいつも塀外を豆腐賣

よべの野分を語る廊人旭を浴びて

光子來る

朱唇ぬれて葡萄うまきかいとし子よ

「やぶちゃん注…次女光子は大正五（一九一六）年八月二十二日生まれで、当時は未だ四歳であつた。」

野菊やゝ飽きて眞紅の花戀へり

秋晴や紹刺にこれる看護人

「やぶちゃん注…「紹刺」は「ろざし」と読む。紹刺し縫い。

日本刺繍で紹織りの透き目に色糸を刺して布目を埋め込み、模

様を作るもの。袋物・帯・草履の表などに用いる。[グーグル画
像検索「紹刺」。](#)」

秋晴や寢臺の上のホ句つくり

熱無し

秋風や氷囊からび揺るゝ壁

我いまだ帝都の秋の土踏まず

粥すゝる匙の重さやちゝろ蟲

「やぶちゃん注：「ちゝろ蟲」（チロムシ）蟋蟀（セセリ）の異名。「ちろろむし」とも
呼ぶ。」

咳堪ゆる腹力なしそゞろ寒

秋朝や痛がりとかす縛れ髪

夫出立

言葉少く別れし夫婦秋の宵

栗むくや夜行にて發つ夫淋し

父立ちて子の起伏おきふしや柿の家

「やぶちゃん注：宇内が見舞いに訪れたその帰還の景と思われる。既に述べた通り、この東京での療養を機に離婚問題が起こっている。年譜の同年の項には『小倉での生活が痛ましすぎる」と実家では考えた』とある。当時久女三十歳。しかし「栗むくや」を中心にこの三句にはそうした陰影を感じさせながらも、どこか宇内への愛憐の情も強く感じられるように私には思われる。」

長病や足荒れて齧く羽根ぶとん

許されてむく嬉しさよ柿一つ

野路の茶屋の柿下げて來ぬ日暮人

腹痛に醒めて人呼ぶ夜半の秋

外出して看護婦遅し夜半の秋

兄弟打連れ見舞はれて

秋晴や栗むきくれる兄と姉

病む我に兄弟親し栗をむく

ほつほつと楽しみむくや栗の秋

獨り居て淋しく栗をむく日かな

吾子に似て泣くは誰が子ぞ夜半の秋

秋の夜やあまへ泣き居るどこかの子

母上来る

老顔に秋の曇りや母來ます

歸り路を轉び給ふな秋の暮

退院 二十五日振り目白へ歸宅

退院の足袋の白さよ秋裕

髪捲いて疲れし腕秋裕

面瘦せて束ね卷く髪秋裕

病み瀡せて帶の重さよ秋裕

帶重く締めて疲れぬ秋裕

寐とる明日退院の秋裕

「やぶちゃん注…「躰とる」裁縫用語。縫い目や折り目を正しく整えるために仮にぎつとあらく縫われた糸を抜くこと」

歸り見れば芙蓉散りつきし裕かな

秋裕日日病院へ通ひけり

敷かれある臥床に入れば秋灯つく

神田阿久津病院へ入院

看護婦つれて秋日浴びに出し露臺かな

草合せの秋草の色々を、かな女せん女の御二方にてわざわ
ざ病床へ御見舞下さる。

友禪菊のかげ灯に浮きし敷布かな

秋草に日日水かへて枕邊に

「やぶちゃん注…「かな女せん女」長谷川かな女と金子せん女（老婆心乍ら孰れも「女」（ぢよ／じよ）と読む）。かな女は当時三十三歳。金子せん女は現在忘れ去られているようだが、かな女の俳誌『水明』でかな女と双璧を成した女流俳人で、本名を金子徳（子）という。句集に「なつくさ」（昭和八（一九三三）年水明発行所刊）。当時の年齢は四十一歳であつたと思われる。彼女は実は、大正期に三井・住友・三菱を凌ぐ勢力を持っていた神戸鈴木商店大番頭として丁稚奉公から身を起こした叩き上げの実業家にして「財界のナポレオン」の異名をとつた金子直吉（彼自身は土佐出身）の妻であつた（未見であるが、つい最近ドラマ化された「お家さん」というのは鈴木商店の女主人鈴木よねとこの金子直吉を主人公としたものである）。杉田久女の評論「大正女流俳句の近代的特色」（昭和二（一九二七）年十月稿・昭和三（一九二八）年二月発行の『ホトトギス』所収）で久女が引いているせん女の句を以下に示す（底本の第二巻所収の者を底本としつつ、「虫」以外は正字化し、踊り字「へ」も正字で示した）。

灯におちて鳴かず廣葉の虫の髭

せん女

白萩のこまこまこぼれつくしけり

せん女

山駕にさししねむけや葛の花

せん女

病んでさへおればひまなり菊の晴れ

せん女

鈴虫や疾は疾我生きん

せん女

極月や何やらゆめ見病みどほし

せん女

病みながら松の内なるわが調度

せん女

よき母でありたき願ひ夜半の冬

せん女

極月や婢やさしく己が幸

せん女

母が手わざの葛布をそめて着たりけり

せん女

わが編みて古手袋となりにけり

せん女

なお、「病んでさへ」以下の句は同俳論の「三 境遇個性をよめる句」に所収するもので、そこで久女は『須磨の山莊に久しい宿痾を養つてゐるせん女氏には病の句が澤山ある』と記している点に注意したい。

なお、「鈴木商店記念館」の[金子直吉の事蹟](#)によれば、彼も妻の影響を受けて俳句をやり、

初夢や太閤秀吉那翁

ナボレオン

白鼠

天正の矢叫びを啼け時鳥

ホトトギス

白鼠

の句があるとする。この俳号「白鼠」とは主家に献身的な家僕を意味するとリンク先にある。」

みさ子様の御文あり、萩の花を戴く

まどろむやさゝやく如き萩紫苑

「やぶちゃん注」『みさ子』『ホトトギス』の大正女流俳人飯島みさ子（明治三二（一八九九）年～大正二二（一九二三）年）と思われる。当時、二十一歳。大阪生まれ。生後間もなく罹患したポリオによって歩行困難となったが、十六歳頃より俳句を長谷川零余子に学ぶ。『ホトトギス』で虚子に認められたが、チフスにより二十五歳で死去した。翌年、句集「擬宝珠」が刊行されている（代表作である「熱の目に紫うすきぎぼしゆかな」に因むものである）。やはり久女の評論「大正女流俳句の近代的特色」から久女が引いているみさ子の句を以下に示す（底本その他は同前）。

花びらに深く虫沈め冬のばら

みさ子

秋蝶や漆黒うすれ檜葉にとぶ

みさ子

いたゞきにばやけし實やな枯芙蓉 みさ子

大輪のあと蒼なし冬のばら みさ子

櫻餅ふくみえくぼや話しあく みさ子

元ゆいかたき冬夜の髪に寝たりけり みさ子

病み心地の母とよりそひ林檎むく みさ子

手にうけて盆提灯をたゝみけり みさ子

簪のみさしかえて髪や夜櫻に みさ子

春晝や出船のへりのうす埃 みさ子

大池のまどかなる端や菖蒲の芽 みさ子

春雷や夜半灯りて父母の聲 みさ子

雨ふれば雨なつかしみ菊に縫ふ みさ子

菊人形ときけど外出の心なく みさ子

母に似し眉うれしけれ冬鏡 みさ子

炭ついでいつかしみじみと語りけり みさ子

木の芽雨母おうて傘まゐらせぬ みさ子

この評論を認めた時、みさ子は既に白玉楼中の姫となっていた。

同俳論の「三 境遇個性をよめる句」では、後半の句を挟みな

がら久女は『二十幾歳で早世したみさ子氏は、其性白萩の如く

優雅純眞。足の固疾に對してもすこしの不平もなく、大正女流

中唯一の年少處女俳人』とし、『花のさかりの年頃を引籠りがちに、只俳句を生命として暮し、ひたすら父母をたよる乙女心から父母をよめる句頗る多く』、『一生を父母の慈愛に生き、すなおな落付をもて、女らしいしとやかな佳句をのこしている』と綴っている。先の金子せん女とともに久女にとっては生涯忘れ難い同朋であったことがしみじみと窺われるのである。」

毛蟲の子莖を這ひゐし芒かな

火なき火鉢並ぶ夜寒の廊下かな

枯野菊廊下に出して寝たりけり

吾妻病院へ再入院 十月

トランプや病院更けて石蓐の雨

子等を夢見て病院淋し石蓐の雨

「やぶちゃん注…老婆心乍ら、「石蓐」は「つわ」でキク亜綱

キク目キク科キク亜科ツワブキ属 *Farfugium japonicum* を
指す。和名は「つやばふき艶葉蔦」、「艶のある葉の蔦」から転じたとされ
る。」

菊の日を浴びて耳透く病婦かな

始めて歩む日

病癒えて菊にある日を尊めり

菊もわれも生きえて尊と日の恵み

退院

菊に掃きゐし庭師午砲に立去れり

山茶花や病みつゝ思ふ金のこと

泣きしあとの心すがすがし菊畠

母留守の菊にそと下りし病後かな

個性^{さが}まげて生くる道わかずホ句の秋

妬心ほのと知れどなつかし白芙蓉

螺^ね線^じまいて崖落つ時の一葉疾し

鬘^{まん}鬘^{まん}大きく倒れ浸りぬ潦

「やぶちゃん注…老婆心乍ら。前に注したように「鬘^{まん}鬘^{まん}」は「けいと」と読んでいよう。「潦」は「にはたづみ（にわたずみ）」と読み、雨が降って地上に溜まっては流れる水をいう。」

櫛卷にかもじ乾ける菊の垣

「やぶちゃん注…老婆心乍ら。「櫛卷」は「くしまき」で女性の髪の結い方の一つ。紐で結んだりせず、束髪を櫛に巻きつけて頭頂部に留めるだけの簡単な髪型。「かもじ」は「髻」「髻文」字。頭の「か」は「かみ（髪）」「かずら（髻）」などの頭音で、

「もじ」は文字言葉（ある馴染みの単語の後半部を省いてその語の頭音又は前半部分を表わす仮名の下に付いて品よく言い表したり、婉曲に言い表わしたりする一種の女房詞）。狭義には、婦人が髪を結う際に豊かにするために添える毛、添え髪・入れ髪をいうが、広義には「おかもじ」で髪全般を指す女房詞でもある。ここでの久女は病み上がりであるから、髪全体という意の後者であろう。」

夫へ戻す子等の衣縫ふ冬夜かな

昌子猖紅熱 十二月

北斗凍てたり祈りつ急ぐ薬取り

燭とりて菊根の雪をかき取りぬ

「やぶちゃん注…長女昌子は当時満九歳。これは昌子が預けられていた宇内の実家へと病気の急を聴いて駆け付けたその際の景か、それとも小康を得た久女が昌子を宇内の実家から東京へ引き取った後に発症したとすれば東京の景か、孰れかは不詳。

後者か。後の句の雪は熱を冷やすために夜に薙き採っているの
であろう。」

父の忌 二句

御僧に門の雪搔く忌日かな

御僧に蕪汁あつし三回忌

柿の花 目白實家 五句

灯れば蚊のくる花柿の葉かげより

雨に來ぬ人誰々ぞ柿の花

「やぶちゃん注…「來ぬ」ここは無論、久女なればこそ、雨の中、退院した彼女を、わざわざ「きぬ人」、訪ね来てくれた人を、ではなく、「こぬ人」、来てくれないつれない人を、執拗（しゅうね）く数え上げているのである。」

花柿に簾高く捲いて部屋くらし

障子しめて雨音しげし柿の花

苑の柿まだ澁切れぬ會式かな

櫓山山莊歸子先生來遊句會 四句

潮干人を松に佇み見下せり

花石露の今日の句會に缺けし君

「やぶちゃん注…「缺けし君」底本では「缺」は「欠」。」

秋山に映りて消えし花火かな

石の間に生えて小さし葉齧頭

「やぶちゃん注…「齧」は底本の用字。これは大正一一（一九

二二）年十月に長崎に西下する高浜虚子を迎えた、橋本多佳子

豊次郎夫妻の櫓山荘での句会風景である。実際には既にこの年の三月二十五日に同じ櫓山荘で虚子は長崎旅行の帰途に句会を開いている（底本と同じ立風書房一九八九年刊の「橋本多佳子全集」の多佳子年譜による）。この時、久女の年譜によれば橋本夫妻は句会を見学とあり句会自体には参加していない。従って私は二句目にある「缺けし君」と久女が愛おしんでいるのは、実は多佳子であると思うのである。この後より久女は本格的な久女の句作指導（絵も描かされたと多佳子の言を載す）を受けるようになる。底本の久女の年譜には虚子来訪三月の記事がなく、逆に多佳子の年譜にはこの十月の虚子再訪の記事がない。何か、奇妙である。」

江津湖の日 十一句

「やぶちゃん注…角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」には大正一一（一九二二）年の句群として入っているが、実際にはその前年大正十年九月に熊本の江津湖畔に住んでいた『ホトトギス』で親しくなった斎藤汀女（後の中村汀女。当時二十一歳。久女より十歳若い）を訪ねた際の囑目吟である（言っておくと同句集の大正十年パートには一句しか載って

おらず、明らかに編集上の奇異な感じを与える。ここにはもしかすると、宇内との結婚生活を続けることとなった同年には実母さよから『夫が俳句を嫌うのなら俳句をやめるように説得された』（底本年譜）といった事情も影響しているのかも知れない。即ち、俳句をやめた『振りをしていた』可能性である）。

「江津湖」は「えづこ（えずこ）」と読む。現在の熊本県熊本市東区及び中央区にかかつて存在する湖。上江津湖と下江津湖（かみしも）に分かれた瓢箪型を成し、間を加勢川が繋いでおり、上江津湖の東側半分が中央区に属している。「水前寺江津湖公園」公式サイトの解説を参照されたい。本句群でも水棲植物が多く詠まれているが、特に九州の一部だけに自生する食用の淡水産稀少藍藻類である真正細菌藍色細菌門藍色細菌綱クロオコツカス目クロオコツカス科スイゼンジノリ *Aphanothece sacrum* の発生地として知られる。スイゼンジノリ（水前寺海苔）は茶褐色で不定形、単細胞の個体が寒天質の基質の中で群体を形成、群体は成長すると川底から離れて水中を漂う。但し、現在も上江津湖に国天然記念物「スイゼンジノリ発生地」はあるものの、一九九七年以降に於いて水質の悪化と水量の減少によりこのスイゼンジノリはほぼ絶滅したと分析されている（現在、自生地としては福岡県朝倉市甘木地区の黄金川一箇所のみ）。本

種は熊本市の水前寺成趣園の池で発見され、明治五（一八七二）年にオランダの植物学者スリンガー（Willem Frederik Reinier Suringar）によって世界に紹介された。因みにこの種小名「*sacrum*」は英語の「*sacrifice*」で「聖なる」を意味する。これは彼がこの藍藻の棲息環境のあまりの清浄なさまに驚嘆して命名したものという。ただ近年では人口養殖に成功し、食用に生産されている他、スイゼンジノリの細胞外マトリックス（*Extracellular Matrix*：生物細胞の外側を外皮のように覆うように存在している超分子構造体。）に含まれる高分子化合物の硫酸多糖であるサ克蘭（*Sacran* 種小名に由来）が重量比で約六一〇〇倍もの水分を吸収する性質を持つことから保湿力を高めた化粧水に応用されたり、サ克蘭が陽イオンとの結合によってゲル化するという性質を利用、スイゼンジノリを原料に生産したサ克蘭を工場排水などに投入してレアメタルを回収する研究などが行われているという（以上は主にウィキの「スイゼンジノリ」及びそのリンク先に拠った）。ここで藻を刈っているのは晩夏初秋の湖に繁茂してしまった水草を刈っているようにも見えるが、その「刈藻の香」というところなど、多量に刈り揚げて干された生臭い雑草としての水草類のそれとは思われず、この食用にされるスイゼンジノリや後

の句に掲げられる染料ややはり食用に供されるミズアオイ（後注参照）のイメージを想起してよいものと私には思われる。この句群、さながら、水棲水辺植物博物句集の体^{てい}を成してすこぶる附きで私には面白い。さればこそ久女も、ここで句には詠まれているかも知れぬスイゼンジノリのことを私が長々と注したことを、きつと許してくれる、と私は思うのである。」

遊船の提灯赤く揺れあへる

藻の花に自ら渡す水馴棹

「やぶちゃん注…「水馴棹」は「みなれぎを（みなれざお）」と読み、水底に挿して船を進める竿のこと。古語。」

水莊の蚊帳にとまりし螢かな

藻を刈ると舳に立ちて映りをり

藻刈竿水揚ぐる時たわみつゝ

「やぶちゃん注：「藻刈竿」藻を刈るために用いる専用の道具。藻刈器。現在ネット上で販売されているものを画像で視認すると、鎌の柄が非常に長い形状を成すものが多い。ここでもその柄が驚くほど長いものを想起出来る。」

湖畔歩むや秋雨にほのと刈藻の香

舟人や秋水叩く刈藻竿

水葱なぎの花折る間舟寄せ太藺中

「やぶちゃん注：「水葱」单子葉綱ツクサ目ミズアオイ科ミズアオイ *Monochoria korsakowii* の別名。ウィキの「ミズアオイ」によれば、「万葉集」では「水葱」として求愛の歌に詠まれるなどして古くから湖や川辺に住まう人々に親しまれてきたもので、青紫色の花は染物に利用された他、食用に供されることもあり、食用にする場合は若芽や若葉を塩茹でにして流水によく晒し、汁物・煮物・和え物に用いるとある。「太藺中」は「ふとゐ／なか（ふとい／なか）」と読んでいよう。「藺」は畳表に使われる湿地や水中に植生する单子葉植物綱イグサ目

イグサ科イグサ *Juncus effusus* var. *decipens* のこと。別名
トウシンソウ（燈芯草）。夏の季語。」

漕ぎよせて水葱の花折る手のべけり

藻に弄ぶ指蒼ざめぬ秋の水

羊蹄やぎしに石摺り上る湖舟かな

「やぶちゃん注：「羊蹄」やや湿った道端や水辺・湿地などに
植生する双子葉植物綱ナデシコ目タデ科スイバ属ギシギシ
Rumex japonicas のこと。若芽や若葉は山菜食用に、根は皮
膚薬になる。」

秋月とコスモス 五句

月の蝨をつたふ涙や轟りけり

熱涙拭ふ袂の緋絹や秋袷

われにつきゐしサタン離れぬ曼珠沙華

「やぶちゃん注：曼珠沙華の句では群を抜く久女ならではの佳句である。」

コスモスくらし雲の中ゆく月の暈

コスモスに風ある日かな咲き殖ゆる

「やぶちゃん注：大正一一（一九二二）年三十二歳の時の句群。久女は前年からメソジスト教会に通うようになり、この年の二月に洗礼を受け、十二月には夫宇内も受洗している。」

大正十四年姉死去 二句

霧しめり重たき蚊帳をたたみけり

夏帯やはるばる葬に間に合はず

「やぶちゃん注：前書の「大正十四年」は誤記と思われる（底

本にも右にママ注記が附されてある。年譜によれば姉越村静は大正一五（一九二六）年七月に逝去している。富士見書房平成一五（二〇〇三）年刊の坂本宮尾「杉田久女」によれば、『小倉から駆けつけたが葬儀に間に合わなかった』とあり、『三歳違いの姉は享年三十八』で、『草稿に久女は東京で最後に姉と会った日のことを、「いつになく新橋まで見送つてくれ優しく涙ぐんでゐた姉静子」としのんでいる』と記す（引用元では「静子」であるが正字化した）。なお、久女には兄二人姉二人の五人兄妹の三女であつたが、姉の一人は夭折している。」

＊

大正十四年　松山にて　五句

上陸やわが夏足袋のうすよごれ

夏羽織とり出すうれし旅鞆

替りする墨まだうすし青嵐

卓の百合あまり香つよし疲れたり

姫著莪の花に墨する朝かな

「やぶちゃん注」：「姫著莪」は「ひめしやが（ひめしやが）」で、
単子葉植物綱キジカクシ目アヤメ科アヤメ属シヤガ *Iris japonica* の近縁種ヒメジャガ（姫射干・姫著莪） *Iris gracilipes* 。常緑のシヤガとは異なり冬には枯れる。花期は五〜六月で直径四センチメートルほどの淡紫色の花を花茎に二、三個咲かせる。外花被片の中央は白色で、紫色の脈と黄色の斑紋があり、鶏冠状の突起がある（以上はウィキの「ヒメシヤガ」に拠る。[グーグル画像検索「ヒメジャガ」](#)）。

大正一四（一九二五）年五月二十四日の高浜虚子歓迎松山俳句大会出席時の吟詠。

なお、この一句群の前に打たれたアスタリスクは前の箇所と同じくやはり特異で、しかもその意図が読者には判然としない。やはりこれは久女の中の隠された意識の一つの区切りのようにも思われる。」

昭和元年 箱崎にて 七句

病間や破船に凭れ日向ぼこ

間借して塵なく住めり籠の菊

炭つぐや盃笑まれよむ子の手紙

筑紫野ははこべ花咲く睦月かな

山茶花の紅つきまぜよゐのこ餅

ゐのこ餅博多の假寝馴れし頃

ゐのこ餅紅濃くつけて鄙びたる

「やぶちゃん注」…「箱崎」現在の福岡県福岡市東区箱崎。福岡市東区南部にあり、現在は東区区役所が置かれている東区行政上の中心。古い町並みが残っており、筑前国一の宮で旧官幣

大社の管崎宮はなきみやなどの神社や史跡が多く存在する（以上はウイキ

[の「箱崎」](#)に拠る）。底本年譜の大正一五・昭和元（一九二六）年の条に、『十一月、病氣療養のため箱崎へ』とあり、『俳句に専心の心を固める』ともある。前掲の坂本宮尾氏の「杉田久女」には『入院治療するほどではなかったのであろう、しばらく福岡の箱崎で部屋を借りて静養』したとある。

「ゐのこ餅」「ゐのこ」は「亥の子」で旧暦十月即ち亥の月の最初の亥の日に行われる祭祀行事で主に西日本で見られるもの。亥の子餅を作って食べて万病除去や子孫繁栄を祈る、子供たちが地区の家の前で地面を搗いて回ったりする。玄猪・亥の子の祝い・亥の子祭りともいう。参照した[ウィキの「亥の子」](#)

によると、古代中国で旧暦十月『亥の日亥の刻に穀類を混ぜ込んだ餅を食べる風習から、それが日本の宮中行事に取り入れられたという説』、『古代における朝廷での事件からという伝承もある。具体的には、景行天皇が九州の土蜘蛛族を滅ぼした際に、椿の槌で地面を打ったことに由来するという説である。つまりこの行事によって天皇家への反乱を未然に防止する目的で行われたという。この行事は次第に貴族や武士にも広がり、やがて民間の行事としても定着した。農村では丁度刈入れが終わった時期であり、収穫を祝う意味でも行われる。また、地面を搗くのは、田の神を天（あるいは山）に返すためと伝える地方も

ある。猪の多産にあやかるといふ面もあり、またこの日に炬燵等の準備をすると、火災を逃れるともされる』とある。[ウィキ](#)の「[亥の子餅](#)」には、『名称に亥（猪）の文字が使われていることから、餅の表面に焼きごてを使い、猪に似せた色を付けたものや、餅に猪の姿の焼印を押したもの、単に紅白の餅、餅の表面に茹でた小豆をまぶしたものなど、地方により大豆、小豆、ササゲ、胡麻、栗、柿、飴など素材に差異があり、特に決まった形・色・材料はない』とあって、「摂津国能勢における亥の子餅」という項を設けて、そこには神功皇后と応神天皇に纏わる詳しい伝承が記されてある。応神天皇の誕生は神功皇后が三韓征伐から戻った筑紫での出来事であり、福岡との関連もありそうである。また、箱崎の筥崎宮参道沿いにある真言宗恵光院の「[タウンページ](#)」の記載にある「年間定例行事」の十一月に『初亥の日のいのこ金幣祭』というのがあり、『いのこまつりは地方により祝い方が異なるが中国の行事（この日に餅について食べると万病がよくなる）を真似て古くは平安時代から伝わる風習があ』り、『いのこ節句というところもあればイロリの焚き初めといい季節の変わり目と考えているところ、稲の収穫を祝うところもある』とし、当院では愛染明王を御神体として、『すし桶と一升枰を用いてその中に明王の金幣を立て、いのこ

餅、御神酒を供え季節の野菜や果物を盛りつけて』祀るとある。
『すし桶や一升枥を使うのは家庭円満で益々繁昌、良縁、安産
を願うという意味』の他に、『イロリを祝うまつり』で、『参詣
者には金の御幣と供物のぎんなん、紅白の鏡もち、稻穂』が授
けられるともある。」

橋本多佳子氏と別離 四句

忘れめや實葛の丘の楊二つ

「やぶちゃん注…「實葛」は「みくず」で常緑蔓性木本のモク
レン亜綱マツブサ科サネカズラ *Kadsura japonica* のこと。
ビナンカズラ（美男葛）ともいうが、これは昔この蔓から粘液
をとって整髪料に使ったことに由来する。葉は長さ数センチメ
ートルで光沢があり、互生。通常は雌雄異株で八月頃開く花は
直径一センチメートルほど。十枚前後の白い花被に包まれ、中
央部分に雄蕊或いは雌蕊がそれぞれ多数、螺旋状に集まってい
る。雌花の花床は結実とともに膨らみ、キイチゴを大きくした
ような真っ赤な丸い集合果をつくる。花は葉の陰に咲くが、果
実の柄は伸びて七センチメートルにもなることがあり、より目

につくようになる。単果は直径一センチメートルほどで、全体では五センチメートルほどになる。果実は個々に落ちて、あとにはやはり真っ赤なふくらんだ花床が残り、冬までよく目立つ（ここまでは主にウィキの「サネカヅラ」に拠る。グーグル画像検索「Kadsura japonica」）。この「丘」とは櫓山荘のあった小倉北区中井浜櫓山やぐらやまのことと思われる。」

芋畠に沈める納屋の露けき灯

遊船のみよしの月に出でたちし

脱ぎ捨てし木の實のかさまころげをり

「やぶちゃん注…これらは橋本多佳子が、昭和四（一九二九）年十一月、夫豊次郎の大阪橋本組の創立者で父の橋本料左衛門の逝去に伴い、夫が本社（豊次郎は大阪橋本久美北九州出張所駐在重役であった）へ移ることとなり、櫓山荘から大阪帝塚山に転居したことを指す（豊次郎は昭和一二（一九三七）年九月に享年五十で逝去したが、櫓山荘は後の昭和一四（一九三九）年までは多佳子の別荘として使用された）。なお、この十一月

二十三日には「ホトトギス四百号記念俳句大会」が大阪中央公会堂で開催され、それに出席した久女は多佳子と再会、多佳子は久女の紹介で多佳子終生の師となる山口誓子に初めて逢っている（この部分は立風書房一九八九年刊の「橋本多佳子全集」年譜に拠る）。久女三十九、多佳子三十歳。」

山茶花の簷にも白く散りたまり

京都吉田に鈴鹿野風呂氏訪問 一句

王城、草城、白川御夫婦、雄月氏等

節分の宵の小門をくぐりけり

「やぶちゃん注…これは編年式編集の角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」から、大正一三（一九二四）年のことであることが分かるが、底本年譜には記載がない。久女三十四歳。

「吉田」は京都府京都市左京区南部の地域名。

「鈴鹿野風呂」（すずか のぶろ 明治二〇（一八八七）年～昭和四六（一九七一）年）は俳人。本名、登。京都生。京都帝

国大学卒。高濱虚子に師事し、『ホトトギス』同人。大正九（一九二〇）年の京大三高俳句会を母体として日野草城・田中王城らとともに『京鹿子』を創刊、同誌は後に野風呂が主宰となつて関西に於けるホトトギス派の中軸となつていった。俳諧活動の傍ら学校でも教鞭をとり、戦後の一時期には旧制京都文科専門学校の最後の校長を務めている。『京鹿子』発行所でもあつた吉田中大路町にあつた生家は現在、野風呂記念館となつてゐる（主に[ウイキの「鈴鹿野風呂」](#)に拠る）。当時三十七歳。現代俳句協会の「現代俳句データベース」に載る彼の句を掲げておく。

しぼり出すみどりつめたき新茶かな

北嵯峨の水美しき冷奴

雲を吐く三十六峯夕立晴

「王城」田中王城（明治一八（一八八五）年～昭和一四（一九三九）年）は俳人。京都生。本名、常太郎。初め、正岡子規の句風を慕い、中川四明にも学んだ。後に高濱虚子に師事し、『ホトトギス』同人となり、京都俳壇の第一人者となった。大阪俳壇の先進とともに関西全般に多くの門下を育て、また雑誌『鹿笛』を刊行した（思文閣「美術人名辞典」に拠る）。ネット上から句を引く。

竹伐るやうち倒れゆく竹の中

水取や廂につづく星の空

山茶花のあらたに散りぬ石の上

「白川」『京鹿子』 同人の水野白川（本名、武）であろう。彼の句はネットでは次の一句しか見つからなかった。

京なれやまして祇園の事始

「雄月」不詳。」

京都白川莊 一句

鶯や螺鈿古りたる小衝立

「やぶちゃん注：大正一三（一九二四）年の句。「京都白川莊」不詳。」

琵琶湖 二句

舳先細くそりて湖舟や春の雪

水鳥に滋賀の小波よせがたし

「やぶちゃん注…以下、「時雨雲」までの十句は総て昭和四（一九二九）年三十九歳の時の作。」

若王子 一句

隣起圖繪よむ一行に梅さかり

「やぶちゃん注…昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」では前書を、

若王寺 一句

とする。これは前後の京都関連から見ると、京都府京都市左京区若王子町の熊野若王子神社か。但し、同神社に「隣起圖繪」を確認出来ない。また桜の名所ではあるが、梅はネットでは掛からない。」

春雪に四五寸青し木賊の芽

洛北詩仙堂 一句

きこえ來る添水の音もゆるやかに

「やぶちゃん注」：「詩仙堂」正式には凹凸窠（おうとつか）。京都市左京区一乗寺門口町にある江戸初期の徳川家家臣石川丈山（天正一一（一五八三）年～文一二（一六七二）年）が隱居のため造営した山莊跡で、現在は曹洞宗丈山寺。名前は中国の詩家三六人の肖像を掲げた「詩仙の間」に由来し、詩仙は日本の三十六歌仙に倣って林羅山の意見を求めながら、漢晋唐宋の各時代から選ばれた。肖像は狩野探幽によって描かれ、四方の壁に掲げられてある。「凹凸窠」とは凸凹の土地に建てられた住居の意味で、建物や庭園は山の斜面に沿って作られてある。丈山は詩仙の間を含め建物や庭の十個の要素を凹凸窠十境という名数に見立てた。寛永一八（一六四一）年、丈山五十九の時に造営され、九十歳で没するまでここで詩歌三昧の生活を送った。小有洞という門を潜って竹林の中の道を行くと石段の上に老梅関という門があり、その先に詩仙堂の玄関がある。玄関上は三階建ての嘯月楼となっており、その右手（西側）には瓦敷の仏間と六畳、八畳の座敷、左手には四畳半の詩仙の間、他

にも読書の間など多くの部屋がある（嘯月楼と詩仙の間の部分のみが丈山当時の建築で、他は後世の改築）。庭園造りの名手でもあった丈山自身により設計された庭は四季折々に楽しむことができ、特に春の阜と秋の紅葉で知られ、縁の前に植えられた大きく枝を広げた白い山茶花も見所の一つである。一般に猪威しとして知られる添水そいうずと呼ばれる仕掛けにより時折り響く音は、鹿や猪の進入を防ぐという実用性とともに静寂な庭のアクセントとなっていて、丈山も好んだという（ここまでウイキの「詩仙堂」に拠ったが、京に暗い私が実はとても好きな名所である）。」

京都にて 三句

芹すゝぐ一枚岩のありにけり

梅林のそゞろ歩きや笥鳴る

探梅に走せ参じたる旅衣

粟生光明寺歸途

時雨雲はるかの比叡にかゝりけり

「やぶちゃん注…「光明寺」京都府長岡京市粟生^お西条ノ内にある西山浄土宗総本山報国山光明寺。法然が初めて念仏の教えを説いた地で、紅葉の名所としても広く知られる。参照したウィキの「光明寺（長岡京市）」によれば、『法然を慕い帰依した、弟子の蓮生（熊谷直実）が』、建久九（一一九八）年に『当地に、念仏三昧堂を建立したのが始まりである。のちにここで法然の遺骸を茶毘に付し、廟堂が建てられた。法然の石棺から、まばゆい光明が発せられたという。四条天皇はそのことを聞いて、光明寺の勅額をあたえたという』。建永二（一二〇七）年に『熊谷で予告往生を遂げた蓮生の遺骨は遺言により』『この『念仏三昧院に安置された』とある。因みに熊谷直実は私が殊の外好きな鎌倉武士である。』

法然院

山かげの紅葉たく火にあたりけり

「やぶちゃん注…「法然院」京都市左京区鹿ヶ谷御所ノ段町にある寺院（現在は浄土宗系単立宗教法人で正式には善氣山法然院萬無教寺と号するが、院号の法然院の方で知られる）。[ウイキの「法然院」](#)によれば、『寺の起こりは、鎌倉時代に、法然が弟子たちと共に六時礼讃行を修した草庵に由来するという』。『寺は鄙びた趣きを』持ち、『茅葺で数奇屋造りの山門』の内には『内藤湖南、河上肇、谷崎潤一郎、九鬼周造などの著名な学者や文人の墓が』多いとある。」

豊後洋上にて 二句

春潮に群れ飛ぶ颯縦横に

春雷や俄に變る洋の色

「やぶちゃん注…昭和二（一九二七）年四月三日に出席した道後公会堂の第一回関西俳句大会の際の句であろう。「豊後洋上」とは福岡から豊後水道を渡ったその時の船旅の途次を指すものと思われる。」

昭和四年 松山にて 二句

師に侍して吉書の墨をすりにけり

春雨や木くらげ生きてくぐり門

「やぶちゃん注…底本年譜の当該年に松山行の記載はない。」

花衣（昭和四年より昭和十年まで）

逆潮をのりきる船や瀬戸の春

「やぶちゃん注…この句は、富士見書房平成一五（二〇〇三）年刊の坂本宮尾「杉田久女」によれば、昭和九（一九三四）年五月発行の『ホトトギス』の、三度目になる雑詠巻頭五句の内の一句である。」

教へ子に有無を言はせず家の春

春寒の銀細ひきよせ語りけり

舟に乗りて眺むる橋も春めけり

春浅く火酒したたらす紅茶かな

梨畠の朧をくねる徑かな

くぐり見る松が根高し春の雪

「やぶちゃん注…この句も、坂本宮尾「杉田久女」によれば、昭和九（一九三四）年五月発行の『ホトトギス』の、三度目になる雑詠巻頭五句の内の一句である。この句について坂本氏は「企救の高浜」と題して詳細な評釈をなさっている。部分引用ではその評釈の素晴らしさを損なうので例外的に冒頭の句を除く全文を引用させて戴く（アラビア数字を漢数字に代えた）。

《引用開始》

「松が根」とは松の根のことで、この句は根上りの松を詠ん

だもの。大和の山辺の道、兼六園など、日本の各地に昔から有名な根上りの松がある。松は常緑であることから、古代より神霊の宿る木として扱われ、永遠性の象徴とされてきた。『万葉集』にも松を詠んだ歌が数多く収められている。

万葉の人びとは松の木だけではなく、崖などにしがみつくように生えた松の根にも目をとめた。盛りあがって入り組みながら地を這っている根を見て、先がどこまで伸びているのかわからないその強靱さに感嘆し、松の根もまた、心や命の永遠性を表すものとして尊んだ。根が深く長く伸びているように、いつまでも深く思う心持ちの象徴になったのだという。

久女の草稿には、この句と（冬浜の煤枯れ松を惜しみけり）の間に、「この万葉の根上り松は次第に煤煙と漁夫らのあらずところにある。今上陛下のよき御屏風の小倉赤坂の名所万葉にうたはれし企救の高浜も次第に枯れ今数本あるのみ。おしむべし」（七十七頁）と詞書がある。「やぶちゃん注：「おしむべし」の「お」の右にママ注記。」

万葉の企救の高浜の根上りの松の歌とは、

豊国の企救の高浜高々に君待つ夜らはさ夜更けにけり（十

二―三三二〇）

（豊国の企救の高浜の高々に、まだかまだかと君を待つ夜は

もうふけてしまったことだ)

「豊国の企政の高浜」までは、「高々」を起こすための序詞である。

『万葉集』にはこの浜を詠んだ歌がほかに三首ある。これらの歌の「企救の高浜」、「企救の長浜」、「企救の浜」は、呼び方は違うが同じ場所で、現在の小倉北区赤坂から戸畑区の洞海湾口までの響灘に面した国道一九九号線沿いの海岸を指すもので、小倉に残る高浜町、長浜町という町名はその名残りとなっている。

瓢箪は長浜について『小倉日記』に、「聞く今宵長浜に盆踊ありて夜を徹すと。小倉男女の高く笑ひ高く歌ひて門を過ぐるもの暁に至るまで絶えず」と記している。翌年には、瓢箪も踊りを見に行き、〈満潮に踊の足をあらひけり〉と詠んだ。

久女の句は、高く盛りあがった松の根を仰ぎ見ると、春の雪が残っていた、あるいは春の雪が舞っ

てきたという句意であろう。「春の雪」という季語の感じがよく出ている。松の緑と春の淡雪という色彩の取り合わせから古典的な実の世界が展開し、そこに永遠性とはかなさの対比が浮かびあがる。この句の表現上の手柄は「松が根」という措辞である。松の根を「松が根」と詠むことで、万葉の時代からこの

語がまとう情趣が、句に高い格調を与えている。『万葉集』にも詠まれた松を眺めたときに湧いた感動を伝える清々しい写生句で、「松が根高し」と荘重に泳いあげ、「春の雪」と名詞で結んだ句の姿は端正で、調べも重厚である。

《引用終了》

宮尾氏の当該書での評釈は孰れも他の追従を許さぬ鋭いものである。是非、一読をお薦めする。」

岩壁を離れし巨船春の雪

ぬかづいてねぎごと長し花の雨

「やぶちゃん注…昭和九（一九三四）年四十四の時の作。」

野々宮^{のみや}を詣でしまひや花の雨

「やぶちゃん注…昭和三（一九二八）年三十八の時の作。前掲の坂本氏の著作によれば「野々宮」は京都市右京区嵯峨野宮町にある野宮神社^{のみや}である。「野宮じゅうたん苔」の庭園で知られる京の私の好きな神社の一つである。」

ぬかづきしわれに春光盡天地

春光に躍り出し芽の一行に

莊守も芝生の春を惜みけり

春惜む布團の上の寢起かな

佇めば春の潮鳴る舳先かな

「やぶちゃん注…昭和一〇（一九三五）年四十五の時の作。」

春潮に流るる藻あり矢の如く

「やぶちゃん注…本句群「花衣」は「昭和四年より昭和十年まで」とあるのであるが、この句は角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」では大正一一（一九二二）年のパートに載る。坂本氏の「杉田久女」でも、この句は同年三月に虚子を迎えて門司で開かれた句会的一句（句会の席題が「春潮」）と

するから、この配置は不審である。私には虚子に対する久女のある屈折した意識がこれをここに配させたように思われる。」

いつとなく解けしなつて纜春の潮

春の山暮れて温泉の灯またたけり

春の襟染めて着初めしこの袷

灌沐の淨法身を拜しける

「やぶちゃん注…昭和七（一九三二）年四十二の時の句。小倉北区寿山町にある黄檗宗の名刹こうじゆさん広寿山福聚寺での吟。「灌沐」は「くわんもく（かんもく）」で、陰暦四月八日の釈迦の生誕日に花御堂（はなみどう）に安置した釈迦像に香湯（甘茶）を注ぎかけて洗い清めることをいう。春の季語。但し、team-kuma氏のブログ記事『[小原「夏の七草そば」と杉田久女句碑——14](#)』によれば、長女石昌子は「かんよく」と読んでいる旨の記載がある。「淨法身」は「じようほうしん（じようほうしん）」で、禅宗や浄土宗などで灌仏会で香湯を灌ぐ際に唱える灌沐偈かんもくげ

（「仏説浴像經」の一句を基にした偈）に、

我今灌沐釋迦佛（我れ今、釋迦佛を灌沐す）

淨智功德莊嚴聚（淨智をもつて莊嚴せる功德聚にて）

五濁衆生令離苦（五濁の衆生をして苦を離れしめ）

願証如來淨法身（願はくは如來の淨法身を証せん）

とある。最後の句は——この灌仏の功德によつて願わくはこの現世の衆生が煩惱の垢を離れてともに悟りを開いて如来と同じ清らかな法身（永遠不滅の仏法の真理そのもの。理法としての仏。法性身）を體現しますように——の意である。」

ぬかづけばわれも善女や佛生會

「やぶちゃん注…次の句とともに昭和七（一九三二）年四十二歳の時の作。小倉北区寿山町にある黄檗宗の名刹広寿山福聚寺での吟。坂本氏は「杉田久女」でこの句と先に出た二年後の「ぬかづきしわれに春光盡天地」の「ぬかづけば」と「ぬかづきし」の呼吸の違いに着目し、さらに「灌沐の」及び次の「無憂華」の句をも含めて久女の内的葛藤を鋭く抉り出している（同書一〇〇～一〇一頁）。是非読みたい。」

無憂華の木蔭はいづこ佛生會

「やぶちゃん注…同前での吟。」

葺きまつる芽杉かんばし花御堂

「やぶちゃん注…昭和六（一九三一）年の作。」

波痕のかわくに間あり大千潟

光子縣立小倉高女卒業 三句

靴買うて卒業の子の靴磨く

卒業やちび靴はくも今日限り

青き踏む靴新らしき處女ごころ

「やぶちゃん注…昭和八（一九三三）年三月十五日の次女光子卒業式の時の作。久女、四十三歳。次女光子は大正五（一九一

六）年生まれであるから、当時十七歳（高等女学校は五年制）。同日の久女の日記に『光子卒業式。快晴也。／光子も二百三人中の優等生の一人にてうれしかりき』（「／」は改行を示す。底本全集の第二巻所収の抄録日記を底本としつつ、恣意的に正字化した。）』

光子女子美術卒業 一句

卒業の子に電報すよきあした

「やぶちゃん注」：「女子美術」東京の私立女子美術専門学校（昭和四（一九二九）年に専門学校に昇格。現在の女子美術大学）当時は本郷菊坂に校舎があった。次女光子の女子美合格は先に引用した「日記抄2」の上京までの一連の記載を読むに、昭和八（一九三三）年年初の非常に速い段階で決まっていたように読める（もしかするとその前年末の可能性もありそうな記載である）。」

身の上の相似て親し櫻貝

「やぶちゃん注…この句には酷似した句として、角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」の昭和八（一九三三）年のパートに載る（実は私は同句集の編年には既に何箇所かで疑問を感じているのであるが、坂本宮尾氏の「杉田久女」によれば、草稿は昭和九年と記されているとある。そうでないと確かに「おかしい」のである）、

由比ヶ濱

身の上の相似てうれし櫻貝

がある。ところが何と、この「杉田久女句集」の本句集のずっと後半には突如、

由比ヶ濱

身の上の相似でうれし櫻貝

という驚くべき、酷似し乍ら逆ベクトルの否定形句形でそのまま出現するのである。お分かりの向きもあろうが、これは前書

「由比ヶ濱」に解く鍵があり、それを坂本氏は久女の草稿を精査する中で美事に解明されている。これについては軽々に注する訳にはいかない。というより、この句は普通に彼女の句集を読んでさりと読み流ししてしまう句であろう。それが再度、否定形で出ることの驚愕の部分で初めてこの句の持つ意味が自ずと問題になってくる。それはまた「身の上の相似でうれし櫻貝」の句が出現するまさその「場所」でじつくりと考えてみたいのである。」

春蘭の咲いてゐたれば木の根攀づ

炊き上げてうすき緑や嫁菜飯

「やぶちゃん注：「嫁菜」一応、ルビもないので「よめなめし」と読んでおくが、私は実は「うはぎめし」と読みたい。キク亜綱キク目キク科キク亜科シオン属ヨメナ *Aster yomena* は若芽を摘んで食べるがこれはまさに万葉の昔からの習慣で、古くは「おはぎ」「うはぎ」と読んだ。「万葉集」巻第十の一八七九番歌に、

春日野に煙立つ見ゆ少女らし春野のうはぎ採みて煮らしも

同巻第二に載る柿本人麿の二二一番歌（二二〇番の長歌の反歌）にも、

妻もあらば摘みてたげまし佐美の山野の上のうはぎ過ぎに
けらずや

とある（「食ぐ」は飲食することをいう古代の動詞）。久女は俳句の世界だけでなく、生活に於いても古えの季節を大切に
女性であつたのである。」

かきわくる砂のぬくみや防風摘む

「やぶちゃん注…角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」では昭和九（一九三五）年のパートに、

筑前博多元寇の防壘跡

の前書を持って載り、この句から「磯菜つむ行手いそがにいざ子ども」までの五句はセットで博多の元寇防壘跡での囑目吟であることが分かる。底本年譜には防壘訪問の条々はないが、昭和九年の二月の条に『「梅探る——香檀神宮にあそびて」の句』とあり、この『香檀神宮』とは香椎神宮のことであるから（ウ

イキの「香椎宮」に社伝では仲哀天皇九（二〇〇）年に熊襲征伐の途次、かしひのみや 檀日宮（古事記では「訶志比宮」）で仲哀天皇が急逝したために妻の神功皇后がその地に祠を建てて天皇の神霊を祀ったのが香椎宮の起源とされるとあり、久女は「香檀」も恐らく「かしひ（かしい）」と読んでいるであろうことが推定される）、防塁に近い。以下に見る通り、春の句であり、この二月の探梅の折りであった可能性が強いようにも思われる。

「元寇の防塁」は鎌倉時代、蒙古の襲来（元寇）に備えて築かれた、北部九州の博多湾沿岸一帯に築かれた石による防衛用の石造防壁で、[ウィキの「元寇防塁」](#)によれば、本来の呼称は石築地いしつゝいじで、高さ及び幅は平均して二メートルほど、総延長は西の福岡市西区今津から東の福岡市東区香椎まで約二十キロメートルに及ぶ、というのが定説である。内部には小石を詰めて陸側に傾斜を持たせ、海側は切り立っている。『弘安の役の際には防塁が築かれたところからはモンゴル・高麗軍は一切上陸することが出来なかった』とある。

「防風」海岸域に自生するセリ目セリ科ハマボウフウ *Glehnia littoralis* であろう。言わずもがな乍ら、酢味噌和えや刺身のツマとして食用になる。」

防人の妻戀ふ歌や磯菜摘む

「やぶちゃん注：「磯菜摘む」春の季語。「磯菜」は通常、食用になる主に岩礁海岸の沿岸性藻類、岸边近くや打ち上げられた海藻類を指すが、私はこれは前の句と同じ、防風、ハマボウフウ *Glehnia littoralis* を指していると読む。冒頭に「防風摘みを出して、ここからは砂浜を海辺に下りて海藻摘みに変更したというのも無粋で、意図的にわざわざ離れておいて防塁（後述）Ⅱ「石疊いりではいづこ」かというようなシーンの変更を行う必要性自体ないからである。そもそも「磯菜」は「山菜」の対義語であるから寧ろ、海藻類の他に海浜性食用植物を含んだ表現ととって何ら問題がない。単独でこれより後の句を読んだら、若しくは、この句なしにそれらを読んだら、恐らくは殆んどの鑑賞者が海藻を採っていると読むであろう。しかしそれは大いなる勘違いなのだとは私は思うのである。大方の御批判を俟つものではある。

「防人の妻戀ふ歌」久女は鎌倉時代の戦場遺跡をさらに万葉の過去にまで遡って時代幻想している。[ウィキの「防人」](#)によれば、防人は天智天皇二（六六三）年に朝鮮半島の百濟救済のために出兵した倭軍が白村江はくすきのえの戦いにて唐・新羅連合軍に大敗し

たことを契機に、唐からの侵攻を憂慮して、九州沿岸の防衛のために配備された辺境防備兵である（もとは「岬守」^{みさきまもり}と呼ばれるものに唐の制度である「防人」の漢字を当てたもの）。任期は三年で『諸国の軍団から派遣され、任期は延長される事がよくあり、食料・武器は自弁であつた。大宰府がその指揮に当たり、壱岐・対馬および筑紫の諸国に配備された』。『当初は遠江以東の東国から徴兵され、その間も税は免除される事はないため、農民にとつては重い負担であり、兵士の士気は低かつたと考えられている。徴集された防人は、九州まで係の者が同行して連れて行かれたが、任務が終わつて帰郷する際は付き添いも無く、途中で野垂れ死にする者も少なくなかつた』。天平宝字元・天平勝宝九（七五七）年『以降は九州からの徴用となつた。

奈良時代末期の』延暦一一（七九二）年に桓武天皇が健児^{こんでい}の制（庶民出身の軍団の徴兵制が廃された代わりに設けられた兵制度で郡司の子弟や勲位者などから選抜された。「こんに」と読む）を成立させて軍団や兵士が廃止されても、『国土防衛のため兵士の質よりも数を重視した朝廷は防人廃止』は先送りしている。実際、八世紀末から十世紀初めにかけては、『しばしば新羅の海賊が九州を襲つた（新羅の入寇）。弘仁の入寇の後には、人員が増強されただけではなく一旦廃止されていた弩』

（ど／おおゆみ…長射程で破壊力が強い代わりに扱いが難しかった大型の弓。』を復活して、貞観、寛平の入寇に対応した。』
『院政期になり北面武士・追捕使・押領使・各地の地方武士団が成立すると、質を重視する院は次第に防人の規模』は縮小され、十世紀には『実質的に消滅した』とある。「万葉集」にも、最も多く収載される巻第二十の若倭部身麻呂の四三二二番歌、

我が妻はいたく戀ひらし飲む水に影さへ見えてよに忘れず

など、多くの防人歌が載るのは御存じの通りである。」

元寇の石疊とりではいづこ磯菜摘む

寇まもる石疊とりではいづこ磯菜摘む

磯菜つむ行手いそがंनीざ子ども

「やぶちゃん注…「いざ子ども」坂本宮尾氏は「杉田久女」で本句について、『俳句には珍しい「いざ子ども」という用語は、

実は『万葉集』などにしばしば見られる表現で、目下の者、燃焼の者たちに対して親しみをこめていうときに用いられる』と記され、以下の「万葉集」巻第六の大伴旅人の九五七番歌を引いて、本句が間違いなくこの和歌の本歌取りであるといった主旨の発言をなさっておられる。

冬十一月、大宰の官人等、

香椎の廟を拜み奉り訖へて退り歸りし時に、

馬を香椎の浦に駐めて、各懷を述べて作れる歌

師大伴卿が歌一首

いざ子ども香椎の潟に白妙の袖さへ濡れて朝菜摘みてむ

坂本氏曰く、『この句は旅人の本歌を踏まえつつ、久女の潑刺とした精神がこめられた新しい作品となつて』おり、『春の渚の浪音と潮風が感じられる、勇んだ勢いのある句』で、『行く手の春の浜辺へと、さらに洋々たる文芸の未来へと誘う、久女の連衆への呼びかけである』と評されている。全く同感である。最後の『洋々たる文芸の未来へと誘う、久女の連衆への呼びかけ』という部分に首をかしげる方のために、この句について久女が昭和九年八月発行の『天の川』に以下のような自注を載せ

ていることをお示ししておく。

＊

「いざ子供」のこと

七月号高崎鳥城氏の御文章をもつともと存じます。あの句中にふくむ子どもは私の門下の女流、子どもの如く思ふ人達のもろともに句作精進のゆく手をいそぎ、道草をつまず、一歩でも人生の旅路をつないで進まうといふいみをのべたまで、自分でも大した句とは存じませぬ。が只私の目下の、門下女流、及生活の闘にあへぎある子らへのははげましのいみをうたつたものです。私の長女昌子も今横浜で若いのに働いてます。次女光子十九歳之また少い学資で日々自炊しつゝ繪を一心に勉強し私は學資の爲め之また人生の闘にあへぎつゝけてます。二人の愛する娘の事を考へ、人生のもろもろの苦も（ことばは古いが）子らによびかけ自分によびかけずにはゐられませんでした。

＊

なお、この引用の最後の行には下インデントで『（七月八日）』というクレジットが附されてある。」

落の臺ふみてゆききや善き隣

甦る春の地霊や蔭の臺

「やぶちゃん注…角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」では以上二句は昭和七（一九三二）年のパートに置かれている。」

蘆の芽のひらき初むれば初裕

水上へうつす歩みや濃山吹

「やぶちゃん注…「濃山吹」は「こやまぶき」と読む。八重山吹（バラ目バラ科バラ亜科ヤマブキ属ヤマブキ *Kerria japonica* 品種ヤエヤマブキ *Kerria japonica* f. *plena*）の中でも、特に花の黄色が鮮やかなものを指す。」

百合根分鋏切りし芽を惜しと思ふ

「やぶちゃん注…この句は角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」では昭和八（一九三三）年のパートに置かれ

ている。」

筆とりて門邊の草も摘む氣なし

晴天に芽ぐみ來し枝をふれあへる

盆に盛る春菜淡し鶴料理る

鶴料理るまな箸淨くもちひけり

「やぶちゃん注：「鶴料理る」「つるつくる」と読む。[ウィキの](#)

[「ツル」](#)の「文化」の項には（アラビア数字を漢数字に代えた）、

『江戸時代には鶴の肉は白鳥とともに高級食材として珍重されていた。武家の本膳料理や朝鮮通信使の饗応のために鶴の料理が振る舞われたことが献立資料などの記録に残されている。

鶴の肉は、江戸時代の頃の「三鳥二魚」と呼ばれる五大珍味の一つであり、歴史的にも名高い高級食材。三鳥二魚とは、鳥Ⅱ

鶴（ツル）、雲雀（ヒバリ）、鵒（バン）、魚Ⅱ鯛（タイ）、鮫鰯

（アンコウ）のことである』とある。久女にはこの折りの様子を綴った随筆「鶴料理る」（「かりたご」昭和九（一九三四）年

四月号）がある。以下に全文を紹介する（底本第二巻所収のものを恣意的に正字化した）。この二句と併せて以下を読む時、久女の中に稀有の日本女性の優しさを見る思いが私にはするのである。

《引用開始》

鶴料理る

一月三十一日の夜、ちさ女さんがきて、

「朝鮮の妹から白鶴を一羽送ってきましたから、先生にも一片もつて來ました」

といつて、お皿にのせた一塊の鶴の肉をさし出した。

鶴の肉といふものは、私が子供の時、東京の實家で、やはり朝鮮から送られたのを食べた事はあるが、もう三十年も前の事で、一向覚えもないので、手にとりあげて眺めると、牛肉の様な赤い肉だった。

「これは胸の肉なのでございますよ。ゆふべは二時頃迄鶴を料理るのにかゝりました。そして肉は、けふ主人と二人で三十軒ばかりおわけしました、白鶴は塗製にやつたりして、此三日ほど鶴の事でさわいでます、お隣の方など、鶴は食べた事ないからたつた一片下さい、おつしやるから二三片差上げましたら、

今日は、汽車にのつて直方の七十幾つかのお母さんにあげに出になるさうです」

と、ちさ女さんは鶴の肉を方々へわけて、自分達夫婦は骨ばかりしやつぶつたとも愉快げに話して笑ふのだつた。

「先生もう一片の方は、縫野さんの坊ちやんに上げて下さい。いくよさんがあんなに心配していらしたから」

と、ちさ女さんはもの優しく言ひおいて歸つていった。

翌日私は、草庵のまはり歩きまはつて、まだ蒼の固い紫色の蒔の莖や、芹、嫁菜をつんで來、市場へいつて、赤い小蕪や春のお菜を五六種買つて來た。

それらをきれいに洗ひ、塗盆にのせて、居間の疊の上に置いた。へやの中はきれいに取かたづけられ、名香の煙がしつかに流れてゐた。

燈下の屏風の前に、まないたをすゑて坐つた私は、一塊の鶴の肉や、庖丁、摘草籠に入れた芹よめな、盆に瑞々ともられた春菜の彩どりをめでながら、白布をしいた俎板の上で、しづかに鶴を庖丁しはじめた。

私はふと氣がついて、机の上の歳事記をひつぱり出し、鶴の庖丁といふ所をめくつて見た。

例句が少ないので、鶴を料理る宮中の古式を想像する事もかた

く、千年切も萬年切もわからないが、鶴の肉を、すき乍ら、大空を飛翔してゐる白鶴を想像したり、ちさ女さんの語った、鶴のもものうす紅色の肉だつたら一層料理るのにも感じがいいだらうにとそんな事を思ひつゝうすくへいだ肉を、古代蒔繪のふたものにもりならべるのであつた。

此蒔繪のふたものは、主人の家が昔大庄やをしてゐた頃殿様から拜領したといふ根ごろ塗の本膳中の御椀なので、三百年前の、金箔總まき繪の大時代もの。私が朝夕机邊にむいて、愛でてゐる器なのであるが、白鶴の肉に芹や若菜、露の珠等山肴をよりよせて、じつと眺めてゐると、何ともいへぬ古典のなつかしさがわいてくるのだつた。

さてその翌日は、そのふたものを持つて、記念病院をたづね、手術後の令息の容體をきいてから、白鶴の肉をあげると、いく代さんは、看病やつれた顔に喜びの色をうかべて

「静彌さん。すぐ淋てあげませうね、ですが瀧川さんも、昨日から酸素吸入してらして、大分おわるいから一片でもさし上げませう」

とふた物のまゝ、令息の友人で大分容體のわるい瀧川さんの病室へ出てゆかれたが、直ぐ戻つてきて、

「先生瀧川さんの奥様が大變お喜びになつて、でもおはつに頂

戴してはすまないから今頂戴にこちらから出ますとおつしやつてでした」

との事。まもなく瀧川夫人が小皿を手にしては入ってきて私にもあいさつされ、鶴の肉を三切もらひ、ふきのとうや他の春菜もとりそへて歸られた。私も御病人の御見舞をのべて、せめて、日がかゝつても全快さるゝ様にいのつた。

いくよさんは、火鉢に小さい鍋をかけて鶴の肉をにはじめた。私は袂から、長崎のあちやさんと、オモチヤの鈴と、香椎でひろつた櫃のみを、靜彌さんの枕もとにさし出した。

病人はねどこの上に起き上つて大變機嫌がよく、私のあげた鈴をならして、鶴の吸ものの出来るのをまつてゐる。そこへ御主人も製鐵所の歸りみちにたちよられ、

「先生も御一緒に御食事しておかへりなさい、今日は私の誕生日だから」

とすゝめられるので、つい私も吞氣にそのきになり、御病人があの古蒔繪のうつはで、機嫌よく白鶴の吸ものを吸はれるそばで、縫野御夫婦と一緒にのんびりと御馳走をいたゞいた。

私のもつていつた鶴の七片のうち。のこりの三きれを、縫野氏の令息がたべ、一片を御主人が誕生日の祝ひにとたべ、又私宅ののこりの鶴の肉は、節分の夜八十一の老母と、主人と私と

が一片づ一、千年の壽にあやかるやうにと語りあひながら賞味したのであつた。

《引用終了》

底本では最終行下インデントで創作クレジット『（九年三月十七日記）』が入っている。

「ちさ女」は久女の俳句弟子土井ちさ女であろう（『九州の女流俳人を語る』（『女性風景』昭和一〇（一九三五）年五月号の記載）。また、「縫野さん」「いくよさん」「縫野御夫婦」というのも同じ評論で、久女の弟子として並ぶ中の『八幡製鐵所の夫人』『縫野いく代』（但し、この二つの文字列は底本では一緒に並んでいない）と出る人物かと思われる。

「鶴の庖丁」は「つるのはいちやう（つるのほうちよう）」と読み、江戸時代、正月十七日に將軍家から朝廷に献上した鶴を清涼殿で料理した儀式。舞御覧（正月十七日または十九日に宮廷舞樂を奏して天皇に献じた行事）の前儀として、行内膳司の庖丁人が衣冠を正し、故実に則って調理され、舞御覧の間に於いて御前に供された。ネットで検索しても、歳時記の項としてはあるものの、久女の言うように、例句が見当たらない。

「ふたもの」蓋物。通常は陶器のそれを挿すが、「根ごろ塗」（根来塗…日本の塗装技法の一種で、黒漆による下塗りに朱漆

塗りを施す漆器。呼称は和歌山県の根来寺に由来する。」「金箔
總まき繪」とあるから古雅な漆器の蓋の附いた椀である。

「櫃のみ」カシの実。ブナ目ブナ科 *Fagaceae* の実。どんぐり。

「瀧川さん」不詳。「令息の友人で大分容體のわるい瀧川さん」
「昨日から酸素吸入」とあるところを見ると彼らは結核患者かと推測される。

「長崎のあちやさん」お手上げかと思ったら、個人ブログ「まこっちゃん」の好奇心倶楽部【恋文】の『[基礎からわかる長崎弁講座（10）「阿蘭陀さん」、「阿茶さん」、「じげもん」](#)』にとれば、「阿茶さん」とは、中国人の親称で、「あちらさん」から来ている言葉だというとあり、長崎古賀人形の「阿茶さん」の写真が載る。これに間違いあるまい。」

落椿の葉くぐり落ちし日の斑かな

蒼海の波騒ぐ日や丘椿

梅苔む官舎もありて訪れぬ

花見にも行かずもの憂き結び髪

盛會を祈りて花にゆく遠く

花影あびて群衆遅々とうごくかな

花ふかき館に徑ある夜宴かな

花蒼む梢の煙雨ひもすがら

襟卷に花風寒き夕べかな

たもとほる櫻月夜や人おそき

神風にこぼれぬ花を見上げけり

故里の藁屋の花をたづねけり

「やぶちゃん注…久女は明治二三（一八九〇）年五月三十日に父赤堀廉蔵、母さよの三女として官吏であつた父の任地であつ

た鹿児島県鹿児島市平^{ひら}の馬場（現在の鹿児島市の中央部である
鹿児島県鹿児島市平野町）で生まれたが、その後父の転勤で久
女四歳の時に岐阜県大垣へ、翌年辺りには沖縄県那覇市へ、明
治三一（一八九七）年には台湾の台北へと移り住んでいる。こ
こにいう「故里」とはしかなかなかに難しいものがある。久
女にとってはこれら以外にも父の信州の実家もその中に含ま
れていたと思われるからであるが、ここでわざわざ「たづねけ
り」と詠じた辺りからは（再訪し得る圏内としても）鹿児島の
生家を指すもののように私は読む。」

せゝらぎに耳すませ居ぬ山櫻

花腐^{くだ}つ雨ひねもすよ侘びごもり

船長の案内くまなし大南風

翠巒を降り消す夕立襲ひ來し

早魃の舗道はふやけ靴のあと

夜毎たく山火もむなしひでり星

汲み濁る家主の井底水飢饉

水飢饉わが井は清く湧き澄めど

夏の海島かと現れて艦遠く

煙あげて鹽屋は低し鯉幟

大阪の薨いらかの海や鯉幟

目の下の煙都は冥し鯉幟

男の子うまぬわれなり粽結ふ

櫛卷の歌麿顔や裕人

ミシン踏む足のかろさよ衣更

蒼朮^{そうじゆつ}の煙賑はし梅雨の宿

焚きやめて蒼朮薫る家の中

「やぶちゃん注…「蒼朮」 中国華中東部に自生する多年生草本のキク目キク科オケラ属ホソバオケラ *Atractylodes lancea* の根茎を乾燥させた生薬。中枢抑制・胆汁分泌促進・抗消化性潰瘍作用などがある。参照したウィキの「ホソバオケラ」によれば、草体の『日本への伝来は江戸時代、享保の頃といわれ』、『特に佐渡ヶ島で多く栽培されており、サドオケラ（佐渡蒼朮）とも呼ばれる』とある。」

おくれゐし窓邊の田植今さかん

早苗水走り流るゝ籬に沿ひ

おくれゐし門邊の早苗植ゑすめり

一人寝の月さへさゝぬよき蚊帳に

踏みならず歸省の靴はハイヒール

寮の娘や歸省近づくペン便り

「やぶちゃん注」この句は角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」では昭和八（一九三三）年のパートに配されてある。一見、この年に東京の女子美術専門学校に進んだ次女光子のようにも見えるが、実は長女昌子がこの前年昭和七年八月に横浜税関長官房文書係雇として就職しており、角川版の前年パートに後に出る、

昌子よりしきりに手紙来る 三句

春愁の子の文長し憂へよむ

春愁癒えて子よすこやかによく眠れ

望郷の子のおきふしも花の雨

の三句が載ることから、私はこれらは「寮の娘」という措辞か

ら長女昌子を詠んだものと推定する。前の句はかく並べられると「ハイヒール」からやはり昌子のように見えるが、角川版では創作年代未詳の『昭和四年——昭和十年』パートに配されているので断定は出来ない。本底本句集は時期の異なる句が季題別に纏められているので、その点、一読連作とるのはこれ以降の「歸省子」の句群でもかなり危険であることを言い添えておく。」

歸省子の琴のしらべをきく夜かな

歸省子やわがぬぎ衣たゝみ居る

「やぶちゃん注…角川版では大正一四（一九二五）年のパートにある。この時、昌子十四歳、光子九歳であるから、この「歸省子」は（ご本人である長女石昌子さんの編になる底本年譜にはご本人と次女光子さんの事蹟記載が極めて少ないので特定は出来ない）感触としては長女昌子か。」

いとし子や歸省の肩に繪具函

「やぶちゃん注…この句に描かれたのは「繪具函」から次女光子と考えてよいであろう。」

歸省子と歩むも久し夜の町

遊園の暗き灯かげに涼みけり

起し繪の御殿葺けたる筧かな

「やぶちゃん注…この句、今一つ、句意が取れない。「起し繪」は組立灯籠とか立版古とも言い、しばしば子供の絵本に見られる建物・樹木・人物などを切り抜いて枠の中に立て、風景・舞台などが立体的に再現されるようになっていく絵をいう。辞書には茶室の絵図面などにも用いられたとある。「葺けたる」の「葺く」は力行四段活用であるから、これは已然形か命令形となるが、すると以下の「たる」が分からない。起し繪の御殿が遠近感に齟齬が生じて庭の筧が屋根を葺いているように見えるという意であるなら、連用形接続の完了の助動詞「たり」で「御殿葺きたる」として——御殿葺きとなってしまうた（しまっている）筧よ——とするか、若しくは体言接続の断定の助動

詞「たり」で「御殿葺きたる」として——御殿の葺きとなつて
いる筈よ——でなくてはおかしいと思う。識者の御教授を俟つ
ものである。」

大樹下の夜店明るや地藏盆

「やぶちゃん注…「地藏盆」は八月二十三日～二十四日（古く
は陰暦七月二十四日）に行われる行事で石地藏にお飾りをして
祀り、様々な余興を行う。地藏祭り。地藏会。」

涼み舟門司の灯ゆるくあとしざり

羅に衣通る月の肌かな

遠泳の子らにつきそひ救助船

潮あびの戻りて夕餉賑かに

潮あびの子ら危険なし旗たてゝ

上つ瀬の歌劇明りや河鹿きく

「やぶちゃん注…角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」では昭和八（一九三三）年のパートに配されている。を流れる川に佇み蛙の音が響き、その上流直近に歌劇場があるのであろうか？ ロケ地が私には分からない。識者の御教授を乞うものである。」

水疾し岩にはりつき啼く河鹿

河鹿きく我衣手の露しめり

河鹿なく大堰の水も暮れにけり

「やぶちゃん注…「大堰」は「おほい」で大堰川のことか。京都府北桑田郡南部から船井郡園部町・八木町と亀岡市を経、保津峡（この部分は保津川とも呼ばれる）に入るまでの河川で、保津峡の出口嵐山から下流は桂川と名を変えて淀川に合流する（以上は平凡社「世界大百科事典」に拠る）。」

病快し河鹿の水をかふるなど

忘れゐし河鹿の蜘蛛を捜さばや

「やぶちゃん注…ちよつとした発見！
久女は蛙が好きで飼つ
ていた！」

蛙きく人顔くらく佇めり

轟涼し長官邸は木がくれに

ひきのこる岩間の潮に海ほうずき

薔薇むしる垣外の子らをとがめまじ

藁づとをほどいて活けし牡丹かな

牡丹を活けておくれし夕餉かな

牡丹やひらきかゝりて花の隈

牡丹や揮毫の書箋そのまゝに

牡丹にあたりのはこべ延ぶがまゝ

牡丹にあたりのはこべ抜きすてし

端居して月の牡丹に風ほのか

隔たれば葉蔭に白し夕牡丹

紅苺垣根してより摘む子來ず

牡丹芥子あせ落つ瓣は地に敷けり

凌霄花の朱に散り浮く草むらに

「やぶちゃん注…「凌霄花」シソ目ノウゼンカズラ科タチノウゼン連ノウゼンカズラ *Campsis grandiflora*。参照したウイ

キの「ノウゼンカズラ」によれば、「凌霄花」のほか、「紫葳」

とも書く。『夏から秋にかけ橙色あるいは赤色の大きな美しい花をつける、つる性の落葉樹。気根を出して樹木や壁などの他物に付着してつるを延ばす。花冠は漏斗状。結実はまれである。中国原産で、平安時代に渡来したといわれる』。『ノウゼンというのは凌霄の字音によるといわれる。古くはノウセウカズラと読まれ、これがなまってノウゼンカズラとなった。霄は「空」「雲」の意味があり、空に向かって高く咲く花の姿を表している。夏の暑い時期は花木が少なく、枝を延ばした樹木全体に、ハツとするような鮮やかな色の花を付け、日に日に咲き変わるの
で、よく目立つ。花の形がラッパに似ていることから英語では』
「Chinese trumpet vine」『トランペット・フラワー』、「トランペット・ヴァイン」あるいは「トランペット・クリーパー」と呼ばれる』とある（「vine」と「creeper」は孰れも蔓・蔓性植物の意）。グーグル画像検索「ノウゼンカズラ」は[こちら](#)。」

流れ去る雲のゆくえや青芭蕉

晴天に廣葉をあほつ芭蕉かな

夕顔や遂に無月の雨の音

かへり見ぬ葡萄の蔓も花芽ぐむ

霖雨や泰山木の花墮ちず

「やぶちゃん注…「霖雨」は音は「りんう」であるが、ここは訓じて何日も降りつづく「ながあめ」である。」

活け終へて百合影すめる襖かな

上げ潮にまぶしき芥花棟あふち

「やぶちゃん注…「棟」ムクロジ目センダン科センダン *Melia azedarach* の別名。五、六月の初夏、若枝の葉腋に淡紫色の五弁の小花を多数、円錐状に咲かせる（ここから別名で「花おうち」とも呼ぶ）。因みに、「梅檀は双葉より芳し」の「梅檀」はこれではなく全く無縁の異なる種である白檀の中国名（ビヤクダン目ビヤクダン科ビヤクダン属ビヤクダン *Santalum album*）なので注意（しかもビヤクダン *Santalum album* は植物体本体からは芳香を発散しないからこの諺自体は頗る正

しくない。なお、切り出された心材の芳香は精油成分に基づく。これはビャクダン *Santalum album* の原産国インドでの呼称「チャンダナ」が中国音で「チャンタン」となり、それに「梅檀」の字が与えられたものを、当植物名が本邦に伝えられた際、本邦の棟の別名である現和名「センダン」と当該文字列の音がたまたま一致し、そのまま誤って棟の別名として慣用化されてしまったものである。本邦のセンダン *Melia azedarach* の現代の中国語表記は正しく「棟樹」である。」

籐椅子に看とり疲れや濃紫陽花

窓明けて見渡す山もむら若葉

歸り來て天地明るし四方若葉

新樹濃し日は午に迫る鐘の聲

欄涼し鎔炉明りのかの樹立

「やぶちゃん注…「鎔炉」の「炉」は迷ったが底本の用字を用

いた。電子化している私が「鎔爐」では熔鋳炉を想起出来ないからである。」

葉櫻や流れ釣なる瀬戸の舟

降り歇まぬ雨雲低し枇杷熟れる

わがもいで愛づる初枇杷葉敷けり

わがもいで贈る初枇杷葉敷けり

手折らんとすれば萱吊ぬけて來し

稻妻に水田はひろく湛えたる

書肆の灯にそゞろ讀む書も秋めけり

語りゆく雨月の雨の親子かな

ジム紅茶すゝり冷えたる夜長かな

「やぶちゃん注…「ジム紅茶」タイ・シルクのブランドで知られるジム・トンプソンの紅茶のことか。」

領布^ひ振れば隔たる船や秋曇

「やぶちゃん注…「領布」上代や中古、主に女性が首に掛けて両肩から垂らした細長い白い布。羅（薄絹）や紗^{しや}などで作られ、本来は呪具^{まじな}として呪い・神事・護身のために用いられたが、後には装飾品ともなった。領巾・肩巾・比礼とも書く。」

掘りかけし土に秋雨降りにけり

ヨットの帆しづかに動く秋の湖

「やぶちゃん注…「ヨット」の拗音表記はママ。」

走馬燈灯して賣れりわれも買ふ

燈を入れて今宵もたのし走馬燈

走馬燈いつか消えゐて軒ふけし

ころぶして語るも久し走馬燈

「やぶちゃん注…「ころぶして」の「ころぶす」とはサ行四段活用の動詞「自伏^{ころぶ}す」で、「ころ」は自分独りの意。自分独りは横になって、の意。相手は娘たちであろう。」

一人居の岐阜提灯も灯さざり

星の竹北斗へなびきかはりけり

うち曇る空のいつこに星の戀

板の如き帯にさゝれぬ秋扇

わが描きし秋の扇に句をしるす

蟲をきく月の衣手ほのしめり

籠の蟲夜半の豪雨に鳴きすめり

蟲籠をしめし歩みぬ萩の露

放されて高音の蟲や園の闇

草むらに放ちし蟲の高音かな

鳴き出でてくつわは忙し籬かげ

椅子涼し衣そ通る月に身じろがず

月涼しいそしみ綴る蜘蛛の糸

流れ越す水田の月に涼みゐし

大波のうねりも去りぬいさな鯨釣る

「やぶちゃん注」：「鯨いさな」はスズキ目ハゼ亜目 Gobioidei に属す

る広汎なハゼ類（[ウィキの「ハゼ」](#)によれば現在発見されているものだけで二一〇〇種類を超えるとある）を指す「ハゼ」の別名である。因みに釣師の間ではハゼ亜目ハゼ科ゴビオネルス亜科マハゼ *Acanthogobius flavimanus* のうち、特に二年越しの大型の個体を指しているらしい。」

鯊釣る和布刈の礁へ下りたてり

「やぶちゃん注…「和布刈」は現在の福岡県北九州市門司区門司にある和布刈神社のこと。[ウィキの「和布刈神社」](#)に、『神社名となっている「和布刈」とは「ワカメを刈る」の意であり、毎年旧暦元旦の未明に三人の神職がそれぞれ松明、手桶、鎌を持って神社の前の関門海峡に入り、海岸でワカメを刈り採って、神前に供える「和布刈神事」（めかりしんじ）が行われる』。和銅三（七一〇）年には『神事で供えられたワカメが朝廷に献上されているとの記述が残って』おり、現在、この神事は『福岡県の無形文化財に指定されている』とある。因みにこの神事、私には中学生の頃に食べるように読んだ松本清張の一作、「時間の習俗」以来、耳馴染みの神事である。「磴」は同神社の階きざはしの謂い。私は実は行ったことがないのだが、壇ノ浦に面した海岸

に鳥居が建っており、そこから石段が社殿に向かって延びているのがネット上の写真で確認出来る。

「礁」は水面下に隠れる暗礁を指し、「かくれいわ」「いくり」などと訓ずるが、ここは音数律から見ると音の「セウ(シヨウ)」の方がしっくりくるように私には思われる。」

野菊むらかぐめば風の強からず

八十の母手まめさよ萩束ね

「やぶちゃん注…年譜上の久女の母のさよの久女出生時の年齢（三十六歳）及び後掲される類型句「八十の母手まめさよ雛つくり」が角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」配されているパートから昭和一〇（一九三五）年の句であることが分かる。」

山萩にふれつゝ來れば座禪石

塀外へあふれ咲く枝や萩の宿

門とぎしてあさる佛書や萩の雨

唐もろこしの實の入る頃の秋涼し

唐黍を焼く子の喧嘩きくもいや

不知火の見えぬ芒にうづくまり

戻り來て植ゑし萱草未だ咲かず

佇ちつくすみ幸のあとは草紅葉

「やぶちゃん注…昭和九（一九三四）年の秋、『大伴旅人、山上憶良、観音寺別当の沙弥満誓』（生没年不詳。万葉歌人。俗名を笠朝臣麻呂^{かさのまろ}。和銅年間に美濃守として優れた国司振りを見せ、また木曾道を開いたりし、尾張守を兼ね、養老年間には尾張・三河・信濃の三国の按察使^{あさち}も兼務、右大弁として中央政界に復帰するが、元明上皇病臥に際して自ら申し出て出家、養老七（七二三）年には造筑紫観世音寺別当として西下して大宰帥大伴旅人らと交わった。人間味豊かな短歌七首を「万葉集」に所

収する。ここは主に平凡社「世界大百科事典」に拠る）『などが集った筑紫万葉歌壇の舞台、大宰府、都府楼趾を訪れた』折りの句である（引用部は坂本宮尾「杉田久女」より）。「み幸」とは行幸伝承のある天智天皇のことを指すか。」

大なつめ落す竿なく見上げゐし

人やがて木に登りもぐ棗かな

なつめ盛る古き藍繪のよき小鉢

「やぶちゃん注…「藍繪」は「あるゑ（あいえ）」と読み、陶磁器の呉須（磁器の染め付けに用いる藍色の顔料。主成分は酸化コバルトで他に鉄・マンガンなどを含む。天然には青緑色を帯びた黒色の粘土（呉須土）として産出する）の染め付け模様のこと。」

銀杏の熟れ落つひゞき嵐くるらし

銀杏をひろひ集めぬ黄葉をふみて

旅たのし葉つき橘籠にみてり

蜜柑もぐ心動きて下りたちぬ

掃きよりて木の實拾ひや尉と姥

わけ入りて孤りがたのし椎拾ふ

邸内に祀る祖先や棕拾ふ

「やぶちゃん注…やぶちゃん注…「棕」マンサク亜綱イラクサ目ニレ科エノキ亜科ムクノキ *Aphananthe aspera*。春に開花した後に直径七く十二ミリメートルの緑色球状の果実（核果）をつけ、十月頃になると黒紫色に熟し、果肉は甘く食べられる。干し柿に似た味がするとされる。」

門弟をつれて 二句

邸内の木の實の宮に歩みつれ

木の實際降るほとりの宮に君とあり

「やぶちゃん注」本句は角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」では『（昭和四年——昭和十年）（創作年月未詳）』のパートにあり、同定のヒントもないが、わざわざ「邸内」と言い、その屋敷内に個人的な「宮」（祠）が存在するということになる、私はあの広大な櫓山荘を直ちに想起してしまう。当時の櫓山荘にそうしたお社が存在したかどうかは分からないが、現在の櫓山荘跡の写真を見る限り、「木の實」降るような鬱蒼とした木々の叢の中の社があっても何らおかしくない印象を受ける（寧ろ、幕藩時代の堺鼻、小倉藩の見張番所跡という地形から見ても、海神などを祀るに相応しい所であるように私には思われる）。但し、「門弟をつれて」と前書きしてその門弟の「邸内」というのはやや奇異な印象を受けるものではある。私の誤釈かも知れない。なお、なお、少なくとも二句目の「木の實」は底本の索引から「このみ」ではなく「きのみ」と読んでいることが分かる。」

菊花摘む新種の名づけたのまれて

菊摘むや廣壽の月といふ新種

「やぶちゃん注…「廣壽の月」というもしかすると久女が名づけたかも知れない菊の品種、御存じの方がいたら、是非、お教え下さい。」

菊摘むや群れ伏す花をもたげつゝ

摘み移る日かげあまねし菊畠

添竹をはづし歩むや菊も末

菊干すや東籬の菊も摘みそへて

菊干すや日和つゞきの菊ヶ丘

菊干すや何時まで褪せぬ花の色

日當りてうす紫の菊筵

今日はまた白菊ばかり干しひろげ

隣の日のふたたび嬉し菊日和

朝な朝な掃き出す塵も菊の屑

大輪のかわきおそさよ菊筵

今年ゐて菊咲く頃の我家かな

門邊より咲き伏す菊の小家かな

ひろげ干す菊かんばしく南隣

愛藏す東籬の詩あり菊枕

ちなみぬふ陶淵明の菊枕

白妙の菊の枕をぬひ上げし

ぬひあげて菊の枕のかほるなり

「やぶちゃん注…私の電子テキスト杉田久女の随筆「菊枕」も参照されたい。」

萬葉企救きくの高濱根上り松次第に煤煙すすに枯るゝ 一句

冬濱のすゝ枯れ松を惜みけり

「やぶちゃん注…「企救の高濱」は「万葉集」に「企救の濱」「企救の長濱」「企救の高濱」などと詠まれた歌枕で、現在の北九州市小倉北区赤坂附近から戸畑区の洞海湾湾口までの、響灘に面した国道一九九号線沿いの海浜を指す。現在は大方が臨海埋立造成によって全く消失しているが、往古は白砂と美しい根上り松（根の部分が地表から浮き上がっている松をいう）が群生し、太宰府へ行き交う旅人や大里宿へ通じる街道筋の美観として多くの人々の心を慰めたという。小倉の高浜町や長浜町はその地名の名残とされる。以下に「万葉集」の当地の詠歌を総て示す。

豊國の企救の濱^{はま}辺の眞^ま砂^{なご}地^{つち}眞^ま直^{なほ}にしあらば何か嘆かむ
(巻七・一三九三)

あなたの私への思いがあゝの真砂のようにまっさらな清いみ心
であたなら、どうしてかくも歎くことがありましようという女
の詠歌。

豊國の企救の濱松ねもころに何しか妹^{いも}に相言ひそめけむ
(巻十二・三二三〇)

「松根」の「ね」に「めもころ」（懇ろ）を掛けた。どうして
妻にお前にかくも恋を囁くようになってしまったのだろう、と
いう男の側の恋の苦悶を詠む。『柿本人麻呂歌集に出づ』と後
書する。

豊國の企救の長濱行き暮らし日の暮れゆけば妹をしぞ思ふ
(巻十二・三二一九)

豊國の企救の高濱^{たか}高^{だか}に君待つ夜らはさ夜更けにけり

(卷十二・三二二〇)

「高高に」は心の高揚感を掛ける。先に続く恋情に燃える同じ男の詠歌。

豊前國とよのみのくの白水郎あまの歌一首

豊國の企救の池なる菱の末うれを摘むとや妹がみ袖濡れけむ
(卷十六・三八七六)

菱の実の先を摘もうとしてあなたの恩袖は濡れ遊ばされたらうか、この恋情の相手は上流階級の女性か、と中西進氏（講談社文庫「万葉集」注）は注する。

坂本宮尾氏の「杉田久女」によれば、久女の草稿には、既に出た、

くぐり見る松が根高し春の雪

の句とこの句の間に、

この萬葉の根上り松は次第に煤煙と漁夫ら

のあらすところにあり。今上陛下のよき御

細國の小倉赤坂の名所萬葉にうたはれし企

救の高濱も次第に枯れ今數本あるのみ。お

しむべし

との詞書があるとある（底本引用を恣意的に正字化した。「おしむべし」は底本にママ注記がある）。

冬風げる瀬戸の比賣宮ふしをがみ

「やぶちゃん注…「瀬戸の比賣宮」 福岡県宗像市田島にある

全国の弁天の総本宮ともされ、裏伊勢とも称される宗像三女神を祀る宗像大社。^{むな}「瀬戸」は現在の福岡県宗像市の古称。「比賣宮」は「ひめみや」と読み、比売は宗像三女神を指す。」

初風げる和布刈の磴に下りたてり

「やぶちゃん注…「初風げる和布刈の磴に下りたてり」は「はつなげるめかりのとうにおりたてり」と読む。「和布刈」は再注すると、福岡県北九州市門司区門司にある和布刈神社のこと。

[ウィキの「和布刈神社」](#)に、『神社名となっている「和布刈」

とは「ワカメを刈る」の意であり、毎年旧暦元旦の未明に三人の神職がそれぞれ松明、手桶、鎌を持って神社の前の関門海峡に入り、海岸でワカメを刈り採って、神前に供える「和布刈神事」（めかりしんじ）が行われる』。和銅三（七一〇）年には『神事で供えられたワカメが朝廷に献上されているとの記述が残って』おり、現在、この神事は『福岡県の無形文化財に指定されている』とある。因みにこの神事、私には中学生の頃に食るように読んだ松本清張の一作「時間の習俗」以来、耳馴染みの神事である。「磴」は同神社の階きざしの謂い。私は実は行ったことがないのだが、壇ノ浦に面した海岸に鳥居が建っており、そこから石段が社殿に向かって延びているのがネット上の写真で確認出来る。」

嚴寒や夜の間に萎えし卓の花

如月の雲嚴めしくラヂオ塔

ほのゆるゝ閨のとばりは隙間風

眉引も四十路となりし初鏡

たらちねに送る頭巾を縫ひにけり

遊學の旅にゆく娘の布團とぢ

かざす手の珠美しくしや塗火鉢

筆とればわれも王なり塗火鉢

ひとり居も淋しからざる火鉢かな

銀細のタベ明りにひそと居し

色褪せしコートなれども好み着る

句會にも着つゝなれにし古コート

アイロンをあてゝ着なせり古コート

身にまとふ黒きシヨールも古りにけり

鵲鴒に障子洗ひのなほ去らず

かき馴らす鹽田ひろし夕千鳥

首に捲く銀狐は愛し手を垂るゝ

牡蠣舟や障子のひまの雨の橋

君來るや草家の石蓐も咲き初めて

そののちの旅便りよし石蓐日和

「やぶちゃん注…「石蓐日和」は「つはびより」で石蓐つわぶき（キク
亜綱キク目キク科キク亜科ツワブキ *Farfugium japonicum*）
の花の映える好天をいう。ツワブキは晩秋から初冬にかけて咲
くから、小春日和と同義で冬の季語である。」

冬ごもる簷端を雨にとはれけり

悼柳琴 一句

莖高くほうけし石路にたもとほり

「やぶちゃん注」：「柳琴」太田柳琴。坂本宮尾氏の「杉田久女」によれば、久女の子らの主治医であつた小児科医でクリスチャン、俳句もたしなんだ人物で、夫宇内との不仲に悩んだ久女のメソジスト教会への入信を勧めた一人である。『俳句をたしなみ、小倉の俳句会』『二八会』の創設者のひとりで、久女によれば、「物質万能のK市には珍しい様な高い人格者だつた」（小説「河畔に棲みて」からの引用）とある。彼の没年は調べ得なかったが、角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」では昭和六（一九三一）年のパートにある。久女大正一〇（一九二一）年より教会に通い出し、翌大正一一年八月に受洗した。因みに夫も同年十二月に受洗しているが、久女は四年後の大正十五年十一月頃には教会から距離をおき、同時に俳句に専心する決意を固めている。因みに昭和二一（一九四六）年一月二十一日に大宰府県立筑紫保養院にて腎臓病のために亡くなった久女の遺骨は夫宇内の実家の裏山の墓地に葬られている。戒名

は無憂院釋久欣妙恆大師である。教会を離れてから五年後であるが、同人に対する敬愛の念は続いていたことが分かる。久女伝説の一つにはこの大田柳琴との醜聞があるが、私は全く採らない、というか、彼女の不倫スキャンダル自体が孰れも怪しいものばかりで私には関心がないのであると述べおくこととする。」

越ヶ谷附近御獵地 一句

耕人に雁歩むなり禁獵地

「やぶちゃん注…「越ヶ谷附近御獵地」現在の埼玉県越谷市の地に慶長九（一六〇四）年に徳川家康によって建てられた越ヶ谷御殿の傍の鷹狩のための御獵地のことと思われる。因みにこの越ヶ谷御殿は、江戸の大火で失われた江戸城の建物の代替として明暦三（一六五七）年になって江戸城二の丸に移されるまでの五十三年間、家康・秀忠・家光などが鷹狩で訪れた御殿の跡として現在に知られる（ここは個人サイト「しらこばとNETWORK」の「[越ヶ谷御殿跡](#)」を参照した）。」

英彦山 えひこ 六句

訝して山ほととぎすほしいまゝ

「やぶちゃん注」大阪毎日新聞社及び東京日日新聞社共主催になる「日本新名勝俳句」の「山岳の部英彦山」で帝国風景院賞（金賞）に選ばれた久女の代表作とされる名吟である（同受賞作は全二十句）。久女三十歳。

「英彦山」は通常「ひこさん」と読み、福岡県田川郡添田町と大分県中津市山国町に跨る山で標高は一一九九メートル。耶馬日田英彦山国定公園の一部を成す。[ウィキの「英彦山」](#)によれば、『日本百景・日本二百名山の一つ。また、弥彦山（新潟県）・雪彦山（兵庫県）とともに日本三彦山に数えられる』。古くは「彦山」という表記であったが、享保一四（一七二九）年、霊元法皇の院宣により「英」の字をつけたという。『英彦山は羽黒山（山形県）・熊野大峰山（奈良県）とともに「日本三大修験山」に数えられ、山伏の坊舎跡など往時をしのぶ史跡が残る。山伏の修験道場として古くから武芸の鍛錬に力を入れ、最盛期には数千名の僧兵を擁し、大名に匹敵する兵力を保持していたという』とある。坂本宮尾氏の「杉田久女」には、『江戸時代

には英彦山参りの講が組織されて多くの参拝者があつたが、明治維新の神仏分離令や修験道廃止令で霊山の参拝は衰退し、山伏の多くは還俗した。最盛期には三千八百あつた宿坊も百ほどになっていた、と久女の日記にある』とある。山の中腹五百メートルほどの位置に英彦山神宮（通称、彦山権現。現在の福岡県田川郡添田町内）があり、[ウィキの「英彦山神宮」](#)によれば、天忍穂耳尊（高天原でのアマテラスとスサノオとの神生み比べの誓約の際にスサノオがアマテラスの勾玉を譲り受けて生まれた五皇子の一柱。葦原中国平定の折りには天降って中つ国を治めるようアマテラスから命令されるも、下界は物騒だとして途中で引き返してしまふ。後、タケミカヅチらによつて大国主から国譲りがなされ、再びオシホミミに降臨の命が下つたが、オシホミミは息子のニニギに行かせるように進言し、ニニギが天下ることとなるという、天孫降臨でも重要な役柄を担っている。オシホミミは「忍穂耳」で生命力に満ちた稲穂の神の意で、後、稲穂の神、農業神として信仰されるようになる。ここは[ウィキの「オシホミミ」](#)に拠つた）を主祭神とし、伊佐奈伎尊・伊佐奈美尊を配祀する。『英彦山は、北岳・中岳・南岳の三峰からなり、中央にある中岳の山頂に当社の本社である「上宮」があり、英彦山全域に摂末社が点在する』とある。



本句を総て現代仮名遣いでローマ字化してみる。

Kodama site yanahototogisu hosimama

十七音中、「a」音が六音（その内、子音の“ma”音が三音を占める）、「o」音が五音（その内、子音の「ho」音が二音、「to」音が二音を占める）で、この優勢音がまさに不如帰の音ねの木霊となつて靈性に満ちた幽邃な英彦山全山を領しつつ、その絶対の静謐と広角景觀を余すところなく響かせ、映し出している。句柄は豪放にして磊落にして自然の持つ神秘の力を伝える男性的な靈力を孕むものの、以上の音律の与えるものは極めて女性的で限りなく優しい。寧ろそれは私には老子の称した玄牝グレート・マザーやユングの言う原母に通じるもののさえ感じられ、それがまた、久女という熱情の詩人に相応しいとも感ずるのである。」

橡とちの實のつぶて風や豊前坊

「やぶちゃん注…同じく「日本新名勝俳句」で帝国風景院銀賞に選ばれた句。

「豊前坊」はこの時は既に前注に示した明治の廃仏毀釈によつ

て英彦山神宮摂社高住神社たかすみとなっていた。英彦山神宮銅の鳥居から更に約五キロメートル東へ入った英彦山北東中腹に鎮座する（前句の注も参照されたい）。ウィキの「英彦山」によれば、『彦山豊前坊という天狗が住むという伝承がある。豊前坊大天狗は九州の天狗の頭領であり、信仰心篤い者を助け、不心得者には罰を下すと言われている。英彦山北東に建てられている高住神社には御神木・天狗杉が祀られている。また古くからの修験道の霊地で、全盛期には多くの山伏が修行に明け暮れた』とあり、まさにこの「橡の實のつぶて風」はそうした天狗の石礫いしつがて（主に江戸時代以降、明治期まで記録されている怪異の一つ。凡そ自然現象や人為とは思われない、石や当該物質などが存在しない場所（屋内を含む）に、どこから飛んで来たのか分からない物が投げ込まれる（若しくは投げつける・投げ落とす音のみがして投げた対象物体が存在しない）怪奇現象を言う。ウィキの「天狗礫」によれば、『天狗が投げた石つぶてではないかなどと言われる。天狗が人々に素行の悪さを悔い改めさせようとしているともいい、狐狸の仕業ともいわれる』とある。）を直ちに想起させる久女としてはちよつと珍しい、おかしみの諧謔をも含ませた益荒男振りの句である。」

六助のさび鐵砲や秋の宮



「やぶちゃん注…「六助のさび鐵砲」戦国期の毛野村出身の毛野村六助（木田孫兵衛）に纏わる。福岡県添田町公式サイト内の「[毛野村六助伝説](#)」から引用させて戴く。

《引用開始》

英彦山高住神社から東へ行き、野峠から大分県側に四キロほど下った東側山中に槻の木の人家があり、その中に「木田孫兵衛墓」と彫った石塔があつて、毛谷村六助の墓だといわれる。六助の父は広島の人で佐竹勘兵衛といい、九州の緒方氏を討つために京都郡今井にやって来て、そこで知り合つた園部与兵衛の娘との間に生まれたのが六助だという。当時浪人は人家には住めなかつたので、犬ヶ岳に登りケヤキのほら穴で夜を明かし、それから六四町下つた現在地に村を開いた。毛谷村の名はケヤキからついたといわれる。

六助は正直で親孝行な男で、きこりをし薪を背負つて小倉の町（彦山の町だともいう。）に売りに行つた。大変な力持ちで馬の四本足を両手で持つて差しあげたという。その力は彦山権現に祈願してさずかり、彦山豊前坊の窟で天狗から剣術を授けられたといわれる。

そのころ、広島藩の剣術師範に微塵流の京極内匠という者がいて、同じ藩の師範八重垣流の達人吉岡一味斎の娘お園に思いを寄せていた。ところが、お園も一味斎も受けつけないので、内匠は一味斎をやみ討ちして豊前へ逃げた。

内匠は小倉藩に仕官するために、藩主の前で試合をすることになるが、その前に相手である六助をたずね「老いた母への孝養のために勝たせてもらえまいか」と頼んだ。六助は、その親を思う気持ちに感激して内匠に勝をゆずった。後になって六助はそれがまったくの偽りであると知り、烈火のごとく怒った。

ちょうどそのとき、お園は母親と彦山に参詣に来て、六助の家に立ち寄り、あだ討ちの助太刀を頼むので、六助は承諾した。その後、小倉城下でめざす相手の内匠を見つけ、首尾よくかたき討ちを果たせることができた。これが縁で六助はお園と結婚した。

上津野の高木神社より今川のずっと上流にお園の妹お菊の墓というのがある。父のあだを討つために六助を頼って毛谷村に行く途中、かたきによって殺された。むら人はその悲運をあれみ、墓石をたてて供養したといわれる。側に大きな松があって、この松に提灯をかけて姉のお園を待ったというので提灯掛の松といわれたが、残念なことに今は枯れてないし、その跡

もわからなくなっている。

六助は後に、豊臣秀吉の前で相撲をとり、三五人に勝ったが、三六人目の木村又蔵に負けたので（三六人抜きしたという話もある。）加藤清正の家臣になり、木田孫兵衛と名乗り、秀吉の朝鮮出兵に従軍して戦死したといわれる。また無事帰国して六二歳で没したという話もある。

《引用終了》

以下を示すと引用許容を越えるので、要約させて戴くと、この六助の仇討ちは江戸時代の軍記物「豊臣鎮西軍記」（成立年代未詳・作者未詳）に天正十四（一五八六）年の事実と記されているが、天明六（一七八六）年に大阪道頓堀で人形浄瑠璃として上演された「彦山権現誓助劔」^{ひしやんごんげんのかいすけだち}（梅野下風・近松保蔵作）が大当たりとなったのが巷間流布の元とされる（但し、浄瑠璃の特性で原話からの有意な改変が行われてある）。その後、寛政二（一七九〇）年には大坂で歌舞伎化され、人形浄瑠璃とともに人気狂言として上演されることで、六助伝承は大いに広まることとなったとある。二〇一一年の大阪松竹座公演「通し狂言彦山権現誓助劔」のパンフレットによれば『六助は、英彦山麓の毛谷村、いまの大分県中津市の山中に住んでいたが、六助の墓が土地に伝わり、福岡県側の英彦山神社には六助が使ったと

いう刀、鉄砲が残っている。郷土の英雄ということだ』とある
(やま爺氏の「お気楽庵」の「[二月大歌舞伎 松竹座 行ってきました。](#)」から孫引きさせて戴いた)。また、毛谷村六助と同一人物として載せる[ウィキの「貴田孫兵衛」](#)には(アラビア数字を漢数字に代えた)、『貴田 孫兵衛(きだ まごべえ、生没年不詳)は、戦国時代の武将で、加藤清正の家臣。実名は「統治」ともされるが不詳』。『俗に「加藤十六将」の一人とされる。九百余石を知行していたといい、文禄・慶長の役には鉄砲衆四十名を率いて従軍した。『清正記』は加藤軍のオランカイ(満州)攻めの際に討死したとしているが、その後も清正の書状に貴田孫兵衛の名があるためこれは誤伝らしい。その最期は不明であるが、孫兵衛の一族は、加藤家改易後細川藩士となっている。後述するように、孫兵衛は毛谷村六助の名で有名であるが、史実と伝説との区別が必要である』とし、『江戸時代の軍記本『豊臣鎮西軍記』に、貴田孫兵衛は前名を毛谷村六助といい、女の仇討ちを助太刀したという物語が載せられ、これが天明年間に人形浄瑠璃『彦山権現誓助剣』として上演されて人気を博し、後には歌舞伎の演目にもなり、大正時代には映画化もされている。更に一九六〇年代に韓国の民間伝承論介伝説と結び付けられ、晋州城で殺されたことにされたが、もちろん史実では

ない。大分県中津市には木田孫兵衛（毛谷村六助）の墓なるものがあり地元ではこの地で六十二歳で亡くなったと伝えているが、歌舞伎等で有名になった後に作られたものである可能性もある』とある。因みに、この「論介」（？～一五九三年）とは朝鮮李朝時代の妓生^{キセン}で、壬辰・丁酉倭乱（文禄・慶長の役）の義妓として知られる人物。全羅道長水生まれ。一五九三年六月に慶尚道の晋州城を占領した日本軍が城の南側を流れる南江の畔りの矗石楼^{ちくせき}で酒宴を開いたが、その席に侍らせられた論介は日本の一武将（朝鮮では毛谷村六助とされる）を岩の上に誘い出して抱き抱えたままともに南江に身を投じたという。以来、この岩を義岩として矗石楼の奥に論介祠堂を建て、毎年六月に祭事が行われる、朝鮮では知らぬ人のいない義女である（以上の論介の事蹟は平凡社「世界大百科事典」に拠った。）」

秋晴や由布にゐ向ふ高嶺茶屋

坊毎に春水はしる寛かな

「やぶちゃん注…現在の英彦山詣でをされた坂本宮尾氏（「杉田久女」）によれば、『鳥居から奉幣殿まで一キロにおよぶ長い

長い石畳の参道』『の両側に宿坊跡と記した立て札が並び、人が住んでいる宿坊がいくつか残っているばかりである。久女がへ坊毎に春水はしる筈かなと詠んだ、坊から坊へ竹の樋を渡した光景も見られない』と記しておられる。」

三山の高嶺づたひや紅葉狩

「やぶちゃん注…「三山」英彦山は北岳・中岳・南岳の三峰から成り、中央にある中岳山頂に英彦山神宮本社である上宮がある（[ウィキの「英彦山」](#)に拠る）。」

廣壽山の老僧林隆照氏遷化 四句

木の實降る石に座れば雲去來

露味噌や代替りなる寺の厨

櫻咲く廣壽の僧も住み替り

お茶古びし花見の隣も代替り

「やぶちゃん注…「廣壽山の老僧林隆照氏」小倉北区寿山町にある黄檗宗の名刹こうじゆざんふくじゆじ山福聚寺の住持で、坂本宮尾氏の「杉田久女」によれば、林隆照『禅師は漢詩に造詣が深く、久女のよき理解者であり親交が深かった』とある。」

馬關春帆樓 三句

薰風や釣舟絶えず並びかへ

釣舟の並びかはりし籐椅子かな

晩涼や釣舟並ぶ樓の前

「やぶちゃん注…「馬關春帆樓」赤間神宮・安德天皇御陵に隣接する関門海峡を望む高台（現在は山口県下関市阿弥陀寺町）に現在もある割烹旅館春帆樓しゅんぱんろう。明治二八（一八九五）年四月十七日に日清戦争後の日清講和条約（下関条約・馬関条約）が締結された場所として知られる。[ウイキの「春帆楼」](#)によれば、

『敷地内に日清講和記念館（登録有形文化財）、伊藤博文・陸

奥宗光の胸像、講和条約時、李鴻章が宿泊した引接寺へは、敷地内より李鴻章道が続く』とある。」

和布刈の鼻枕潮閣にて 二句

新船卸す瀬戸の春潮とこしなへ

新艘おろす東風の彩旗へんぽんと

「やぶちゃん注…「和布刈の鼻枕潮閣」枕潮閣は現在の福岡県北九州市門司区門司にある百年以上の歴史を持つ河豚料理専門の料亭。先に注した和布刈神社（「初風げる和布刈の磴に下りたてり」などの注を参照）の境内から関門海峡に突き出した形で社務所の前に建つ。参照したMAC&JOY氏の「九州旅俱樂部」の「[枕潮閣と源平小菊](#)」で現在の画像が見られる。

「新船」「新艘」は恐らく「しんぞ」と読んでいると思われる。「新造下ろし」「新艘下ろし」は「しんざう（しんぞうおろし）」で新造の船を初めて水上に浮かべること、ふなおろしのことを言うが、これには別に他人の妻の敬称として「御新造」（古く

は武家の妻、後に富裕な町家の妻の敬称。特に新妻や若女房に用いた）があり、さらに音変化した「ごしんぞ」（これはさらに近世遊郭用語として、遊里で姉女郎の後見つきで客をとり始めた若い遊女の呼称ともなった。語源は遊女を舟に見立てたものともいうが不詳）がある。音数からも、この「しんぞ」の方が（それでも字余りではあるが）しっくりくるように思われる。」

タラバ蟹を貰ふ 二句

大釜の湯鳴りたのしみ蟹うでん

大鍋をはみ出す脚よ蟹うでる

或家の初盆に 四句

うつしゑの笑めるが如し魂迎へ

美しき蓮華燈籠も灯を入れるゝ

「やぶちゃん注…「燈籠」「灯」は底本の用字。次句も同じ。」

玄關に入るより燈籠灯りゐし

露の灯にまみゆる機なく逝きませり

出生地鹿兒島 五句

朱欒咲く五月となれば日の光り

朱欒咲く五月の空は瑠璃のごと

天碧し盧橘^{ろきつ}は軒をうづめ咲く

「やぶちゃん注」：「盧橘」はミカン属ナツミカン *Citrus natsudaikai* 又はミカン科キンカン属 *Fortunella* のキンカン類の別名で、食用柑橘類を広く総称する語としても用いられる。ここでは五月の初夏の句で季語は「天碧し」（「盧橘」は実のつく秋の季語）、「うづめ咲く」とあるから初夏に白い花をつけるキンカンである。」

花朱欒こぼれ咲く戸にすむ樂し

風かほり香欒咲く戸を訪ふは誰ぞ

南國の五月はたのし花朱欒

琉球をよめる句 十三句

常夏の碧き潮あびわがそだつ

爪ぐれに指そめ交はし戀稚く

梅檀の花散る那覇に入學す

島の子と花芭蕉の蜜の甘き吸ふ

砂糖黍かぢりし頃の童女髪

「やぶちゃん注：「童女髪」は「うなるがみ（うないがみ）」と読んでいよう。」

榕樹鹿毛飯匙倩捕の子と遊びもつ

「やぶちゃん注…「飯匙倩」これは有鱗目ヘビ亜目クサリヘビ科マムシ亜科 *Protobothrops* 属及び *Trimeresurus* 属に属するするハブの三角形の頭部が飯を掬う匙に似ることに由来するらしい（英名では西洋の騎士が用いた槍（ランス）に擬えて「lance-head snake」と呼ぶ）が、「倩」の意は不詳（「倩」には「愛らしい口元」とか「はやい」という意があり、この辺りが関係するか？ 因みに「飯匙倩」音読みすると「はんし（又は「じ」又は「ひ」せい）である）。「鹿毛」は本来は馬の毛色の名で、全体にシカの毛色のように茶褐色で鬣と尾及び四肢下部が黒色のものをいうが、ここは蔭に同音のこれを当てて、熱帯の異国風俗を強調したものであろう。」

ひとでふみ蟹とたはむれ磯あそび

紫の雲の上なる手毬唄

海ほうづき口にふくめば潮の香

海ほうづき流れよる木にひしと生え

海ほうづき鳴らせば遠し乙女の日

吹き習ふ麥笛の音はおもしろや

潮の香のぐんぐんかわく貝拾ひ

「やぶちゃん注…「ぐんぐん」の後半は底本では踊り字「へ」。

これらの句は久女六〜八歳の頃の追想吟である。底本年譜によれば、久女は三、四歳までは鹿児島に住み、明治二九（一八九六）年六歳の時、父（鹿児島県県庁の官吏）が沖縄郡那覇県庁へ転勤（他県の県庁職員を転々と転勤するという、こうした人事があつたのは少し私には意外である）したのに伴い、一家で那覇に移り、翌明治三十年四月に那覇の小学校に入学したものの、五月には父がまた転勤で当時の日本領であつた台湾の南西の嘉義（現在の中華民国嘉義市）に転住、翌明治三十一年には台北に移つてここで久女は明治三十六年に小学校を卒業、上京して東京女子師範学校（現在のお茶の水女子大学）附属お茶

水高等女学校を受験して合格、入学した（一家は明治三九（一九〇六）年、久女十六歳の時に父が内地転勤となって東京に戻った。）」

八幡製鐵所起業祭 三句

かき時雨れ鎔炉は聳^たてり嶺近く

群衆も鎔炉の旗もかき時雨れ

おでん賣る夫人の天幕訪ひ寄れる

「やぶちゃん注…「炉」は勘案の末、ママとした。「八幡製鐵所起業祭」福岡県北九州市八幡東区で行われる祭り。毎年十一月三日付近の三日間で開催される。正式名称は「まつり起業祭八幡」。もとは官営八幡製鐵所（現在の新日鐵住金八幡製鐵所）の創業を記念した祭りで、明治三四（一九〇一）年十一月に「作業開始式」が行われたのを始まりとする。当初は八幡製鐵所主催の企業の祭りで、八幡製鐵所が操業を開始した十一月十八日から三日間に亘って行われていた。当時の十一月は寒く、たび

たび曇や霰が降ったという（昭和六〇（一九八五）年より、「まつり起業祭八幡実行委員会」主催になる市民祭となり開催日時も現在の十一月三日前後に移動、現在では八幡の秋の風物詩として定着している。会場は八幡製鐵所の企業城下町として発展してきた八幡東区中央、八幡製鐵所の福利厚生施設が立ち並ぶ大谷、そして八幡製鐵所発祥の地である東田と広範囲に及び、製鐵所の一般公開も行われている。以上は[ウィキの「起業祭」](#)に拠った。）」

櫻の句

一 延命寺（小倉郊外） 三句

釣舟の漕ぎ現はれし花の上

花の寺登つて海を見しばかり

花の坂船現はれて海蒼し

「やぶちゃん注…「延命寺」現在の福岡県北九州市小倉北区上

富四丁目にある黄檗宗東北山延命寺。恒武帝の延暦二一（八〇二）年に最澄入唐の前に一夜靈夢に感じて開山したという古刹であるが、慶応二（一八六六）年の小倉戦争で長州軍により火をかけられて焼失、その後、明治元（一八六八）年に現在の寺として再興された。ネット上の記載によれば、ここは本州との海路の玄関口でもあり、寺の高台からは関門海峡が臨めるとある。」

二 阿部山五重櫻（花衣所載） 四句

傘をうつ牡丹櫻の雫かな

「やぶちゃん注…「牡丹櫻」八重桜のこと。[グーグル画像検索](#)

[「牡丹桜」。](#)」

うす墨をふくみてさみし雨の花

「やぶちゃん注…「うす墨」次の句にも出る淡墨桜は狭義には岐阜県本巣市の淡墨公園にある樹齢千五百年以上のエドヒガ

ンザクラの古木を指し、蕾のときは薄いピンク、満開に至っては白色、散りぎわに特異な淡い墨色になり、名はこの散りぎわの花びらの色に因む（[ウィキの「淡墨桜」](#)に拠る。[グーグル画像検索「淡墨桜」](#)）。一重。これを分けたものか。」

雨ふくむ淡墨桜みどりがち

花の坂海現はれて風ぎにけり

「やぶちゃん注…「阿部山五重桜」これは安部山の誤りではあるまいか？ 安部山公園ならば、現在の福岡県北九州市小倉南区安部山にある。小倉南区北端部の足立山（標高五九七・八メートル）の南麓にある公園で、敷地は小倉南区安部山と湯川四丁目及び大字葛原に跨る。参照した[ウィキの「安部山公園」](#)によれば、安部山の地名は、明治三八（一九〇五）年に『この地を開墾し果樹や桜を植えて公開した小倉市生まれの農業指導者である安部熊之輔に由来し』、園内には約七百本もの『桜が植えられており、花見の名所となっている』とある。しかし前書の「五重桜」の意が不詳。八重ほどでないということか。しかし薄墨桜は一重であるから解せない。識者の御教授を乞う。」

三 八幡公會クラブにて 六句

掃きよせてある花屑も貴妃櫻

「やぶちゃん注…「貴妃櫻」楊貴妃桜。サトザクラ（[グーグル画像検索「サトザクラ」](#)）の一品種で花は大きく淡紅色の八重咲き。[グーグル画像検索「楊貴妃桜」](#)。」

風に落つ楊貴妃櫻房のまゝ

花房の吹かれまろべる露臺かな

むれ落ちて楊貴妃櫻房のまゝ

むれ落ちて楊貴妃櫻尚あせず

きざはしを降りる沓なし貴妃櫻

「やぶちゃん注…坂本宮尾氏の「杉田久女」によれば、六句と

も八幡製鉄所の迎賓館であった八幡公餘倶楽部（現在は新日鐵の研修所である高見倶楽部）とする。するとこの前書の「八幡公會クラブ」（底本表記は「八幡公会クラブ」）の「會」は「餘」の誤りとも考えられる。」

花衣時代 一句

春晝や坐ればねむき文机

「やぶちゃん注…角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」では、昭和七（一九三二）年のパートに同じく『花衣時代』の前書で六句載るその冒頭の句である。因みに他の五句は直ぐ後に出る『蒲生にて 五句』と同一である。本句集でこの一句を独立させたところに、久女の本句に対するなみなみならぬ自信のほどが見てとれる。久女を知る人には言わずもがなであるが、ここで一応注しておく、俳誌『花衣』は、久女が昭和七（一九三二）年三月に主宰誌として創刊した女性だけの俳誌『花衣』を創刊し主宰となったが、この『花衣』は同年九月の五号を以って廃刊となった。長女石昌子氏編の底本年譜によれば『家事の多忙と雑務に追われ作品の低下するをおそれ

たのが理由だった』とある。続く同年の記載には『この頃より久女は俳句作者として生涯を打ち込む決意を』したとあり、また、『句集出版の志を持ち、序文を虚子に願うも承諾されなかった』のもこの時であつたとある。――気怠い春昼……文机に前屈みに凭れる……春愁に沈む麗人……それが俳人久女その人の絵姿であつたのである……」

昭和七年昌子東上 五句

春寒の毛布敷きやる夜汽車かな

いつくしむ雛とも別れ草枕

寮住のさみしき娘かな雛まつる

健やかにまします子娘等の雛祭

寝返りて埃の雛を見やりけり

昌子よりしきりに手紙来る 三句

春愁の子の文長し憂へよむ

望郷の子のおきふしも花の雨

春愁癒えて子よすこやかによく眠れ

「やぶちゃん注…底本年譜によれば、昭和七（一九三二）年の八月、長女昌子（当月で満二十一歳）は横浜税関監視部長中村重善氏夫妻の世話で同税関長官房文書係雇として就職した。久女四十二歳であつた。」

蒲生にて 五句

杜若雨に殖えさく高欄に

杜若映れる缸をまたぎけり

「やぶちゃん注…「缸」は「はし」と訓じているか。石橋のこ
と。」

柚の花の香をなつかしみ雨やどり

降り出でし缸をかへしぬ杜若

杜若またぐ缸あり見えがくれ

「やぶちゃん注…「蒲生」現在の福岡県北九州市小倉南区蒲生
かと思われる。当地を流れる紫川の名は、ここ蒲生の鷺峰山大
興善寺の門前に残っていた万葉集の歌枕として詠まれた「企救
の池」の名残りといわれる「紫池」に由来するという説がある。
万葉好きであった久女に相応しい地であり、この五句も万葉ぶ
りの装束の久女を配してこそより美しく幻想的である。」

深耶馬溪 六句

大嶺に歩み迫りぬ紅葉狩

自動車のついて賑はし紅葉狩

打ちかへす野球のひゞき草紅葉

青の洞門を見て

洞門をうがつ念力短日も

嚴寒ぞ遂にうがちし岩襖

鎚とれば恩讐親し法の秋

洞門をうがちし僧禪海の像及び碑が青の洞門の入口にある。
人間の一心は遂に何事も成就するといふ事を感知せらる。

「やぶちゃん注…角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」によれば、昭和一〇（一九三五）年の連作。本句集では異例の長い後書で、その「人間の一心は遂に何事も成就するといふ事を感知せらる」という箇所は、実に実に久女のひたむき且つ恐るべき執心の人生の意思を感じさせるものではない

か。因みに、この翌昭和十一年十月、久女は突如、虚子によって『ホトトギス』から除名処分となる。

「深耶馬溪」は既注。「青の洞門」同じく大分県中津市本耶馬溪町樋田にある洞門（隧道）で、名勝耶馬溪に含まれ、山国川に面してそそり立つ競秀峰の裾に位置する。全長は約三四メートルで、そのうちトンネル部分は約一四四メートル（ウイキの「青の洞門」に拠る）。中津市公式サイト内の「青の洞門」より引用する（アラビア数字を漢数字に、一部の記号をカタカナに変えさせて戴いた）。

《引用開始》

大正八年に発表された菊池寛の短編小説「恩讐の彼方に」で一躍有名になった、禅海和尚が掘った洞門（トンネル）で、耶馬溪を代表する名勝である競秀峰の裾野に穿たれている。

諸国巡礼の旅の途中に耶馬溪へ立ち寄った禅海和尚は、極めて危険な難所であった鎖渡で人馬が命を落とすのを見て、慈悲心から享保二〇年（一七三五）に洞門開削の大誓願を興したと伝えられている。

禅海和尚は托鉢勧進によって資金を集め、雇った石工たちとともにノミと鎚だけで掘り続け、三十年余り経った明和元年（一七六四）、全長三四二メートル（うちトンネル部分は一四四メ

ートル）の洞門が完成した。

寛延三年（一七五〇）には第一期工事落成記念の大供養が行われ、以降は「人は四文、牛馬は八文」の通行料を徴収して工事の費用に充てており、日本初の有料道路とも言われている。

完成当初は樋田の刳抜（くりぬき）と一般に呼ばれていたが、江戸末期から大正にかけて樋田のトンネルや青の洞門と呼ばれるようになり、大正十二年四月尋常小学校国語読本巻第二十一詠には青の洞門と書かれており、昭和十七年に大分県の史跡指定にあたり、青の洞門が正式名称となったようである。

明治三十九年から翌四十年にかけて行われた大改修で大部分が原型を破壊されたと言われており、現在の青の洞門には、トンネル内の一部に明かり採り窓などの手掘り部分が残っている。

《引用終了》

「禪海」禅海（元禄四（一六九一）年～安永三（一七七四）年）は正しくは真如庵禅海で曹洞宗の六十六部（法華経を六十六部書写し、日本全国六十六ヶ国の国々の霊場に一部ずつ行脚して奉納した僧。鎌倉時代から流行り、江戸時代には広く諸国の寺社に参詣する巡礼又は遊行聖を指す。白衣に手甲・脚絆・草鞋がけで背に阿弥陀像を納めた長方形の龕（がん）を負い、六部

笠をかぶった姿で諸国を廻ったが、後には同装の巡礼姿で米錢を請い歩いた乞食に零落した。六部とも。ここは「大辞林」の記載に拠った。越後国高田藩士の子で本名は福原市九郎。生年については貞享四（一六八七）年説もある。両親が亡くなったことから世の無常を感じて出家、諸国を行脚し、正徳五（一七一五）年に得度して禅海と称した。回国の途中で豊後国羅漢寺を参詣した折り、川沿いの断崖に架けられた栈橋、青野渡しが危険で、人馬がしばしば覆没することを知って、これを哀れみ、鑿道の誓願を發して陸道の掘削を思いついた。享保一五（一七三〇）年頃には豊前國中津藩主の許可を得て掘削を始めたが、その後周辺の村民や九州諸藩の領主の援助を得て三十年余りの歳月をかけて、宝暦一三（一七六三）年に完成させた。当時のそれは高さ二丈（約六メートル）、径三丈（約九メートル）、長さ三〇八歩（三六九・六メートル）。開通後、通行人から通行料を徴収したという話も伝わっており、この洞門は日本最古の有料道路とも言われている。菊池寛の小説「恩讐の彼方に」の主人公「了海」（俗名・市九郎）のモデルとなった。『作中では主である旗本中川三郎兵衛を殺害してその妾と出奔、木曾鳥居峠で茶屋経営の裏で強盗を働いていたが、己の罪業を感じて出家、主殺しの罪滅ぼしのために青の洞門の開削を始め、後に

仇とつけ狙った三郎兵衛の息子と共に鑿ったものとされるが、主殺しなどのエピソードは菊池の創作である』（以上は引用を含め、[ウィキの「禅海」](#)に拠った。一部に前掲した中津市の記載と異なる箇所があるので注意されたい。）」

鶴の句

「やぶちゃん注…全六十一句で「鶴を見にゆく」と「孤鶴群鶴」の二部からなる久女の大作。これらの長歌ともいうべき昭和九（一九三四）年十二月二十三日のクレジットを持つ随筆「野鶴飛翔の圖」を引き続いて電子化しておく。是非、併せてお読み戴きたい。吟行先である旧山口県熊毛郡八代村（現在の周南市）及びここに登場する鶴（ナベヅル）などについては「野鶴飛翔の圖」の方の私の後注を参照されたい。」

一 鶴を見にゆく

月高し遠の稻城はうす霧らひ

「やぶちゃん注：「稻城」「いなき／いなぎ」と読み、稲束を貯蔵する小屋のこと。ただ、私は次の「並びたつ稻城の影や山の月」や、後の「二 孤鶴群鶴」の「鶴の群屋根に稻城にかけ過ぐる」を眺めていると、これは稻城ではなくて稲木、刈り取った稲を束にして掛け並べて干す柵や木組み（稲架・稲掛け）のことを指しているように思えてくる。そう読んだ方がロケーションとして遙かによい。」

並びたつ稻城の影や山の月

鶴舞ふや日は金色の雲を得て

山冷にはや炬燵して鶴の宿

松葉焚くけふ始ごと煖爐かな

燃え上る松葉明りの初煖爐

ストーヴに椅子ひきよせて讀む書かな

横顔や煖爐明りに何思ふ

投げ入れし松葉けぶりて煖爐燃ゆ

菊白しピアノにうつる我起居

霜晴の松葉掃きよせ焚きにけり

向う山舞ひ翔つ鶴の聲すめり

舞ひ下りてこのもかのもの鶴啼けり

「やぶちゃん注…「このもかのもの」此の面彼の面。連語で、あちらこちら・そこここの意。」

月光に舞ひすむ鶴を軒高く

二 孤鶴群鶴

暁の田鶴啼きわたる軒端かな

寄り添ひて野鶴はくろし草紅葉

畔移る孤鶴はあはれ寄り添はず

雛鶴に親鶴何をついばめる

ふり仰ぐ空の青さや鶴渡る

子連れ落穂拾ひの鶴の群

鶴遊ぶこのもかのもの稻城かげ

遠くにも歩み現はれ田鶴の群

畔ぬくし静かに移る鶴の群

一群の田鶴舞ひ下りる刈田かな

鶴の群屋根に稻城にかけ過ぐる

一群の田鶴舞ひすめる山田かな

親鶴に従ふ雛のやさしけれ

鶴の影ひらめく畔を我行けり

好晴や鶴の舞ひ澄む稻城かげ

「やぶちゃん注：「好晴」は「かうせい（こうせい）」で快晴のこと。」

群鶴の影舞ひ移る山田かな

鶴の影舞ひ下りる時大いなる

遠くにも群鶴うつる田の面かな

舞ひ下りる鶴の影あり稻城晴

枯草に舞ひたつ鶴の翅づくろひ

歩み寄るわれに群鶴舞ひたてり

大嶺にこだます鶴の聲すめり

近づけば野鶴も移る刈田かな

群鶴を驚かしたるわが歩み

翅ばたいて群鶴さつと舞ひたてり

大空に舞ひ別れたる鶴もあり

三羽鶴舞ひ澄む空を眺めけり

學童の會釋優しく草紅葉

冬晴の雲井はるかに田鶴まへり

旅籠屋はたしやの背戸にも下りぬ鶴の群

舞ひ下りて田の面の田鶴は啼きかはし

彼方より舞ひ来る田鶴の聲すめり

軒高く舞ひ過ぐ田鶴をふり仰ぎ

啼き過ぐる簷端の田鶴に月淡く

田鶴舞ふや稻城の霜のけさ白く

田鶴舞ふや日輪峰に登りくる

鶴なくと起き出しわれに露臺の旭

「やぶちゃん注：確信犯の字余りの多重露光が却って清冽なり
アリズムを生んでいる。」

鶴舞ふや稻城があぐる霜けむり

鶴鳴いて郵便局も菊日和

家毎に咲いて明るし小菊むら

鶴の里菊咲かぬ戸はあらざりし

稻城かげ遊べる鶴に歩み寄り

好晴や田鶴啼きわたる小田のかげ

舞ひあがる翅ばたき強し田鶴百羽

鶴の群驚ろかさじと稻架かげに

近づけば舞ひたつ田鶴の羽音かな

この里の野鶴はくろし群れ遊ぶ

水郷遠賀 十一句

萍の遠賀の水路は縦横に

菱の花咲き閉づ江沿ひ句帳手に

菱刈ると遠賀の乙女ら裳を濡すも

「やぶちゃん注…後掲される、

菱採ると遠賀の娘子裳濡づも

の句の推敲形の一つ。そちらの注を参照されたい。」

菱の花引けば水垂る長根かな

水ぬるむ卷葉の紐の長かりし

水底に映れる影もぬるむなり

青すゝき傘にかきわけゆけどゆけど

泳ぎ子に遠賀は潮を上げ來り

千々にちる蓮華の風に佇めり

藻鹽焚く遠賀の港の夕けむり

もてなしの蓮華飯などねもごろに

「やぶちゃん注…「蓮華飯」ハスの実はまだ青いうちは食用になる。ネット上では発案者を横浜三溪園園主であつた原富太郎（慶応四（一八六八）年〜昭和一四（一九三九）年）とし、また以下のようなレシピを見つけた。実の固い皮を剥いた後、さらにその下の薄皮も剥き取り、出汁でさつと煮ておく。器にご飯と蓮の実を入れて出汁をはり、千切りのしその葉を添えて供する。『蓮の実の仄かな香りとシャキッとした食感でとても美味しくいただけ』とある（[tokkeiji](#)氏の個人ブログ「まつがおか日記」の「[蓮華飯](#)」に拠る）。但し、蓮華の実を食用とする習慣は汎アジア的に古くからあり、この久女の「蓮華飯」も

そうした伝統に基づくものであって、原三溪のそれとは思われない。」

企玖の紫池にて 三句ならびに五句

豊國の企玖の池なる菱の末を

つむとや妹が御袖ぬれけむ

萬葉集豊前國白水郎歌

菱摘みし水江やいづこ嫁菜摘む

「やぶちゃん注…「嫁菜」を久女は「万葉集」の古称に因んで、「うはぎ」と読んでいるものかとも思われる（少なくとも坂本宮尾氏の「杉田久女」で坂本氏はそう考えておられることが後に示す引用のルビによって明らかである）。所謂、野菊（実際に現在でもヨメナに似る近縁種のキク類を総称して「嫁菜」と呼んでいる）と呼ばれるキク亜綱キク目キク科キク亜科シオン属ヨメナ *Aster yomena* のこと。参照した[ウィキの「ヨメナ」](#)によれば、『若芽を摘んで食べる。古くは万葉集の時代から使われていたようで、オハギ、あるいはウハギと呼ばれている。ヨメナご飯なども有名。名前の由来は嫁菜とも夜目菜とも言わ

れ、はつきりしない。一説には、美しく優しげな花を咲かせるため「嫁」の名がつくといわれている。なお、のぎくをヨメナの別名とする記述が国語辞典関連ではよく見られるが、植物図鑑ではヨメナの別名としてノギクを挙げた例はない』とある。」

萬葉の池今狭し櫻影

池の傳説

夕づゝに這ひ出し蛙みな聶と

摘み競ふ企玖の嫁菜は籠にみてり

嫁菜つみ夕づく馬車を待たせつゝ

里人の茅の輪くぐりに従はず

一人強し夜の茅の輪をくぐるわれ

萬葉の菱の咲きとづ江添ひかな

「やぶちゃん注…坂本宮尾氏の「杉田久女」（九六頁）によれば、これらの句（若しくは少なくとも「菱積みし」「摘み競ふ」「嫁菜摘み」の三句）は「企玖の紫池にて」として久女の主宰誌『花衣』第二号（昭和七（一九三二）年四月発行）に初出する（同前書の万葉歌は初出では万葉仮名表記の平仮名ルビ附）。句群は春に始まり最後の三句は夏であるから総てが同一時制の嘱目吟ではなく、吟自体は前年以前のものと考えてよからう。

「企玖の紫池」企救は既に何度も出ているが、現在の福岡県北九州市小倉北区・小倉南区・門司区の広域を指す古地名。万葉時代の「企救の紫池」の所在地は不明とされている。久女が佇んでいるのはその比定地の一つと伝承されている現在の福岡県北九州市小倉南区蒲生にある曹洞宗鷺峰山しゅうぶさん大興善寺門前にある紫池である（宮尾氏の引用を参照。そこでは「禪寺」となっているが誤認であろう）。但し、ネット上で見る限り（[ここ](#)）の鷺峰公園の紹介記事中に窪地の画像がある）、少なくとも現在には水が全くなく、池跡となっている。当時はまだ狭いながらも沼のような状態であったものらしい（宮尾氏の引用によれば、道路建設工事で無惨にも埋め立てられたとある）。「北九州あれこれ」の「[蒲生](#)」の地図を見ると、池跡の直近東に文字通りの

現在は軽く蛇行する紫川が南北に流れ、その右岸が紫川河畔公園として整備されているのが分かる。恐らくはこの周辺一帯の原紫川の氾濫原に有意に広い沼沢地帯が紫川畔に存在し、そこに菱が植生していたものと考えてよからう。ここの紫池というのは紫川の中下流域に広がったそうした沼沢地方の総各称であつたものと考ええる。

「豊國」現在の福岡県東部と大分県を含む広域を指す地名と推定されている。

「豊國の企玖の池なる菱の末をつむとや妹が御袖ぬれけむ」
「万葉集」 卷第十六の三八七六番歌、

豊前國の白水郎の歌一首

豊國の企救の池なる菱の末を採むとや妹が御袖濡れけむ

で、「豊前國」は企救郡、現在の北九州市。「白水郎」は漁師。海士で「白水」は元来は中国の地名で、この地方出身の者は水に潜ることが上手であつたことに由来する。「妹」は講談社文庫版中西進訳注では『上層階級の女か』とする。

「池の傳説」大興善寺公式サイト内の「[伝承](#)」の頁に、最盛期であつた律宗当時（同寺は執権北条時頼の命によって寛元三

（一二四五）年に建立された奈良西大寺末寺で当時は十八大寺の一つとして崇敬された律宗であったが、慶長元（一五九六）年頃に現在の曹洞宗に改宗している）の延元三・建武五／暦応元（一三三八）年頃の伝承と伝える以下の話を指す。『住職の玄海律師は戒徳密行、人々に重んぜられ、寺を治めておられましたが、ある日、一室に坐して阿字観を修しておられたとき、山林寂靜の中、修行の妨げにならないようにと、蛙が鳴き止んだそうです。このときより今にいたるまで寺の境内周囲に蛙の鳴くことがありますでした。紫の池に蛙鳴かずという云い伝えが現在も残っています』。

以下、坂本氏の前掲書の「万葉の企救の紫池」から部分引用する（アラビア数字を漢数字に代えた）。

《引用開始》

企救（あるいは企玖）郡は現在の北九州市門司区と小倉区にあたる。古代の小倉の南部一帯は大きな湖水であったが、万葉の時代に入って次第に滴れて、「企救の池」と呼ばれるようになっていったという。『万葉集』に詠まれた企救の他の所在地については諸説あるが、久女が訪れたのは小倉郊外の蒲生がもにある大興だいこう禪寺門前の紫池で、久女は〈万葉の池今狭し桜影〉と詠んだ。現在、この場所は、道路建設によって埋め立てられたが、紫池が

小倉の中央を流れる紫川の名の起こりとされている。

「花衣」の第三号に、佐藤普士枝が「蒲生吟行」として報告を載せている。それによると久女と小倉の「花衣」含月の十名が、縫野いく代邸で土筆を摘み、句を詠み、近くの大興禅寺に詣でて、紫池で嫁菜摘みに興じた。『万葉集』に造詣の深い久女は紫池や、嫁菜の説明をしたのであろうか。久女たちは、春の一日を心ゆくまで遊んだことがうかがわれる。

ここに詠まれた嫁菜は古来食用にされてきた。柿本人麻呂の歌に「妻もあらば摘みて食べまし沙弥さみの山野の上へのうはぎ過ぎにけらずや」(二二二二二)(妻が居合わせたら一緒に摘んで食べましょうものを、沙弥の山の野の上の嫁菜は盛りを過ぎたではないか)とあるように、早春の嫁菜の若葉は香りが高く、おひたしや、てんぷら、汁の実とされた。久女の時代にどれほどの人がこの嫁菜を食べていたかはわからないが、久女は野趣のある食べ物を好んだらしく、ご飯に炊き込み、へ炊き上げてうすき緑や嫁菜飯と句に残した。久女は春には嫁菜飯を炊いて客をもてなし、秋には菊枕を作るなど、季節の風雅をこまめに実行に移してみたくなる俳人だった。

《引用終了》

私はこの最後に語られる久女の姿に誰よりも強く惹かれるの

である……。

「里人の茅の輪くぐりに従はず」と「一人強し夜の茅の輪をくぐるわれ」の組写真は意志鞏固にして独立の人久女ならではのもの、こういう組み句というのは、知られた俳人のものでも、妙に説明調の印象を与えて上手くゆかぬものであるが、これは後の句に強靱な響きが収斂して素晴らしい希有の成功例である。

最後に。最後の句のために[グーグル画像検索「菱の花」](#)をリンクさせておく。」

水郷遠賀 三句

菱實る遠賀の水路は縦横に

菱採ると遠賀の娘子裳濡づも

菱摘むとかゞめば沼は沸く句ひ

「やぶちゃん注：菱採りの乙女の裳裾が「濡」れるというのは、坂本宮尾が「杉田久女」で述べておられるように、万葉以来の官能的な美の慣用表現で、情熱の女人久女の面目躍如たる三句

である。宮尾氏のよれば、名吟「菱採ると」の句は、何度も推敲を重ねているとある。それらを宮尾氏の記載に従って復元してみると、

菱採ると遠賀の乙女は裳濡づも

←

菱採ると遠賀の乙女ら裳濡づも

←

菱採ると遠賀の娘子裳濡づも

はとなる。宮尾氏は『「乙女は」は説明的だ。「乙女ら」よりも「娘子」の方が字面がいい。そのため久女は最終的に娘子を採用了のであろう』とされ、但し、『久女は「娘子」に「いらつこ」のルビをふっているが、辞書には「いらつこ」とは若い男のこと、若い女は「いらつめ」とある。そうなるはこの読みには無理がありそうだ』と附記しておられる。しかし、この句、その瑕疵を補って十分に素晴らしいと私は思う。」

遠賀川 十一句

「やぶちゃん注…標題は確かに「をんが（おんが）」とルビを振っているが、本句群の句中に於いては「遠賀」を恐らくは後注する古地名の「おか」から「おが」と読んでいる可能性が高いか。坂本宮尾氏は「杉田久女」でそう断定しておられる。」

菱蒸す遠賀の茶店に來馴れたり

すぐろなる遠賀の萱路をただひとり

「やぶちゃん注…「すぐろ」末黒。野焼きの跡が一面に黒くなっているさまをいう語。春の季語。」

生ひそめし水草の波梳き來たり

添ひ下る塙舸の運河はぬるみけり

「やぶちゃん注…「塙舸」は岡の水門のこと。遠賀川河口付近の古えの地名。神武東征の際に皇子や水主を率いて到着した所

という。岡津・岡の浦ともいう。「おか」は「おほこ」（大河）
↓「おうこ」↓「おか」と転訛したもので、古代語で川のことを
「こ」と言ったと宮崎康平氏の「まぼろしの邪馬台国」（昭和
四二（一九六七）年講談社刊）にはある。」

土堤長し萱の走り火ひもすがら

風さそふ遠賀の萱むら^ほ竈鳴りつゝ

「やぶちゃん注：「竈^ほ鳴り」「日本国語大辞典」に「ほなる」の
項があり、そこでは方言として火が起こる（山梨県南巨摩郡奈
良田）、熱を・ほてる（伊豆三宅島）とある。坂本宮尾氏は「杉
田久女」で、他の句の「ひもすがら」「風さそふ」という措辞
と並べて、確信犯で『あきらかに和歌の調べを取り入れている』
と述べておられる。」

蘆むらを焼く火はかなく消えにけり

竈迫れば草薙ぐ鎌よ野焼守

もえ迫る野焼の草を薙ぎ拂ひ

蘆の火の燃えひろがりて消えにけり

蘆の火に天帝雨を降^{くだ}しけり

蘆の火の消えてはかなしざんざ降り

昭和八年光子東上 三句

子のたちしあとの淋しさ土筆摘む

降り出でし傘のつぶやき松露とる

娘がゐねば夕餉もひとり花の雨

「やぶちゃん注…既に注したが、一部を再掲する。昭和八（一九三三）年の「日記抄2」を見ると、小倉高等女学校を卒業後すぐに次女光子は合格していた東京の女子美術専門学校（現在の女子美術大学）に遊学している（坂本氏の「杉田久女」によ

れば夫宇内の強い『反対を押し切って』『送り出した』とある。
以下の日記でもそれが分かる)。そしてその日記には冒頭（この部分は日付が入っていないが二月三日以前）から彼女の学資のための儉約の誓いが記され、

遊學の春まつ娘なり靴みがく

遊學やかゝとの高き春のくつ

という句が載る一方、三月五日に『ホトトギス』雑誌欄へ投句したもの的一句として、

ひなかざる子の遊學は尚ゆりず

とある（「ゆりず」は「許りず」で下二段活用「許る」は、許される・許可が下りるの意味の古語である）。次に続く日附不詳（三月六日から十二日の間）の項に、『此頃光子出立のしたく Fulton わたぬき』『洗濯、テガミ、セン句、歳時記しらべ等にて、十二時前ねし夜はまれ也。多忙多忙』とか、『光子』『Fulton 布地五円也』とあり、三月二十日の条には『光子遊學』

の三年間は世とたち、習字と藝術著作等自分も勉強して暮さう。一点に集中すべし。』、続く三月二十一日の条では『光子の遊學問題を中心にして、夫との争ひますます深刻。金も百円以上に入用なのに、夫はがみがみ叱言と朝夕の怒罵叱言のみにて、一錢も出してくれぬから私はしかたないけなしの預金をはたいて皆出してやらねばならぬ。私はどこまでも光子の味方だ。いのりてすゝむ所、よき方法あらんか?』と綴る。光子の東京への「遊學の旅」立ちは三月二十八日であつたが、『光子東上。／夜來より風雨はげしくかつ夫の異議出たれば、光子もしくしくなく。』『「いんきな出立ね」と光子のしづむもあはれ也。』光子を送った後、『誰もぬ家へ十二時歸宅して心うつろ、淋しさにたへず。』とある。

「松露」菌界デイカリア亜界 *Dikarya* 担子菌門ハラタケ亜門ハラタケ綱ハラタケ亜綱イグチ目ヌメリイグチ亜目シヨウロ科シヨウロ *Rhizopogon roseolus*。以下、[ウィキの「シヨウロ」](#)によれば、『子実体は歪んだ塊状をなし、ひげ根状の菌糸束が表面にまといつく。初めは白色であるが成熟に伴って次第に黄褐色を呈し、地上に掘り出したり傷つけたりすると淡紅色に変わる。外皮は剥げにくく、内部は薄い隔壁に囲まれた微細な空隙を生じてスポンジ状を呈し、幼時は純白色で弾力に富む

が、成熟するに従って次第に黄褐色ないし黒褐色に変色するとともに弾力を失い、最後には粘液状に液化する』。『胞子は楕円形で薄壁・平滑、成熟時には暗褐色を呈し、しばしば』一、二個の『さな油滴を含む。担子器はこん棒状をなし、無色かつ薄壁、先端には角状の小柄を欠き』小、六く八個の胞子を生ずる。『子実体の外皮層の菌糸は淡褐色で薄壁ないしいくぶん厚壁、通常はかすがい連結を欠いている。子実体内部の隔壁(Tramal Plate)の実質部の菌糸は無色・薄壁、時にかすがい連結を有することがある』。『子実体は春および秋に、二針葉マツ属の樹林で見出される。通常は地中に浅く埋もれた状態で発生するが、半ば地上に現れることも多い。マツ属の樹木の細根に典型的な外生菌根を形成して生活する。先駆植物に類似した性格を持ち、強度の攪乱を受けた場所に典型的な先駆植物であるクロマツやアカマツが定着するのに伴って出現することが多い。既存のマツ林などにおける新たな林道開設などで攪乱された場所に発生することもある』。『安全かつ美味な食用菌の一つで、古くから珍重されたが、発見が容易でないため希少価値が高い。現代では、マツ林の管理不足による環境悪化に伴い、産出量が激減し、市場には出回することは非常に少なくなっている。栽培の試みもあるが、まだ商業的成功には至っていない』。食材とし

ての松露は『未熟で内部がまだ純白色を保っているものを最上とし、これを俗にコメシヨウロ（米松露）と称する。薄い食塩水できれいに洗って砂粒などを除去した後、吸い物の実・塩焼き・茶碗蒸しの具などとして食用に供するのが一般的である。成熟とともに内部が黄褐色を帯びたものはムギシヨウロ（麦松露）と呼ばれ、食材としての評価はやや劣るとされる。さらに成熟が進んだものは弾力を失い、色調も黒褐色となり、一種の悪臭を発するためには食用としては利用されない』とある。」

宇佐櫻花祭 三句

うらゝかや朱のきざはしみくじ鳩

三宮を賽しおはんぬ櫻人

櫻咲く宇佐の呉橋うち渡り

「やぶちゃん注」宇佐「大分県宇佐市南宇佐にある宇佐神宮。

[公式サイト](#)などによれば、全国の四万社余りある八幡の総本宮

で、祭神である八幡^{はちまん}大神^{おおかみ}は応神天皇の神霊で、欽明天皇の御代、

五七一年に初めて宇佐の地に示顯したと伝えられ、神亀二（七二五）年に現在地に御殿を造立、八幡神を祀ったのを創建とする^{とある}。天平三（七三一）年には神託により二之御殿が造立され、宇佐の国造が比売大神を祀っている。比売大神（ひめのおおかみ）は八幡神が現われる以前の古い地主神として祀られ崇敬されてきたもので、宗像三女神（多岐津姫命・市杵島姫命・多紀理姫命）に比定されている。二句目に出る応神天皇の母神功皇后（別名を息長足姫命とも呼ぶ^{おきながたらしひめのみこと}）を祀る三之御殿は弘仁一四（八二三）年の建立になり、母神として神人交歓・安産・教育などの守護を成すとされる。

「宇佐櫻花祭」[公式サイト](#)によると、桜花祭^{おうかさい}は四月十日に行われる宇佐神宮の小例祭で巫女が桜の枝を手にして豊栄の舞を舞うとある。

「みくじ鳩」宇佐神宮の民芸品で御御籤を兼ねる。[観光館 文福](#)（昭和三一年創業の宇佐神宮の参道入り口に位置するレストラン）のこの[ブログ記事](#)によれば、『本来は宇佐の溝口ひょうたん本舗の創業者（現在の溝口栄治社長の祖父にあたる方）の発明品』であったらしいとある。リンク先で新旧のみくじ鳩を見られ、『画像の右側に色鮮やかで、大きな張り子の鳩が二つあり』、それが『本来のみくじ鳩で』、『胸のところにみくじ』

鳩と書いてあり』『この紙を剥ぐと中からみくじが出るような仕組みになってい』るとある。但し、『残念ながらこの張り子のみくじ鳩は今もう作っていない』ないとあるので、久女が手にしたのは今の土鈴ではなく、この大きな張子の鳩であったと考えてよいであろう。

「賽し」「さいし」と読む。賽銭などを掲げて拝むの意。ここは巫女が舞いつつ桜の枝を奉じるように見えることをいうのである。

「呉橋」「くれはしと読む。宇佐神宮西参道にある屋根付きの木造橋。[ウィキの「呉橋」](#)によれば、宇佐神宮の神域を画す寄藻川に架かる『屋根付きで朱塗りの優美な橋である。この橋が位置する西参道は、昭和初期までは表参道であり、朝廷より派遣された宇佐使と呼ばれる勅使が通ったため勅使街道とも呼ばれていた』。現在の橋は元和八（一六二二）年に、豊前小倉藩第二代藩主細川忠利によって修築されたもので（但し、明治九（一八七六）年と昭和二六（一九五一）年に大改修されている）。上部は木造で、三基ある橋脚は石造り、屋根は向唐破風造り（出窓のように独立して葺き下ろしの屋根の上に千鳥破風の如く造られたもの）で檜皮葺（棟は銅瓦葺）である。現在は渡ることはできず、十年に一度の勅使祭の時にのみ使用される。

『創建年代は不詳であるが、鎌倉時代より前に存在していたといわれる。中国の呉の人が架けたと伝えられ、これが橋の名の由来となっている』。正安三（一三〇一）年には『勅使として宇佐神宮を訪れた』和氣篤成（医師。典薬頭・大膳大夫。「徒然草」第百三十六段に名が出る）『が「影見れば 月も南に寄藻川 くるるに橋を 渡る宮人」という歌を詠んでいることから、この頃にはすでに呉橋があったことを確認できる』とある。公式サイトに勅使祭は大正一四（一九二五）年から現在の十年に一度の臨時奉幣祭となったとあり、彼女が本句を詠んだ（坂本宮尾「杉田久女」一一九頁に拠る）昭和七（一九三二）年はこれに当たらない。もしや、この頃は呉橋を一般参詣人が渡ることが許されていたものか？ 識者の御教授を乞うものである。私は行ったことがないが、リンク先の画像を見ると、とても素敵な橋である。」

宇佐神宮 五句

うらゝかや齋き祀れる瓊の帯

藤挿頭す宇佐の女禰宜は今在さず

丹の欄にさへづる鳥も惜春譜

雉子鳴くや宇佐の盤境禰宜ひとり

春惜む納蘇利の面は青丹さび

「やぶちゃん注」坂本宮尾氏の「杉田久女」によれば、本五句は昭和八（一九三三）年七月号『ホトトギス』の久女二度目の雑詠欄巻頭を飾ったものである。従ってこれは前の「宇佐櫻花祭 三句」の翌年の再訪と吟詠であることが分かる。久女には、発表誌年月不詳の「息長帶姫命の瓊のみ帯おきながたらしひめのみこと たま おびについて」という文章があり、本歌及びこの参拝吟行を細かに語っているので以下に引用する。底本全集第二巻を用いたが、恣意的に正字化した。踊り字「へ」「へ」は正字化した。

*

息長帶姫命の瓊のみ帯について

おたづねの宇佐神官と宇佐八幡とは同一のものに御座います。

宇佐本殿は三殿合祀で中央三比賣大神（多岐津姫命、市杵島姫命、多岐理姫命）、右殿神功皇后（御名息長帶姫命）、左殿応神天皇（御名譽田別尊）、この三神を合して宇佐神官と申しまゐす。昔は宇佐八幡と申し上げたのですが明治四年五月官幣大社に列せられ、同六月から宇佐神官と申す様になりました由。

さて瓊タマの帶は、（聖武天皇奉獻による）神功皇后の御物と申し奉る古い唐錦の御帶で、禰宜の語るところによりますと、こげ茶の地に、草花模様があり、それに五色の小さい瓊を所々にぬひつけた誠に高貴なおみ帶でございますとか。もつとも地色も模様も、かしこけれど、すでにぼろぼろで、ほんの四五寸の布地だといふのみでございます由。これが今は神功皇后の御神殿中に秘藏される宇佐第一の神宝でございますが、一説には応神天皇様の御袴腰とも申され、いづれが正しいかは、判じませぬが。

三比賣大神及神功皇后がいづれも女神におはしまされ、また宇佐神官が、うらゝかな朱宮居アカミヤイでいらせられる事も、玉のみ帯といふ感じの方が私にはふさはしく思はれました。殊に又此の日の透るばかりな好晴のうらゝかさも、只もう瓊のやうな感じがピンと私にはきました。尚玉を單にうつくしい帯といふ意のみではなく、瓊をまつりつけたおん帯の意で用ひました。

中央宇佐神宮が兵火にあひ御寶庫中の神宝も大かたうばひ去られた中に、此瓊の御帶のみが、今の彌勒神宮寺跡におちてゐましたのを、禰宜の一人が見出して取もどし、その後はずつと、神殿の朱の御扉中に奉安してあるものゝ由。宮司以外は（宮司も一年一度例祭開扉の外は）立入るを絶対にゆるされぬ神殿中故、實際拜觀したものは殆どないとかいふ事です。此手紙の大帶姫命といふ事は私は一向存じませんが、神功皇后の御名息長帶姫命の事とはちがひませうか。

私は今春宇佐へまゐり、古実にくはしい禰宜から以上の話を承つた丈けです。

尚おたづねの藤かざすは、別に宇佐神宮の古事からえたわけでもなく、私の創始でございます。

宇佐の女禰宜ニヨネギは昔は大変な勢力があつたけれども、鎌倉時代に廢絶したものゝ如く、今も女禰宜の屋敷跡などいひつたへるものが宇佐の古い築地町の中などにはさまつてゐます。

丁度私が宇佐に詣つた時は、神苑の藤が咲くころで、あの濃紫色の花房から、私は奈良朝時代や源氏物語中の古典の舞樂、丹の欄にぬかづく、清そな女禰宜の藤をかざしてでもゐる様な面影をふと思ひうかべました。神苑の森ふかく老樟そびゆるところ、昔の宇佐の宮居は、さぞ藤がいつぱいうち垂れてゐはし

なかつたらうかななども考へまして。

尚宇佐の盤境は、神宮発祥の地として現今の宮から数十丁奥の、人跡まれな宇佐山にあり、三比賣大神天降の地。三比賣神にかたどつて三体の、一丈餘の大岩をたて、其めぐり岩でかこんだ、つまり石器時代の神祇の古跡で、しめを張り、常はたつた一人の禰宜が居ます。

古事記等にある盤場の一つで、御承知とは在じ上ますが申添ます。尚宇佐の鎮疫祭奉納の雅楽の蘭陵納蘇利のつけます二つの面は宝物で千年以上のもの。之をかぶり、古剣をふるひつつ、神宮寺跡の大地で土地の古老が毎年まひます。此蘭陵、なそりと二つの悠長な面に眺め入つてますと、千年といふ永い歳月の流れ、幾変遷してゆく悠長の時代といふものを私は今更らながら感じ、自分自身もどんどん時代の波に洗ひ流されてしまふのだといふ心地がしみぐしました。

*

簡単に語注を附しておく。

- ・「譽田別尊」応神天皇の諱で「ほむたわけのみこと」と読む。
- ・「四五寸」十三〜十五センチメートル程。
- ・「女禰宜」^{ニミキ}巫女。めねぎ。
- ・「盤境」底本には編者による『(ママ)』注記が右につくが、

問題ない。これは「いわくら」又は「いわさか」と読み（盤座とも書く）、祭祀に際して神が降臨する岩石若しくは石を築き廻らした一定の場所を指す語で、本邦に於いては社殿建築以前の古代祭祀の結界祭場と考えられるものをいう。後の「盤場」（「ばんじょう」若しくは「いわば」と読んでいるか）も同じ。

「数十丁」十丁（町）は一キロ強。「宇佐山」というのは宇佐神宮の東南約六キロメートルに位置する御許山（神宮では「大元山」と書く）のこと。個人サイト「戸原のトップページ」の

「社寺巡拝記」の「[宇佐の原信仰／御許山（三女神降臨伝承）](#)」

によると、これは八幡宇佐宮の元宮という意味を含み、久女の述べているように三女神降臨の伝承があり、山頂に三女神が依代として降臨したとする三個の立石から成る磐座があるという（現在の頂上部は禁足地となっていて実見不能）。『資料によれば、中央の石が最も大きく高さ一丈五尺』（約四・五メートル）『の烏帽子型、右の石はこれに次ぐ大きさで形はほぼ同じ、左の石は高さ四尺』（約一・二メートル）と有意に『小さく、人の手が加えられた痕跡があるという』とある。

・「鎮疫祭」「ちんえきさい」と読み、「御心経会」とも呼ぶ。

[公式サイト](#)によれば、二月十三日に宇佐神宮で行われる大祭。

疫病災禍を祓い鎮める祭で、『前日の宵祭、当日の本殿祭に続

き八坂神社前で祭典が行われ、『幣越神事・陵王の舞・鳩替神事があり』『境内に浄火が焚かれ、古神札を焼納』するとある。

・「蘭陵納蘇利のつけます二つの面」坂本氏の「杉田久女」に、

『なそり納蘇利の面はりようろう蘭陵の面ともに池畔の宝物館に展示してある。これは龍を象かたどったインド系の雅楽面で、鎌倉時代の作とされる。盛る句飛び出した大きな眼、吊り顎、白い牙をもち、深い皺は刻まれていて、おおらかなユーモアをたたえた表情である。全体に黒に近いくすんだ色で、目の周囲などに朱が残っている』とし、句の『青丹とは染料や画材に用いる青黒い土』と注されておられる。[グーグル画像検索「納蘇利」](#)。

なお、坂本宮尾氏はこれら五句について、「杉田久女」で特に「宇佐神宮五句」という章を設け、諸家の評とともに美事な評釈をなさっておられるので是非お読み戴きたい（一一八―一二二頁）。坂本氏は最後に、これらの五句は『久女の俳句が、日常を抜けてはるか古代の浪漫の世界へ突き抜けたことを示す記念すべき作品群といえる』と讃えておられる。蓋し、名評である。』

昌子歸省 二句

元旦の阜頭に瀬戸の舟つけり

北風寒き阜頭に吾子の舟つけり

「やぶちゃん注…昭和八（一九三三）年年初。長女昌子の帰省の折りの句。前に注したように、この前年の昭和七年八月に長女昌子は横浜税関監視部長中村重善氏夫妻の世話で同税関長官房文書係雇として就職していた。」

花の旅 六句

まだ散らぬ帝都の花を見に來り

「やぶちゃん注…以下六句は角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」では昭和八（一九三三）年のパートにあるが、富士見書房平成一五（二〇〇三）年刊の坂本宮尾「杉田久女」によれば、総て翌九年の四月の句である。同書の一四七～一四八頁に載る草稿メモによれば、四月十七日に東上、同月二

十八日に東京を出立とあり、その間は横浜の長女昌子の山王寮に滞在している（以下の注もそのメモによる）。それによると、この句は四月十八日に昌子とともに『ホトトギス』発行所に高浜虚子を訪問した、その日の詠である。」

茅舎庵

訪れて暮春の隣にあるこゝろ

「やぶちゃん注：四月二十五日に大田区池上の俳人川端茅舎を訪れた際の句（二十七日にも昌子とともに再訪している）。この年に彼は『ホトトギス』同人となっている。当時、茅舎は三十七歳（久女は四十四歳）であつた。茅舎はこの七年後、肺結核のために亡くなった。」

鎌倉虚子庵

虚子留守の鎌倉に來て春惜む

「やぶちゃん注：草稿メモによれば四月二十六日の訪問である。」

無論、句集序文の懇請のためであるが、虚子はすでにこの時、久女を疎んじていた。この不在も確信犯であろう。」

由比ヶ濱

身の上の相似でうれし櫻貝

「やぶちゃん注…同四月二十六日。久女はこの比較主体は虚子の長女星野立子（明治三六（一九〇三）年～昭和五九（一九八四）年）である。虚子が留守であったことから、同じ鎌倉に住んでいた立子を訪ない、ともに由比ヶ浜を散策した。その際の句である。立子は昭和五（一九三〇）年に父虚子の後ろ盾によって初の女性による主宰誌『玉藻』を創刊しており、虚子にとって久女はある意味で目の上のたんこぶの存在であったと考えてよい。それが虚子の久女忌避の核心にあったのだと私は信じて疑わない。この句は後に出るように実は草稿では、

身の上の相似てうれし櫻貝

という真逆の句であった。宮本氏によれば、草稿は『最初は「似

て」とあったものを、上から「似で」と濃く墨で直してある』とある。しかも余白には『朱筆で窮屈に小さな字で書き込みがあ』り、それは『「立子などと似てたまらないよ」と読める』という驚天動地の記載があるとする（「杉田久女」二二八～二二九頁）。この追記は後のものと思われるが、情念の人久女の、親の七光りの立子に対する、強烈な妬心がもろに出ていて読む者を震撼させる。」

種浸す大盥にも花散らす

「やぶちゃん注…草稿の同じ鎌倉訪問の四月二十六日の条に、前の「身の上の相似てうれし櫻貝」（「て」である）と並べて、

種浸す大盥にも花數片

とある句の再案であろう。この後、草稿メモによれば同二十六日には水原秋桜子に面会もしている。」

茅舎庵

水そゝぐ姫龍膽に暇乞ひ

「やぶちゃん注…四月二十七日。草稿メモには、この句の草稿と思われる、

水そゝぐ姫りんどうにいとま乞ひ

（「りんどう」はママ）とある。

因みに、宮本氏によれば、この草稿メモの東京を失意のうちに発った四月二十八日の条の余白には、やはり後日に書き記したと思しい、

この時久女の句集出版の邪マせし者は何人か。何かハワカつてゐる。

という恐るべき朱筆（！）の書き込みがなされているとある！」

横濱外人墓地 一句

ばら薫るマーブルの碑に哀詩あり

筑前大島 十二句

大島の港はくらし夜光蟲

濤青く藻に打ち上げし夜光蟲

足もとに走せよる潮も夜光蟲

夜光蟲古鏡の如く漂へる

海松^みかけし蟹^るの戸ぼそも星祭

「やぶちゃん注…坂本宮尾氏は「杉田久女」で、『この句の中七は「ホトトギス」（昭和9・9）、久女の草稿、いずれも「蟹の戸ぼそ」となっている。句集に「蟹の戸ぼそ」とあるのは蟹^{かに}の戸ぼそ」となっている。句集に「蟹の戸ぼそ」とあるのは蟹^{かに}と蟹^{あま}という文字の形が似ているために植字段階で生じた

間違いではないだろうか』と述べておられ、私もそれを支持するものである。以下に正しい句形を読みを附して示しておく。

海松^みかけし蟹^{あま}の戸^まぼそも星祭

実は当初、海産無脊椎動物フリークの私は、真顔で、砂蟹などの巢の入り口に海松が懸っているのを擬人化したのだな、などと独り合点して読んでいたことを告白しておく。」

大島星の宮吟咏

下りたちて天の河原に櫛梳り

彦星の祠は愛しなの木蔭

「やぶちゃん注…坂本宮尾氏は「杉田久女」で、本句について、『まず「愛^{かな}し」と読んで、それにつづく「な」は「何^な」ととつて、「祠^{ひら}には深く心を惹かれるか、いったいこれは何の木の陰であろうか」という意味と解釈しておく。木陰にある彦星の祠を見つけた作者の気分の高揚が伝わってくる』と鑑賞されてい

る。穏当なところであろう。私は『高揚』というより、年に一度、盃の面を介してしか語り合えぬ貴公子（彦星）への強い愛惜の思いを詠んだものと思う。」

口すゝぐ天の眞名井は葛がくれ

玄界灘一望の中にあり

荒れ初めし社前の灘や星祀る

大波のうねりもやみぬ沖膾

星の衣^{きぬ}吊すもあはれ島の娘ら

星の衣は七夕の五色の紙を

衣の形に切り願事をしるして

笹に吊すもの

乗りすゝむ舳にこそ騒げ月の潮

「やぶちゃん注：これらは底本年譜で、昭和八（一九三三）年

の八月末に、響灘と玄界灘の境界部に面する現在の福岡県宗像市に属する筑前大島のほしの宮の七夕祭りに詣でており、その折りの吟詠と考えてよい。この年の旧暦の七月七日は八月二十七日であつた。この島の中央部にある最高峰の御嶽（標高二百二十四メートル）の山頂には宗像大社中津宮の奥の院に当る御嶽神社がある。この山の麓の丘の上にある中津宮（船着き場近くでもある）には宗像三女神が生まれたという伝承を持つ天の真名井があるが、同時にここは本邦での七夕伝説発祥の地としても知られる。宗像大社公式サイトの「[夏のまつり](#)」によれば、ここでの七夕祭は古く、鎌倉時代から行われており、宗像大社中津宮の境内に流れる「天の川」を挟んで牽牛神社と織女神社が祀られており、現在では旧暦の七月七日に近い八月七日に島内で盛大に七夕祭りが行われる、とある。そこにある「筑前大島天の川伝説」や坂本宮尾氏の「杉田久女」にある同伝説によれば――昔、貴公子が唐の国に遣いし、何人かの唐人の織女を伴って帰国の途次、その内の一人と深い愛し合ったが、それは果敢ない仮初の縁でしかなく、帰国するや、貴公子は無論、都に戻ってしまい離ればなれとなった。織女を忘れられぬ貴公子は鬱々と日を過ごしていたが、ある夜、夢枕に天女が現われ、この筑前大島の中津宮に行けと告げる。来職を擲った貴公子は

その中津宮の神官となった。ある星の美し晩、「天の川」に盥たらいを
浮かべて禊みそぎをしていると、その盥たらいの中の水の面に織女が映つて
いた。二人はそうして秘かに二人きりの逢瀬を楽しんだという。
――」

母の句 五句

八十の母てまめさよ雛づくり

母淋しつくりためたる押繪雛

娘をたよる八十路の母よ雛作り

扶助料のありて長壽や置炬燵

雛つくる老のかごとも慰めり

「やぶちゃん注：昭和一〇（一九三五）年の久女四十五歳の折
りの句群。久女の母さよは三十六歳の時に久女を生んでいる
（久女は明治二三（一八九〇）年五月三十日生まれ）かた、当

時は満八十一。兵庫県出石^{いすし}の出身で、坂本宮尾氏は「杉田久女」で、さよは『龍生派池之坊の稼働教授』で、『赤龍軒美玉と号し、最高職の関西家代理として八十八歳まで現役を務めた人だ』という。久女も華道、茶道、書道の心得があった』と記しておられる。母さよは戦局の悪化する昭和十九年七月に亡くなっている。因みに、この時の葬儀で上阪したのが、長女昌子が逢った最後となった旨の記載が年譜にある（久女の逝去は昭和二十一年一月二十一日）。」

出雲旅行 四十三句

「やぶちゃん注…角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」によれば、昭和一〇（一九三五）年のことであるが、年譜には載らない。」

一 出雲御本社

水手洗の杓の柄青し初詣

雪解の雫ひまなし初詣

仰ぎ見る大々飾出雲さび

巨いさや雀の出入る々飾

神前に遊ぶ雀も出雲がほ

椿落ちず神代に還る心なし

斐伊川のつゝみの蘆芽雪残る

斐伊川のつゝみの蘆芽萌え初めし

二 穴道湖（松江大橋）

蘆芽ぐむ古江の橋をわたりけり

蘆の芽に上げ潮ぬるみ満ち來たり

上げ潮におさるゝ雑魚蘆の角

若蘆にうたかた堰を逆ながれ

三 美保關に向ふ途中

目の下に霞み初めたる湖上かな

立春の輝く潮に船行けり

春潮の上に大山雲をかつぎ

若刈干す美保關へと船つけり

四 日の見磯に至る途上風景絶好

群岩に上るしぶきも春めけり

潮碧しわかめ刈る舟木の葉の如し

「やぶちゃん注」：「日の見磯」前後の句から考えて、日御碕ひのみさきの

ことと思われる。私は不遜にも出雲に行ったことがないので、[ウィキの「日御碕」](#)から引用する。『島根県出雲市大社町日御碕に位置し、島根半島のほぼ西端で日本海に面する岬』で、『大山隠岐国立公園に含まれる』。『流紋岩から構成される山が沈降して海に浸かり、波に侵食された後にわずかに隆起し「海食台」と呼ばれる地形が形成された』。『周辺には柱状節理や洞穴が見られ、海上には小島や岩礁が点在する』。『海底にはサドガセとボングイと呼ばれる岩があり、人工的に彫られた階段や参道、祭祀跡が確認されている。これは沖縄県の南城市にある世界遺産斎場御嶽に似ているといわれ天照大神の神話によく似た神話が斎場御嶽に伝わっている。岬上には『明治三六（一九〇三）年初点灯の『出雲日御碕燈台が立つ』。この灯台は海拔六十三メートルに位置し、光達距離二十一海里（三十八・八九二キロメートル）、灯塔四十三・六五メートルと『石作りの灯台としては日本一の高さを誇り、また白亜の姿が美しい。参観灯台なので見学も可能である』。『日御碕駐車場近くには商店街があり、いか焼き、ソフトクリームなどの飲食店や土産店がある。季節にもよるが、「天日干し」のカレイやノドグロなどの干物も売っている』。『「日御碕の大ソテツ」及び南方に浮かぶ経島の「経島ウミネコ繁殖地」は、国の天然記念物』である。久女が辿つ

たと思われる島根県道二十九号大社日御碕線についても、『出雲大社（出雲市大社町杵築東）と日御碕を結ぶ海沿いの道。冬は、海が時化する（しける）と「潮被り」の道となり、安全に冬の日本海を体感できるコースとなっている。晴れると、出雲神話の舞台である、稲佐の浜や三瓶山が見渡せる。カーブが非常に多く急峻な場所も目立つ。トンネル等の付け替えにより路線改良は行われているが、現在でも時折、荒天等を原因とする法面等の崩落が起こりやすく、その度に交通規制が発生する場合があるので、走行には十分に注意されたい』とある。」

五 出雲神話をよめる。稲佐の濱

群岩に春潮しぶき鱗いかる

鰐偽の兎神も援けず東風つよし

春潮の渚に神の國譲り

「やぶちゃん注…「稲佐の濱」は「いなさのはま」と読み、島

根県出雲市大社町にある砂浜海岸である。[ウィキの「稲佐の浜」](#)

によれば、『国譲り神話の舞台でもあり、「伊那佐の小濱」(『古事記』、「五十田狭の小汀」(『日本書紀』)などの名がみえる。また稲佐の浜から南へ続く島根半島西部の海岸は「菰の長浜(園の長浜)」と呼ばれ、『出雲国風土記』に記載された「国引き神話」においては、島根半島と佐比売山(三瓶山)とをつなぐ綱であるとされている』とあり、ここでは出雲大社の神事である神幸祭(八月十四日)と神迎祭(旧暦十月十日)が行われる、とある。以下、周辺の名跡として弁天島(稲佐の浜の中心にある。かつては弁才天を祀っていたが、現在は豊玉毘古命を祀る)・塩搔島しおかきしま(神幸祭に於いてはこの島で塩を汲み、搔いた塩を出雲大社に供える)・屏風岩(大国主神と建御雷神がこの岩陰で国譲りの協議を行ったといわれる)・つぶて岩(国譲りの際、建御名方神と建御雷神が力比べをし、稲佐の浜から投げ合った岩が積み重なったといわれる)を挙げてある。久女が詠んでいる知られた「稲羽の白兔」伝説との関連は書かれておらず、ウイキの「因幡の白兔」にも稲佐の浜は出ないが、如何にもそれらしい名でもあるので調べてみると、mlsenyou 氏のブログ「橙色の豚く旅と株と共に去りぬ」の「稲佐の浜(稲狭の浜)」国譲りの伝説と古代史」に、『ちなみに、稲佐の浜は稲羽(因幡)の白兔の伝説の場所でもある。因幡の白兔の話は、

白兔がワニを騙したせいでひどい目にあつたというものだが、その後日談として、大国主は白兔を助けている』とある。」

稻佐の濱國讓りの故事——高天原から天孫
降臨の爲、この濱で出雲族と國讓りの議に
ついて神々相會し、遂に亂を好まぬ大國主
命は賢明にも國土を全部獻上。その爲、天
照大神大いに喜び給ひ、御子を出雲につか
はし、大國主の宮を造營して仕へせしめ給
ふとある。

椿咲く絶壁の底潮碧く

春潮に眞砂ま白し神ぞ逢ふ

春潮からし鰐偽のむくいに泣く兎

潮浴びて泣き出す兎赤裸

兎かなし蒲の穂絮の甲斐もなく

「やぶちゃん注…「穂絮」は「ほわた」。」

春潮に神も怒れり 歸偽兎

春寒し見離されたる雪兎

ゆるゆると登れば成就椿坂

「やぶちゃん注…「椿坂」は固有名詞ではないと思われる。」

雪兎援けず潮にわがそだつ

「やぶちゃん注…この一句、連想の感懷ながら、私は掬すべき佳句と感ずる。」

六 小泉八雲の舊居

春寒み八雲舊居は見ずしまひ

燈臺のまたたき滋し壺焼屋

「やぶちゃん注…島根県松江市北堀町にある。中海・宍道湖・大山圏域観光連携事業推進協議会公式サイト「山陰」の「[小泉八雲旧居（ヘルン旧居）](#)」を参照されたい。「壺焼屋」の「壺焼」は栄螺の壺焼きのことと思われる。ネットを管見すると当地の名物であることが分かる。」

七 出雲御本社寶物

春光や塗美しき玉櫛屋

八 八重垣神社

處女美し連理の椿髪に挿頭し

「やぶちゃん注…島根県松江市佐草町にある神社で、ここには現在も二股の根をした連理玉椿（夫婦椿）がある。大木浩士氏のサイト「ぶらり神社めぐり」の「[八重垣神社](#)」の写真が二股の根をよく写しておられる。」

九 境内に鏡の池

みづら結ふ神代の春の水鏡

日表の蒼も堅しこの椿

椿濃し神代の春の御姿

春の旅子らの齋もいそぐまじ

「やぶちゃん注…[ウィキの「八重垣神社」](#)に、『「鏡の池」は稲田姫命が、スサノオノミコトに勧められ、この社でヤマタノオロチから身を隠している間、鏡代わりに姿を映したと伝えられるもので、良縁占い（銭占い）が行われる。社務所で売られている薄い半紙の中央に、小銭を乗せて池に浮かべると、お告げの文字が浮かぶという手法。紙が遠くの方へ流れていけば、遠くの人と縁があり、早く沈めば、早く縁づくといわれ』、『また、紙の上をイモリが横切って泳いでいくと、大変な吉縁に恵まれるという』とあるが、哀しいかな、一九七〇年代頃、『この「鏡

の池」に賽銭泥棒が出没して以来、池の底には目の大きめな金網が張られるようになってしまったともある。これ、世の末の鏡ならむや……」

十 出雲八重垣

神代より變らぬ道ぞ紅椿

節分の丑満詣降られずに

「やぶちゃん注…「節分の丑満詣」というような仕来りは少なくとも現在は行われていないようである（ネット検索に拠る）。これは後の句に「夜汽車」とあり、出雲の旅の最後で、たまたま深夜の参拝（前の句群は明らかに昼景であるから、出雲出立の最後に再拝したものかと思われる）となったことを言っているものか。識者の御教授を乞う。」

東風吹くや八重垣なせる舊家の門_と

煖房に汗ばむ夜汽車神詣

筑紫觀世音寺三句外九句

さゝげもつ菊みそなはせ觀世音

菊の香のくらき佛に灯を獻ず

月光にこだます鐘をつきにけり

かゞみ折る野菊つゆけし都府樓址

道ひろし野菊もつまず歩みけり

こもり居の門邊の菊も時雨さび

菊の簇れ落葉をかぶり亂れ伏す

簇れ伏して露いつぱいの小菊かな

遂にこぬ晚餐菊にはじめけり

菊根分誰ぞわが鰻を使ひ失す

菊の根に降りこぼれ敷く松葉かな

日の菊に雫振り梳く濡毛かな

「やぶちゃん注：昭和九（一九三四）年秋に福岡県太宰府市にある観世音寺（「続日本紀」の記述によれば天智天皇が母斉明天皇（六六一年没）追善のために発願した寺であったが、完成したのは発願から約八十年も経った天平一八（七四六）年のこととされる。ここはウイキの「観世音寺」に拠る）及び「都府楼趾」を訪れた。ここは大伴旅人・山上憶良・観世音寺別当沙弥満誓らが集った筑紫万葉歌壇の舞台であった（坂本宮尾氏の「杉田久女」（一三七頁）の記載を参照した）。」

飛鳥みち

稻架の飛鳥みちなり語りつゝ

「やぶちゃん注…「稻架」は「いねかけ／いなかけ」と素直に読んでいるようである。稻架は「はさ」「はざ」（挟むの意）とも読んで秋の季語である。」

大和橘寺の鐘樓所見

つらね干す簷の橘まだ青く

「やぶちゃん注…「橘寺」は「たちばなでら」と読み、奈良県高市郡明日香村にある天台宗寺院。正式には「仏頭山上宮皇院菩提寺」と称し、本尊は聖徳太子・如意輪観音。橘寺という名は垂仁天皇の命により不老不死の果物を取りに行つた田道間守^{たちまもり}が持ち帰つた橘の実を植えたことに由来する。『橘寺の付近には聖徳太子が誕生したとされる場所があり、寺院は聖徳太子建立七大寺の』一つとされている。『太子が父用明天皇の別宮を寺に改めたのが始まりと伝わる。史実としては、橘寺の創建年代は不明で』。「日本書紀」天武天皇九（六八〇）年四月の条に、『「橘寺尼房失火、以焚十房」（橘寺の尼房で火災があり、十房を焼いた）とあるのが文献上の初見である。』『皇族・貴族の庇護を受けて栄えたが、鎌倉期以降は徐々に衰え』、現

存する建物は江戸期に徐々に再建されたものである（[ウィキの「橘寺」](#)に拠る）。

國寶信貴山藥起繪卷源氏車爭之圖

争へる牛車も人も春霞

「やぶちゃん注：前書の前者は国宝で奈良県生駒郡平群町の朝護孫子寺蔵で現在、奈良博物館寄託のそれであるが、後者は複数あるが、これは底本「補遺」の昭和一二（一九三七）年のパートに、

山樂源氏物語屏風

争へる牛車も宮も春がすみ

と載り、その二つ後に、

信貴山縁起繪卷

百獸の戲畫おもしろしことに秋

とあることから、現在、重要文化財指定の狩野山楽筆「紙本著色車争図」（現東京国立博物館蔵）であることが分かる（角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」では、「争へる牛車も人も春霞」が昭和十年のパートに載るが、これは昭和十二年の方が正しいものと思われる。同句集は同定年代にかなりの誤りが認められるからである）。句は「源氏車争之圖」のみを扱っているが、この「補遺」から実際には久女は「百獸の」の句をペアで出すつもりだったものを誤って落としたものか、若しくはそれを捨てたのを前書のみうつかりそのままにして出したものかも知れない。」

清朝翡翠香爐

春怨の麗妃が焚ける香煙はも

抱一四季花鳥繪卷極彩色

花鳥美し葡萄はうるみ菖蒲濃く

「やぶちゃん注…これは酒井抱一筆「四季花鳥図巻」であろう。

国立博物館公式サイト内のブログ記事、[絵画・彫刻室研究員本](#)

[田光子氏の『五感で味わう酒井抱一筆「四季花鳥図巻」』](#)がお薦め。」

旅かなし 九句

歇むまじき藤の雨なり旅疲れ

「やぶちゃん注…老婆心乍ら、「歇むまじき」は「やむまじき」でどうにも降り終んでくれそうにもない雨であることを言っている。」

蕨餅たうべ乍らの雨宿り

くちすゝぐ古き井筒のゆすら梅

わが袖にまつはる鹿も竹柏の雨

「やぶちゃん注…「竹柏」は「なぎ」と読む。 榔^{なぎ}。 古来、神木とされる裸子植物門マツ綱マツ目マキ科ナギ *Nageia nagi* のこと。奈良公園に接する春日大社のナギ樹林は大正一二（一九二三）年に天然記念物に指定されている。厄災除けや縁結びとして葉が用いられ、その葉を滴る雨が久女の「袖にまつはる鹿」（ここはイメージとしては牡鹿でありたい）、その鹿と久女の両方に雨が榔から滴る雨が「まつはる」というループを見逃してはならぬ。」

公園の馬酔木愛しく盞にふれ

拜殿の下に生れゐし子鹿かな

鹿の子の生れて間なき背の斑かな

旅かなし馬酔木の雨にはぐれ鹿

旅衣春ゆく雨にぬるゝまゝ

菊ヶ丘（昭和十年より昭和二十一年まで）

「やぶちゃん注…「菊ヶ丘」久女は昭和六（一九三一）年四月に、大正七（一九一八）年八月より住んでいた当時の小倉市堺町から同市富野菊ヶ丘（現在の福岡県北九州市小倉北区上富野）に転居していた。」

大いなる春の月あり山の肩

春暁の大火事ありしかの煙

春寒の樹影遠ざけ庭歩み

庭石にかゝれば木影春寒み

新らしき春の袷に襟かけん

新調の久留米は着よし春の襟

春の襟かへて着そめし久留米かな

花も實もありてうるはし春裕

春の風邪癒えて外出も快く

戀猫を一步も入れぬ夜の襖

冬去りて春が来るてふ木肌の香

土濡れて久女の庭に芽ぐむもの

「やぶちゃん注…本名を詠み込んで格調を維持出来るのは久女以外にはおるまい。」

故里の小庭の堇子に見せむ

ほろ苦き戀の味なり露の臺

落の臺摘み來し汝と争はず

移植して白たんぽぽはかく殖えぬ

空襲の灯を消しおくれ花の寺

近隣の花見て家事にいそしめる

掘りすてゝ沈丁花とも知らざりし

船客涼し朝潮の鳴る舳に立てば

羈涼し汝の殻をぬぎしより

「やぶちゃん注…私の好きな一句。」

この頃は仇も守らず羈涼し

羅の乙女は笑まし腋を剃る

「やぶちゃん注…私の好きな一句。」

壇浦見渡す日覆まかせけり

日覆かげまぶしき潮の流れをり

おびき出す砂糖の蟻の黒だかり

「やぶちゃん注…私の好きな一句。」

植ゑかへし薔薇の新芽のしほれたる

英彦より採り來し小百合蒼むなり

冷水をしたたか浴びせ躑躅活け

實梅もぐ最も高き枝にのり

目につきし毛蟲援けずころしやる

鍬入れて豆蒔く土をほぐすなり

千萬の寶にたぐひ初トマト

處女の齒のほふが如し熟れトマト

母美しトマトつくりに面瀬せず

朝に灌ぎ夕べに肥し花トマト

降り足りし雨に育ちぬ花トマト

新鮮なトマト喰ふなり慾もあり

この雨に豆種もみな擡頭す

「やぶちゃん注…「擡頭」老婆心乍ら、「たいとう」で台頭に同じい。頭を持ち上げて伸びること。」

朝な朝な摘む夏ぐみは鈴成に

「やぶちゃん注…底本では「朝な朝な」の後半は踊り字「へ」。

青芒こゝに歩みを返しつゝ

たてとほす男嫌ひの單帶

「やぶちゃん注…私の好きな一句。」

張りとはす女の意地や藍ゆかた

秋耕の老爺に子らは出で征ける

鳥渡る雲の笹べり金色に

菱實る遠賀にも行かずこの頃は

「やぶちゃん注…前にも注したが、「遠賀」は古称で「おが」と読んでいよう。」

菊の句も詠まずこの頃健かに

雲間より降り注ぐ日は菊畠に

龍胆も鯨も齒むわが双手

「やぶちゃん注…私の好きな一句。」

解けそめてますほは風にせ高けれ

「やぶちゃん注…「ますほ」真赭^{まそお}。赤い色の意で、ここは「ますほの薄^{すす}」の意。」

蔓ひけばこぼるゝ珠や冬莓

上京、丸ビルにて

一束の緋薔薇貧者の誠より

「やぶちゃん注…坂本宮尾氏は本句について「杉田久女」で以

下のように記されておられる。少し長いが、久女の衝撃と非常に重要な転機の動機を明かす部分でもあるので敢えて引用させて戴く。

《引用開始》

「俳句研究」の昭和十四年七月号「プラタナスと苺」のなかの句である。丸ビルはもちろん「ホトトギス」の発行所である。虚子は箱根丸での渡仏の折が久女に会った最後と記しているから、薔薇の花束を抱えて発行所を訪れた久女は虚子に会うことができなかった。この上京で久女は同人復帰の可能性も、虚子の序文も絶望的であるということをはつきりと悟ったと思われる。

帰宅後すぐに久女は、「プラタナスと苺」四十二句をまとめた。宇佐神宮、大島星の宮、野鶴の句などと比べるまでもなく、これらの句にもはや全盛期の久女の力がなかったことはすでに見たとおりである。そのことを誰よりもよくわかっていたのは、久女自身であったはずだ。

追い打ちをかけるように、長谷川かな女主宰の「水明」八月号（八月一日発行）に「水明十周年記念行事」の社告が載った。行事のひとつとして「先生の今日までに至る作品の内から代表的の佳品を選つて凡そ八百句を句集に致します。用紙も先年購

入してありますので、純日本紙で相当立派なものを出すつもりであります。九月中に出版の予定です」とある。「水明」は長いつきあいの久女のもとにも送られていたはずだ。かつて「東のかな女、西の久女」と並び称されたかな女の豪華句集刊行の予告は、句集出版を熱望して叶わなかった久女にはつらいものであつたに違いない。

上京して虚子との関係修復が望めないことを確認し、自身の作句力が衰えて句が輝きを失ってしまったことを実感し、さらにはかな女の句集出版予定の知らせが届いたことは、久女に筆を折らせるに十分な打撃であつたと思う。

《引用終了》

久女の絶望が如何に深いものであつたか、察するに余りあり、また坂本氏のこうした事実背景を知らずに本句に現われた真の久女の心の痛みを理解することは到底出来ない。」

歸宅 三句

去年よりあまた實をもちプラタナス

プラタナス多く實をもち芽ぐむなる

仰ぎ見る吾に鈴懸恵むなり

大乘寺 十句

一椀の餉にあたゝまり梅雨の寺

實桑もぐ乙女の朱唇戀知らず

旅に出て病むこともなし栗の花

栗の花うごけば晴れぬ窓の富士

栗の花そよげば箱根天霧らし

かなかなに醒めて涼し午前四時

「やぶちゃん注」「かなかな」の後半は底本では踊り字「へ」。

雲海の夕富士あかし帆の上に

ヨット見る白樺かげの椅子涼し

草の名もきかず佇み苑の夏

苔庭をはくこともあり梅みのる

「やぶちゃん注…「大乘寺」坂本宮尾氏の「杉田久女」の一六一頁に、「栗の花そよげば箱根天霧らし」と「かなかなに醒めて涼し午前四時」が掲げられて、『俳句研究』昭和一〇（一九三五）年九月号の「富士と旅人」十句の中の二句とあり、さらに『これは蘇峰の山中湖畔の別荘を訪れた折の吟であろう』と推測されておられる。大乘寺という寺は山梨県内に複数あるが、山中湖に近いそれとなると静岡県御殿場市仁杉（ひとすぎ）地区にある浄土宗のそれか。国道百三十八号沿いで、山中湖からは道なりで十四キロメートルほど離れている（由緒などは浄土宗公式サイトの「[廣智山大乘寺](#)」を参照されたい）。しかしこの寺からヨットが見えるというのは地図上からは位置的に無理がある。同定が正しいか、識者の御教授を乞う。」

山中湖 七句

漕ぎ出でゝ倒富士見えず水馬

「やぶちゃん注：「倒富士」は「さかさふじ」、「水馬」「あめんぼう」と訓じていよう。」

栗の花紙縋の如し雨雫

おくれゆく湖畔はたのし常山木折る

「やぶちゃん注：「常山木」シソ目シソ科クサギ *Clerodendrum trichotomum*。臭木（葉に悪臭があることに由来）。常山木という表記については、栗田子郎氏のサイト「草と木と花の博物誌」の「[野の花便り「夏」](#)」の「クサギ」に、平安時代に中国産の常山^{トウサン}Ⅱジョウサンアジサイ（ユキノシタ目ユキノシタ科或いはバラ目アジサイ科の *Dichroa febrifuga*。正式和名はジョウザン）をクサギと混同して以来の誤用である旨の解説が出る。」

柿吊す湖畔の茶店淵に映え

湖ぞひの道ながながと小春風

「やぶちゃん注」…「ながなが」の後半は底本では踊り字「へ」。

うねりふす伏屋の菊も明治節

「やぶちゃん注」…老婆心乍ら、「伏屋」は「ふせや」で低い小さな家。粗末なみすぼらしい家の謂いで、「明治節」は明治天皇の誕生日。現在の十月三日の「文化の日」。

雨つよし辨慶草も土に伏し

「やぶちゃん注」…「辨慶草」ユキノシタ目ベンケイソウ科ムラサキベンケイソウ属ベンケイソウ *Hylotelephium erythrostictum*。山地の日当たりの良い草地に生え、高さは三〇〜八〇センチメートル、葉は卵形から楕円形で対生又は互生し、縁には疎らに鋸齒がある。九月〜十月頃に茎頂に複散房花序を出し、淡い紅色の花を咲かせる（以上は「Weblio 辞書」

の「植物図鑑」の「[べんけいそう（弁慶草）](#)」に拠った。リン
ク先には花の写真もある」

墓参 六句

信濃なる父のみ墓に草むしり

城山の桑の道照る墓参かな

母屋から運ぶ夕餉や栗の花

厨裡ひろし四眠ごろなる蠶飼ふ

「やぶちゃん注…「四眠」通常の蚕の最後の四回目の脱皮から
繭を作る時期を指す。」

繭を煮る工女美しやぶにらみ

ゆるやかにさそふ水あり茄子の馬

「やぶちゃん注…角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」では昭和一〇（一九三五）年以後のパートにある（父廉蔵は大正七（一九一八）年十二月七日に脳溢血で逝去している。彼は長野県松本市宮淵の出身であった。」

松本にて 二句

健やかな吾子と相見る登山驛

高嶺星出てうれし明日登山

英彦山雑吟 百十二句（昭和十二年）

神前の雨洩りかしこ秋の宮

上宮は時じく霧ぞむら紅葉

上宮は雨もよひなり柿の花

谿水を擔ひ登ればほとゝぎす

橡の實や彦山も奥なる天狗茶屋

絶壁に擬寶珠咲きむれ岩襖

色づきし梢の柚より山の秋

よぢ登る上宮道のほとゝぎす

わが攀づる高嶺の花を家づとに

霧淡し彌宜が掃きよる崖紅葉

坊毎に懸けし高樋よ葛の花

花葛の谿より走る笥かな

幣たてゝ彦山踊月の出に

「やぶちゃん注」 「彦山踊」 英彦山山開き前夜祭に行われる彦

山踊りか。[monogusaa3 氏の動画をリンクしておく。](#)」

初雪の久住と相見えて高嶺茶屋

蕎麥蒔くと英彦の外山を焼く火見ゆ

北岳にて 三句

はりつける岩ちしや菫採の命綱

岩菫の花を揚げば巖雫

岩菫の花紫に可憐なる

「やぶちゃん注…標高一一九二メートル。個人サイト「九州・大分附近の楽しい山ある記」の「[英彦山 北岳](#)」が素晴らしいので参照されたいが、結構、ハードである。ここを和装の久女が登るさまは、想像しただけで私は惹かれる。リンク先では岩菫（イワタバコ。後注参照）の写真も見られる。

「岩菫」キク亜綱ゴマノハグサ目イワタバコ科イワタバコ

Conandron ramondioides の別名。湿った岩壁に着生し、花が美しく、山草として栽培もされる。和名は葉がタバコに似ることに由来。若葉は食用にもなる。[グーグル画像検索](#)

「[Conandron ramondioides](#)」。

彦山辨天岩

美しき神蛇見えたり草の花

「やぶちゃん注：個人サイト「[kiyo](#)のきまぐれ山歩き」の「[檜原山](#)」（英彦山六峰の一つ）の一番下の左に写真がある。」

ごそごそと逃げゆく蛇や蕨刈

「やぶちゃん注：「ごそごそ」の後半は底本では踊り字「へ」。

手習の肩も凝らざる日永かな

彦山の早蕨太し萱まじり

筆とりて肩いたみなし著^{しや}莪^がの花

汚れゐる手にふれさせずセルの膝

春服の子にさはらず歩み去る

豊原氏より墨を戴く

石楠花によき墨とゞき機嫌よし

「やぶちゃん注…「豊原氏」不詳。」

全山の木の芽かんばし萌え競ひ

豊前坊

仰ぎ見る樹齡いくばくぞ枿の花

「やぶちゃん注…「豊前坊」[既注](#)。」

奉納のしやもじ新らし杉の花

英彦山九大研究所 八句

捕蟲器に伏せたる蝶は蛇の目蝶

捕蟲器に伏せ薊の蝶白し

蝶の名をきゝつゝ午後の研究所

芋蟲ときゝて厭はし黒揚羽

芋蟲ときいて戀さむ蝶もあり

捉へたる蜻蛉を放ちやりにけり

捕らまへて扶けやる蝶の命あり

葵つむ法親王の屋敷趾

「やぶちゃん注…「英彦山九大研究所」九州大学附属彦山生物学研究所。久女が訪れたこの前年の昭和一一（一九三六）年十月二十日に設置されている（現在名は九州大学農学部附属彦山生物学実験所）。

「法親王の屋敷趾」「[英彦山観光ガイドブック](#)」（PDFファイル）に、元弘三（一二三三）年、後伏見天皇第六皇子助有法親王が座主として迎えられて彦山山伏を統轄するようになった（この時から輪番制座主から世襲制座主となったとある）。城壁を思わせる石垣と黒門跡が残り、池泉鑑賞式庭園は桃山期の作とある。現在は旧座主院庭園として生物学実験所が管理しており、拝観には予約が必要。ほあぐら氏の「ほあぐらの美の世界紀行」の「[九州地方の庭園](#)」に写真と簡単な解説が載る。」

天碧し青葉若葉の高嶺づたひ

六助の碑に戀もなし笹粽

「やぶちゃん注…「六助の碑」「六助」は加藤清正に従った武将毛谷村六助。[既注](#)。本句はリンク先の最後に注したおいた六助と論介の伝承に基づく感懷である。」

北岳を攀ち降りるなり岩躑躅

雉子

愛しさよ雉子の玉子を手にとりて

奪られたる玉子かなしめ雉子の妻

雉子かなし生みし玉子を吾にとられ

雉子たちし草分け見ればこの玉子

雉子鳴くや都にある子思ふとき

雉子の妻驚ろかしたる蕨刈

今たちし雉子の卵子を奪り來たり

杉の月佛法僧と三聲づゝ

若葉濃し雨後の散歩の快く

つなぎ牛遠ざけ歩む蓮華かな

南へは降りず躑躅を眺めけり

杉くらし佛法僧を目のあたり

奉幣殿にて 一句外

疑ふな神の眞榊風薫る

病快し雨後の散歩の若葉かげ

杖ついて誰を待つなる日永人

平凡の長壽願はずまむし酒

物言ふも逢ふもいやなり坂若葉

會釋して通る里人蕨摘む

先生に逢うて蕨を分け入れし

焼けあとの蕨は太し二三本

歩みよる人にももの言はず若葉蔭

若葉蔭佇む彼を疎み過ぐ

宮ほとり相逢ふ人も夏装ひ

よぢ下りる岩にさし出て濃躑躅

里の女と別れてさみし芽獨活掘る

やうやうに掘れし芽獨活の薫るなり

「やぶちゃん注」 「やうやう」の後半は底本では踊り字「へ」。

芹摘むや淋しけれどもたゞ一人

竹の子を掘りて山路をあやまたず

百合を掘り竹の子を掘る山路かな

百合を掘り蕨を干して生活す

ふと醒めて初ほとゝぎす二三聲

かたくりにする山百合を掘るといふ

魚より百合根がうまし山なれば

一人静か二人静かも摘む氣なし

杉の根の暗きところに一人静か

彦山の天は晴れたり鯉幟

満開のさつき水面に照るごとし

早苗束投げしところに起直り

雨晴れて忘れな草に仲直り

逢ふもよし逢はぬもをかし若葉雨

花散るなようらく躑躅心あらば

「やぶちゃん注：「ようらく躑躅」はツツジ目ツツジ科ヨウラクツツジ属 *Menziesia* のツツジの仲間。本邦産はコヨウラクツツジ（小瓔珞躑躅）*Menziesia pentandra* やウラジロヨウラク（裏白瓔珞）*Menziesia multiflora* などは七ゝ八種がある（[ウィキの「ヨウラクツツジ属」](#)及びそのリンク先に拠る）。

[グーグル画像検索「*Menziesia*」](#)。」

日が照れば登る坂道鯉幟

菖蒲ふく軒の高さよ彦山の宿

美しき胡蝶なれども氣味悪く

秋蝶とおぼしき蝶の翹うすく

枯色の品よき蝶は蛇の目蝶

蝶追うて春山深く迷ひけり

「やぶちゃん注：久女の名吟として一読、忘れ難い句であるが、坂本宮尾氏の「杉田久女」（三二頁）によれば、この句、かく本句集の終りの方（終わりから五十六句目）に配されており、しかも後の編年式編集の角川書店昭和四四（一九六九）年刊「杉田久女句集」では昭和十年以降のパートに置かれてあるが、実は本句は、驚くべきことに、何と、久女が句作を初めて一年足らずの、『ホトトギス』大正六（一九一七）年七月号の「春の山十句集」に載ったものであるとある。私は一種、イメージとしての久女の辞世として本句を措定しているが（この事実を知ってもそれは変わらないのであるが）、本句をものした当

時の彼女は未だ二十七歳であつたのである。」

美しき胡蝶も追はずこの山路

道をしへ法のみ山をあやまたず

道をしへ一筋道の迷ひなく

何もなし笥の水に冷奴

花過ぎて尚彦山の春炬燵

なまぬるき春の炬燵に戀もなし

風呂に汲む笥の水もぬるみそむ

風呂汲みも晝寝も一人花の雨

咲き移る外山の花を愛で住めり

梨花の月浴みの窓をのぞくなよ

窓叩く鮮人去りぬ梨花の月

日が出れば消ゆる雲霧峰若葉

田樂の焼けてゐるなる爐のほとり

田樂に夕餉すませば寝るばかり

田樂の木の芽をもつと摺りませよ

田樂の木の芽摺るなり坊が妻

苔庭に散り敷く花を掃くなかれ

石楠花に全く晴れぬ山日和

花の戸にけふより男子禁制と掟て棲む

垣間見を許さぬこの扉山櫻

風に汲む笥も濁り花の雨

ひろげ干す傘にも落花乾きゐし

齒のいたみ衰へ風邪も快く

石楠の恥ろふ如く揺れ交す

昭和十二年秋長女昌子を嫁入らす 四句

菊薫りまれ人來ますよき日かな

新妻の厨著愛^{めで}たしさんま焼く

「やぶちゃん注…「厨著」は音なら「ちうちよ」で音数律は合うが、固い。確信犯で「くりやぎ」と字余りで読みたい。」

新婚の昌子美しさんま焼く

實をもちて鉢の萬年青の威勢よく

寶塚武庫川にて 昭和十四年 十句

熟れそめし葉蔭の莓玉のごと

露の葉をかきわけかきわけ莓つみ

「やぶちゃん注…「かきわけかきわけ」の後半は底本では踊り
字「へ」。」

朝なつむ莓の露に指染めむ

緑葉にかくさうべしや紅莓

朝日濃し莓は籠に摘みみちて

手づくりの莓食べよと宣す母

病む母に苺摘み來ぬ傘もさゝず

初苺喰ませたく思ふ子は遠く

村嬢に夕焼あせぬ苺摘

刈りかけて去る村童や蓼の雨

「やぶちゃん注…底本年譜の昭和一四（一九三九）年の条に、『上阪して、実母を訪ね、一か月滞在。六月、「プラタナスと苺」四二句（俳句研究8）。せめて一冊の句集を持ちたいという念願は、戦時下の悪条件のため実らず、また編者（昌子）はそのことに寄せて思いとどまるよう説得した。作品をかき油絵を描いて日日を過ごしたが、生きる張合いを失った心境を吐露した手紙を受け取るたび心が痛んだ』とある。この時、母さんは八十五歳であった（母の東京からの移転は定かでないが、彼女は元来が兵庫県出石市宮淵出身であった）。言わずもがなであるが、久女はこの三年前の昭和十一年十月に虚子によって突如、『ホトトギス』を除籍されている。理由の公開も通達もない全く突然の同人削除であった。」

温室 六句

温室訪ふやゴムの日向をたのしみに

温室訪へばゴムは芽ほどき嫩葉照り

「やぶちゃん注…「嫩葉」は「わかば」と読む（音は「どんえふ（どんよう）」）。新芽の葉。若葉。」

パイアの雄花いづれぞ温室の中

温室ぬくし女王の如きアマリゝス

百合の香に愛する子らとあるこゝろ

むろ咲の花の息吹きに曇る玻璃

別府 三句

佇ちよれば湯けむりなびく紅葉かな

海地獄

湧き上る湯玉の瑠璃や葛の雨

這ひかゝる温泉けむり濃さや葛の花

横濱にて 三句

寸陰を惜み毛糸を編む子かな

クリスマス近づく寮の歌稽古

毛糸巻く子と睦じく夜の卓に

税關にて 二句

屋上の冬風にあり富士までも

北風吹くや月あきらかに港の灯

「やぶちゃん注…この「横濱にて 三句」と「税關にて 二句」

の六句は、横浜税関長官官房の秘書役をしていた長女昌子さんの恐らくは独身時代の句（「寮」が出る）と推察する。昌子さんの結婚は昭和一二（一九三七）年十一月であるから、時制的にはそれより前（結婚直近の可能性も高い）の句作である。本句集の極めて特異な点であるが、大きな標題句群は時系列上の一応の纏まりを持っているように見え乍ら、その中の並び（概ね季別）では編年性がほばないと考えてよい点である。これは本句集を読む上で最も気をつけねばならぬ点である。」

昭和十七年光子結婚式に上京 三句

歌舞伎座は雨に灯流し春ゆく夜

蒸し壽司のたのしみまどゐ始まれり

鳥雲にわれは明日たつ筑紫かな

「やぶちゃん注…「昭和十七年」は久女の誤りと思われる。次女光子さんの結婚は昭和一六（一九五二）年十月である。底本の長女昌子さんの編に成る年譜に、『十月、次女・光子、竹村猛に嫁す。結婚式に上京、鎌倉在住の昌子宅に泊ったが』（この叙述からも直前の句群とはスパンがあることに気づかれたい）、『精神的な精彩なく、悲痛で胸が痛んだ。若夫婦は台北の任地（台北高商）へ赴く。神戸より乗船、文字に寄港碇泊、戦時中とて上陸禁止。普通は面会できないところ、宇内の教え子が門司税関にいたため、税関のランチで船に赴き別れを告げてきた。これは次女・光子との最後となった。このときは小倉中学のおかげだったと非常に喜んでいた』とある。久女、五十一。

因みに、この光子さんの夫竹村猛という人物は、橋本恭子氏の論文「島田謹二『華麗島文学志』におけるエグゾティズムの役割」（『日本台湾学会報』第八号・二〇〇六年五月発行）の中で（以下総ての引用でアラビア数字を漢数字に代えた）、占領下の『台湾文壇』での一九四〇年代に入って日本人と台湾人が共

に文学活動を行うようになる、台湾文壇では約二年にわたり「エグゾティスム」と「レアリスム」をめぐる議論が展開され、「外地文学」の本質は「レアリスム」にあるとの共通認識が確立していく。『日台双方の論者は一連の議論を通じ、台湾の文学が内地から「エグゾティック」と見られるのは仕方ないにしても、作家たちはそれを意図すべきではなく、あくまで台湾という土地に根ざした「レアリスム」の文学を目指し、台湾文化の向上をはかるべき、との結論に達した。もともと、台湾人作家の龍瑛宗（一九一―一九九九）と黄得時（一九〇九―一九九九）は「エキゾチズム文学はあつてもいゝ」と文学の多様性を認め、台北高商講師の竹村猛も、「エグゾティスム」の真偽は素材に対する作家の態度に係わるものであり、「真のエグゾティスム」は今なお「取り出されるべき価値」がある、と一連の議論を締めくくった』と出る「竹村猛」なる明らかに文学者（同論文註には彼が『台湾公論』一九四二年九月刊に「作家の態度」という評論を書いていることが分かる）と思われる人物と同一人物と考えてよからう。彼の載る人名リストをネット上で得たが、そこには台北高商講師の彼の生没年と思われるデータが載り、『一九一四―一九八七』とある。これが正しいとすれば大正三年生まれ（光子さんより一つ年上）で昭和六十五

年に逝去されておられる。これはフランス文学者中央大学名誉教授であつた竹村猛と同一人物である。昭和一五（一九四〇）年東京帝国大学仏文科卒。中央大学教授、一九八五年に定年退任して名誉教授。十九世紀フランス文学を専攻、多くの作品を翻訳した、とウィキの「竹村猛」に載る。その著作リストを見て驚いた。私はこの竹村氏の訳書を胸躍らせて読んでいたことに気づいたからである。……アレクサンドル・デュマ「三銃士」（一九六一年）一九六二年・角川文庫／後に偕成社文庫・角川文庫。私は偕成社版を読んだ）……「モンテ・クリスト伯爵」（一九六八年・旺文社文庫）……。

角川書店・昭和二七（一九五二）年十月二十日刊の「杉田久女句集」の句本文は本句をもって終わっている。最後に長女石昌子さんの「母久女の思ひ出」が載る（著作権継続につき、省略）。

杉田久女、本名杉田（旧姓赤堀）久は昭和二二（一九四六）年一月二十一日、大宰府県立筑紫保養院にて腎臓病悪化のために満五十五と八ヶ月（久女は明治二三（一八九〇）年五月三十日生）で亡くなった。――」

杉田久女句集未収録作品

「やぶちゃん注」以下、句集「杉田久女句集」（角川書店昭和二七（一九五二）年十月二十日刊・文庫判）に所収されなかった句を電子化する。底本は引き続き、一九八九年立風書房刊の「杉田久女全集」を用いるが（当該部は第一巻の『補遺（杉田久女句集未収録作品）』パート）、その冒頭でも述べた通り、確信犯で恣意的に多くの漢字を正字化して示すこととする。総句五百七十六句で、後の昭和四四（一九六九）年角川書店版四六判全集（編年体）は前句集に補遺句数二百四十四句を加えたものと底本書誌解題にあるので、これより電子化する半分を有に超える三百三十二句が、この安くない（二巻セットで本体一万四千元）底本全集を買った人以外には現在まで殆んど知られていない杉田久女の句、ということになる。

以下、冒頭の六十九句にはクレジット標題がない（この次の句群が『大正七年』の柱となっている）。句群の後半部に大正六（一九一七）年一月発行の『ホトトギス』（「台所雑詠」欄）への久女初掲載の句が六句確認出来る（石昌子さんは年譜で五句とされが、坂本宮尾氏の「杉田久女」（二六頁）によれば掲載数は『六句』とあり、そこに引かれた三句の内的一句は年譜

引用に載らない句であるので坂本氏の句数を採る)。年譜によれば、小倉にいた久女はこの前年の大正五年の秋に、両親の依頼で当時同居させていた次兄（俳号赤堀月蟾^{げっせん}。渡辺水巴門。商社マンであつたが俳句への傾倒著しくそれを心配しての措置であつたかと思われると年譜にはある）の手解きを受けて句作を始めている（さすればミイラ取りがミイラということにもなる）とあるから、この前半の句群は大正五年秋から年末への数ヶ月の作かと一応考えてよいであろう。久女の杉田宇内との結婚は先立つ八年七年前の明治四二（一九〇九）年八月で、この大正五年八月には次女光子も生まれ（長女昌子は既に五歳）ていた。この時、久女二十六歳。」

「やぶちゃん注…以下、ノンクレジット。」

初風や内海川の如く酒庫の壁

初風や船に寝て今日も陸地なし

小唄やめて臼只ひけり土間の冬

炭の粉を寒菊に掃く箒かな

先つんで捨てたる葱の寒の雨

蜜柑送るに蒲鉾板をけづり書きし

菰炊くや夜寒灯に居りし兒はいねぬ

知らで踏む小草の花や春浅き

新しき柄杓の木香や水温む

薪濡れて燃えぬ竈や春の雨

宴はてゝ膳あらふ灯や若葉雨

拭巾白く干しつらねたり若葉かげ

もぎたての茄子色濃さや桶に浮く

茄子苗を買うて伏せ置くめざるかな

庖丁とぐや無花果の葉に夕立うつ

修理して厨明るき若葉かな

井側替へて青桐に木の香新しき

「やぶちゃん注」…「井側」老婆心乍ら、「いがは（いがわ）」と読む。井戸側のこと。日常的に使う漢字であるが、あまり理解されているとは思われないので注しておく、「側」には単なる対象の傍ら・そば・横脇の謂い以外に、曲面を成す対象物の

その周囲又はその周囲を包んでいるものの意味がある。」

色白く肥えて婢美し茄子畑

「やぶちゃん注…「婢美し」は「ひはし」と訓じているか。「婢」は「はし」の訓もあり音数律も合うが、どうも私には「はしはし」ではしつくりこない。私の読みでは中七字足らずとなるが詠んだ際、少なくとも私には抵抗感がなく、「婢」の後のブレイクが映像的にも鮮烈である。私はこの句が好きである。」

桑の海にふりそゞぐ日や暑し

「やぶちゃん注…破調で面白い。」

手づくりの初なりの茄子や夕の膳

皿の絵に赤くしみつく苺かな

幟ひたと黙して暑き街道埃

「やぶちゃん注：「街道埃」は「みちばこり」と訓じていよう。」

松原に虹美しき幟かな

明日の麥を井にかすや月出でにけり

椀のふたに花柚の香や朝うれし

干瓢干て日盛や連山せまる家

日盛土人葉かげのバナナ切りに入る

夏草を退きためし朝の潮かな

山畑の茄子なり盛る秋涼し

今朝秋や酔の香うせたる櫃の飯

パセリ添へて皿繪美し萩の夕

かけす馴れて婢の名を呼ぶや今朝の秋

「やぶちゃん注：[ウィキの「カケス」](#)によれば、スズメ目カラス科カケス *Garrulus glandarius* は「ジェー、ジェー」としわがれた声で鳴くき、英名「Eurasian jay」の「Jay」はこの鳴き声に由来するとし、また、『他の鳥の鳴き声や物音を真似するのが巧く、林業のチェンソーや枝打ち、木を倒す時の作業音を「ジェージェー」の間奏を入れつつ再現することもある。飼い鳥として人に慣れたものは人語の真似までする』とある。私は鳥には疎いので吃驚り（私は実はかつて「日本野鳥の会」に属していたが、これは妻の家族会員というのが真相であった。）」

霧の中にボーと鳴る汽笛や黙す夫婦

五月振りに家に歸る 一句

妻留守の汚衣よひためて秋暑し

秋空の如く瞳のすむ子かな

皿愛でて菊膾する旗日かな

コスモスやとまと切る皿の繪の模様

婢をまぜて女三人やいもの秋

「やぶちゃん注…「三人」は「みたり」と訓じているか。」

間引菜を浸して寒し桶の水

間引菜洗うて水切る箆や破れるし

庭の菜を箆にうづたかし小春縁

箆すてて根深の肥に去りにけり

小包の縄切る柿の庖丁かな

箆目こまやかに葉雞頭のまはり掃きにけり

「やぶちゃん注…特異点の確信犯の字余りの句である。底本でも文字の詰めが最も著しい。ここまで見てくると、久女の非凡さが既に現われている。久女は句作のスタートに於いて既に意識的に音数律を壊して意識的に新たな久女の世界観を開こうとしていると私には読める。」

 ひやゝかに竈に子猫は死にゝけり

「やぶちゃん注…私が久女の初期秀句として一番に選んだ句である。当時の女流の句に盛んに言われた『台所俳句』（この呼称は実に厭らしい。誰とは言わないが、あいつの名づけそうな実に悍ましい分類である）としても、これは他の追隨を許さぬ美事な句であると私は断言する。」

夜寒さや棚の隅なる皿小鉢

魚に酔の利く間や菜を間引きけり

「やぶちゃん注…「菜」は「サイ」と音で読んでいるか。」

柿むいて澁に染む手の幾日かな

冬の朝道々こぼす手桶をけの水

「やぶちゃん注…大正六（一九一七）年一月発行の『ホトトギス』（「台所雑詠」欄）への久女初掲載句の一句。」

凧や流しの下の石乾く

「やぶちゃん注…大正六（一九一七）年一月発行の『ホトトギス』（「台所雑詠」欄）への久女初掲載句の一句。」

妻若く前掛に冬菜抱きにけり

「やぶちゃん注…大正六（一九一七）年一月発行の『ホトトギス』（「台所雑詠」欄）への久女初掲載句の一句。既にして芸術的なスカルプディング・イン・タイムの句である。」

蠣飯に灯して夫を待ちにけり

「やぶちゃん注…「夫」は「とま」と訓じていよう。」

霜に映りて竈火震ふや霜の朝

霜に出して燃す七輪の屑炭^{ガラ}赤し

枯菊の根の泥石を掘りて來し

氷豆腐の策^{さく}つる枝や北斗冴^さゆ

「やぶちゃん注…パースの利いた、しかも凄絶なシャープさを持った秀句と私は思う。」

外厠に婢の行く音や夜半の冬

「やぶちゃん注…「外厠」は「とがはや」と訓じているか。」

魚見せて呼べど猫來ぬ寒さ哉

こはばりて死にし子猫や冬の雨

猫の皿空しくありし寒さかな

炭小屋に灯し行く婢や露を言ふ

きな粉挽いて婢等が情話や夜半の冬

かそと婢のもの書く夜かな氷雨降る

舊習に老婢我を張る師走かな

鯛を料るに俎せまき師走かな

「やぶちゃん注…「料る」は「つくる」。後の「鶴料理るまな箸
淨くもちひけり」で「料理る」の表記は出るが、既存句では例
を見ない。それにしてもまたしても確信犯の字余りである。」

皿破りし婢のわびごとや年の暮

「やぶちゃん注…大正六（一九一七）年一月発行の『ホトトギス』（「台所雑詠」欄）への久女初掲載句の一句。」

へつつひの灰かき出して年暮るゝ

「やぶちゃん注…大正六（一九一七）年一月発行の『ホトトギス』（「台所雑詠」欄）への久女初掲載句の一句。」

大蛸をつるして除夜の厨廣し

猫泣くを起出て見るや厨寒し

「やぶちゃん注…かくこの六十九句を通して読むと、その殆んどが、確信犯の字余りの手法と詠物対象のずらし方から見ても、平凡な厨房の婦人の生活の切り取りでは「ない」ということがよく分かる。男どもが微温的なものを意識的に志向したに違いない『台所雑詠』の女世界に、真相としての子猫の死を侵入させ、殊更に老下女の皺の肌えにカメラを向け、冷たさの勝つた切れのあるクロース・アップを多用、そこには紅や緑の鮮烈な原色を配することも忘れず、しかも早くも夫婦の冷ややかな

擦れ違いをも描き初めているではないか。まさにここに既にし
て――久女は「在る」――」

大正七（一九一八）年

大火鉢据うる板間や年の暮

子等残し來て日暮れたる年賀哉

福壽草の芽を摘みし子と夫にわびぬ

門司に買物にゆく

まゆ玉買ふや路次に海濃き港町

「やぶちゃん注…初期句の内、最初に私の琴線に触れた句。被写界深度の深い優れた映像と思う。」

まゆ玉に濱風強く見し鏡哉

父を持つ子等に灯すた大吹雪

庭の葱引きくれて移る隣かな

厨事そこそや畠の冬菜見に

「やぶちゃん注…「そこそこ」の後半は底本では踊り字「く」。
しかし、この句、読み方が分からぬ。上句「くりやごと」と訓
じたのでは中七のリズムが痛く悪い。「ちゆうじそこ／そこや
はたけの」と読みと音律は整うが、如何にもである。識者の御
教授を乞う。」

襟卷いて土間に産湯を焚く夜哉

菜洗ふや流に濡れて足袋の甲

寒鮒を汲み上げて井の底くらし

砂深く春待つ貝を見出でけり

くくられて春まつ桑に岨道高し

「やぶちゃん注…「岨道」は二字で「そは（そわ）」と訓じたい。

険しい山道の意。「そはみち（そわみち）」（「そは」の読みがより古語）「そばみち」が読みの定石だが、如何にも字余りは句柄に合わぬ。「そばじ」と読ませるつもりならルビを振ったであらう。」

孫に子にひやゝかの舅^{ちち}や冴え返る

「やぶちゃん注…久女二十八、結婚九年目。宇内（長男）の父は愛知県西加茂郡の山間の小原村松名の素封家であった。大正二年に義母が亡くなってからは、久女はしばしばこの田舎の実家に赴き義父の世話を見た。実家の資産は『おそろしく豊富だったけれど』も、この義父は非常な吝嗇家であったことが昌子さんの年譜記載にある。『住宅も小倉に建てれば帰らずに終いになるのを恐れて』建てさせなかった由の記述もある（大正二年の条）。ここで描かれるのも、そうした県立小倉中学校美術教師であった夫の休暇帰省時の、昌子さん（当時、七歳）若しくは次女の光子さん（同二歳）への愛情なき舅の視線を描いてしかも「冴え返る」おのがじしが描かれるという慄然とさせる句である。既にして目の付け所が久女で、『台所雑詠』などとお茶を濁して漫然と駘蕩している虚子を始めとした『ホトトギ

ス』の凡愚どもを恐懼とさせるに余りある句と思う。私の大嫌いな虚子（後に「歸中癡ひ」と詠む久女のためにも）に、ざまあみろ、と言つてやりたい氣にさせる句である。」

ホ句忘れて洗濯に日々や春めきぬ

厨の灯に箆もちよりて芹そろふ

「やぶちゃん注…「箆」と「芹」のリズムが、上五の字余りを吸収してしかもその「灯」の光が美しく優しい。しかも背後に賑わい見せながらである。美事なシークエンスの巧まぬ演出と思う。」

箆の一つにはかまぬがせし土筆かな

次女病床に來て甚あどけなし

椿よりも汝を見る我目たのしめり

「やぶちゃん注…当時、次女光子さんは二歳。」

熱の乳呑みに来る兒や紅椿

我病めば子のもつれ髪春寒し

或夜

正夢の如く母來ぬ夜半の梅

春の夜を我魂飛ぶ都かな

傘の紺色沈めて蝌蚪を見つめけり

ひしと出て芥子の二た葉や別れ霜

「やぶちゃん注…「別れ霜」八十八夜の別れ霜のこと。八十八夜（雑節の一つで立春から八十八日目。五月二日頃。ここを境に農家は種蒔・茶摘・養蚕などの繁忙期に入った）の頃に降る霜。この後には霜は降りないとされた。忘れ霜。」

客の前にこの我儘や紅椿

春木かげ踏み歩む子に庭せまし

灯に淋しき雛なぐさめて起きゐたり

春雨や夢にとけこむ曉の鐘

尾を引いて鐘がなる夜や春の雨

滌しきりに告げて春雨菜に晴るゝ

山吹に濡れ歸る婢のはだしかな

桶の貝に潮くみて來ぬ春の川

花銀杏廣き板間のひえにけり

争ひ安くなれる夫婦や花曇り

昨春の上京を思出でて 三句

花の旅しばしば下車^{おり}て知己をとふ

「やぶちゃん注：「しばしば」の後半は底本では踊り字「へ」。」

父母の老を花に訪はんと旅立てり

爐ふさいで老父母の布團しく淋し

「やぶちゃん注：昨春とあり、年譜を見ると大正六（一九一七）年の条に、『五月、虚子にはじめて会う（目白の里へ上京中、飯島みさ子邸の俳句会にて）。みさ子、かな女、みどり女を知る』とあるのと一致する。この大正七年十二月に実父廉蔵は脳溢血のために享年六十六で亡くなっているが、それよりも前の追想吟である。十一月に廉蔵は重態となって久女上京しているが、句柄からはやはりそれよりも前、この大正六年初春の雰囲気の中での追懐と採る。」

上野櫻木町にて

花の町こゝに尚ある我家かな

「やぶちゃん注…底本年譜の明治三九（一九〇六）年の条に、大蔵省官吏であつた父赤堀廉蔵の内地転勤に伴い、一家で占領地であつた台湾から引き揚げ（廉蔵の職務は台湾に税制を敷くための調査官）、当初は学習院大学官舎に住み、次いで上野桜木町に自宅を構えた、とある（東京転勤後の廉蔵は宮内省と学習院大学の会計官で、当時の学習院は宮内省が所轄する正式な官立学校であつた）。当時久女十六歳、東京女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）附属お茶水高等女学校の二年生であつた。但し、一家は翌明治四十年（久女の同高等女学校卒業の年）に東京府下下北郡豊嶋郡高田字若葉（現在の目白）に転居している。本句は十数年後、たまたまかつての赤堀家の近くを通つての感懐吟と思われる。」

生計^{たつぎ}たつる花畠に風雨憂ひけり

花畠に色澄む峰や蜂群るゝ

用なき灯厨尚ある春夜かな

河にむいて厨窓灯す春の宵

春夕べホ句なし竈赤く燃ゆ

卓の皿そのまゝや消す春夜の灯

今日の客にみがくナイフや櫻草

洗濯に主從仲よし椿かげ

洗ひ干すこの衣皆赤し桃の風

犬にむごき婢をたしなめぬ木瓜の雨

つま立てゝ桃に竿のす小婢かな

「やぶちゃん注…「小婢」「せうひ（しょうひ）」と音読みして

いよう。」

婢がしめし木戸おす犬や春の雨

花吹雪犬をつないで外出かな

晝飯たべに歸り來る夫日永かな

「やぶちゃん注…「晝飯」は「ひる」、「歸り來る夫」は「かえりくるつま」と訓じていよう。」

或時は憎む貧あり花曇

ソース煮て冷せる鍋や春あつし

笹に摘む花菜つぼみや彌生盡

彌生盡子を連れてよく出でありく

彼岸會の鐘のとどかぬ野住かな

垣の根の莖摘む子をいましめぬ

舊師の訃報

ゑがきまとむる面影あはし花の雨

「やぶちゃん注…「舊師」不詳。」

讀みうめば首振り人形日永かな

晝く父ホ句よむ母や野邊遊び

「やぶちゃん注…久女にもこうした小さな至福の瞬間があったことに、私はどこかで心救われる気がするのである。」

述懐

かなしみをつげて悔あり春の露

婢がとづる買物帳や暮の春

豆種雨にほとびて土にあからさま

「やぶちゃん注…本句、読み方が分からない。識者の御教授を乞う。」

博多へゆく 四句

訪ふ家の婢に馴染あり著莪の花

訪ふ家の婢に買ふものや花の雨

菜の花に沈む家とぞたづね行く

牡丹にひねもす客や疲れたり

青海苔干すや連翹の雨旭にかわく

東公園

金魚はや買ふ家もありぬ若葉かげ

「やぶちゃん注」 「東公園」は恐らくは現在の福岡市博多区東公園（これは町名）にある日本風公園の東公園のことと思われる（公園の一部は博多区千代及び東区馬出に入る）。福岡市経済観光文化局文化財部文化財保護課公式サイト「福岡市の文化財」の「[東公園](#)」には、『文永の役で元軍と激戦が展開された古戦場跡で、かつては博多湾に面する千代の松原として知られた名所であった』ものを、明治九（一八七六）年の太政官布告に基づいて公園とし、明治三三（一九〇〇）年からは福岡県最初の県営公園となった。『園内には、元寇にちなんで建立された亀山上皇銅像、日蓮上人の銅像のほか、福の神である恵比須神を祭った十日恵比須神社や元寇史料館がある』とある。[ウイキ](#)の「[東公園（福岡市）](#)」には、『その後、公園周辺の開発により白砂青松の景観は失われるが、代わって』明治四三（一九一〇）年には『川上音二郎によって洋風劇場の博多座（現在の博多座はこの名を踏襲したもの）が建てられ』、昭和八（一九三三）年には『福岡市動物園が開園し』ている（動物園は後の太

平洋戦争による戦局悪化により昭和十九年に閉園、戦後の動物園再建では南公園へと移転したとある。」

茄子植ゑをへし泥鰱川にすゝぎけり

「やぶちゃん注：当時、一家は小倉市外日明（ひあかり）（当時は福岡県企救郡板櫃村字日明。現在の小倉北区日明）にいた。住居は関門海峡に注ぐ板櫃川河口に面していたと年譜にあるので、この「川」もその板櫃川であろう。」

牡丹にひねもす降りぬ新井筒

栗の花ちるや大屋根の雨に炊煙這ふ

牡丹散るを箆にひろえる夕かな

アネモネしきりに散るを惜しみて竈焚く

貝すりの膳に榮えたり牡丹の灯

「やぶちゃん注…「貝すりの膳」は貝摺かいすりの膳で、螺鈿細工を施した漆塗りの箱膳又はそこに盛られた漆器の膳碗を指しているよう。」

膳碗の百人前や松の花

牡丹に家寶の繪皿出したり

若葉の旭板間に青く流れたり

厨窓の障子はづして若葉濃し

牡丹咲くや梁すゝぶ大厨

次女光子

ひまはりに背丈負けたる我子かな

「やぶちゃん注…当時次女光子さんは満三歳前後（大正五（一九一六）年八月二十二日生まれ）。」

茶釜たぎるや大笹の新茶つかみ入る

よべ豪雨に焚かれぬ竈や柿の花

古俎のかび白く嘖いて梅雨入かな

「やぶちゃん注：「古俎」は「ふるまないた」と読んでいるか。すると上七・中八という字余りになるが、私には却ってそれが「ついで」の饅えた雰囲気をよく出せるように感ぜられるのである。」

ゆすらの實赤し垣根に櫃干たり

「やぶちゃん注：「櫃干たり」は読みが不明。「ひつほしたり」では字余りの効果がないように思われる。「ひたり」は響きが悪い。これはただの直感だが「干せり」の誤り（判読の誤りか誤植か）ではなからうか？」

コレラ流行れば蚊帳つりて喰ふひるげ哉

「やぶちゃん注…昭和二七（一九五二）年角川版「杉田久女句集」に大正七（一九一八）年の作として、

コレラ怖ぢ蚊帳吊りて喰ふ晝餉かな

が載る。そこで注したが、この二年前の大正五年の夏に本邦ではコレラが流行、死者七千四百八十二人を数えていた。蚊帳の中の食事というのは呪い^{まじな}なんどではなく、れっきとしたコレラ感染予防の蠅対策で、当時は小児の昼寝の際などにも蚊帳を吊ることが奨励されていた。」

大鮎一尾づゝ青串打つて焼きにけり

鼠死に居て氣味わろき井や梅雨に殖えて

夏足袋ほすや茄子を支へて竹細し

衣紋竹に柿の葉風のつのりけり

夏夜人に蓮池ひろく灯を浸す

矢矧川沿岸

灯皆消して瀬音に寝るや夏の夜

「やぶちゃん注…「矢矧川」「やはぎがは（やはぎがわ）」で、福岡県遠賀郡岡垣町の山中を源流とし、同岡垣町の三里松原（芦屋海岸）で玄界灘に注ぐ川のことと思われる。」

起し繪淋し寝ねゐし蒲團積みよせて

「やぶちゃん注…「起し繪」建物や樹木などの絵を切り抜いて厚紙で裏打ちし、枠組みの中に立て並べて立体的に構成した、一種のペーパー・クラフト。木版刷りの豊かな彩色がなされたものや、灯火を点ずる仕掛けを施したりしたものもあり、「忠臣蔵」「白浪五人男」「道成寺」などの歌舞伎の舞台や、名所風景などを題材とし、遠近法をも取り入れた江戸時代からある立体の紙玩具である（茶室の設計時などにも利用される）。「立て絵」「立て版古^{ばんこ}」とも呼び、大正頃まで流行した。季語として

は夏とする。以下、ネットより採句。

おこし繪に灯をともしけり夕涼み

（正岡子規）

うち並べともし勝たり立版古

（高浜虚子）

起し繪の男を殺す女かな

（中村草田男）

玻璃の水草白根漲るついいりかな

長女病む

熱高き子に蔓朝顔の風はげし

「やぶちゃん注…長女昌子さん小学一年生の夏である。年譜記載はない。」

入院

病兒寝ぬれば我に蠅襲ふ疊哉

次女をよそにあづけ看護する事四日

子燕や我になき焦るとあはれなり

廣葉雫葉を打つてまた清水に

新涼や黄葉出来そめし小楮

「やぶちゃん注…「小楮」「ちさかうぞ（ちさこうぞ）」と読んでいるか。」

厨窓にのぞく穂先や箒草

くゝりゆるくて瓢正しき形かな

梯子かけて瓢のたうき急ぎけり

黍に浴めば庭に月噴く泉哉

「やぶちゃん注…「浴めば」は「あめば」で「浴む」（マ行上二段動詞）の未然形で、浴びせる、注ぎかけるの謂いであろう。何か、今の私には不思議に心惹かれる句である。」

畑厨をめぐれば多し秋の蠅

「やぶちゃん注…「畑厨」「はたくり」と読むか。台所の勝手口に隣接した家庭菜園のことか。「畑／厨」ではあるまい。」

齧齧に白々と立てぬ厨障子

障子まだ張らで夜寒や厨窓

丸く寝て犬も夜寒し厨土間

葱畑に障子はめたる厨かな

竈の灰かきとりかくる冬菜哉

笹の目の泥や冬菜をぬき入れて

笹いぬいてどこそこ分かつ冬菜哉

粉雪散る引窓しめぬ乾鮭に

大正八（一九一九）年

齧重きうなじ伏せ縫ふ春着かな

新年

注連かけて屋根なき井戸やお降す

「やぶちゃん注…「お降」は「おさがり」で、元日に雨や雪が降ること又はその樋をいう新年の季語。」

あみの餅番する子等や初鳥

「やぶちゃん注…個人的に好きな句である。」

雪搔いて雑煮菜掘りしところかな

晴衣かけて松の内なる衣桁かな

「やぶちゃん注…着物を掛けておく衣紋掛けを指す「衣桁」は

「いかう（いこう）」「えかう（えこう）」と二様に読める。「晴衣」（Haregi）「かけつ」（kakete）「かな」（kana）の力行音及び母音「e」音の有機的連続の心地よさから私は「えこう」と読みたい。」

水仙に至りし雪の齒あと哉

かきまぜてまだぬるき湯や寒の入り

短日の雀に閉めて夕餉かな

壁によせて布團寒げに寝る婢かな

あたへたる足袋を婢がつぐ爐べりかな

大河豚の腹横たへし俎上かな

竈たくや石の如落つ凍て雀

料理人來て冬木根に竈すゑにけり

鴨料る庖丁鋭く血を戀へり

「やぶちゃん注…久女真骨頂の鬼趣句。こういうのは他の女流が真似ても、彼女の句ほどの鬼気は生じぬと私は感ずる。それほどに久女の「鬼」には熱い「血」が感ぜられる。」

活け残りし水仙つけて甕久し

石鹼玉小さく破れたる疊かな

「やぶちゃん注…タルコフスキイに撮らせた。」

青天衝て春めく枝の光りかな

菜飯ふくやいたく曇りし豆ランプ

春の夜や帶卷きをへて枕上ミ

病蝶や石に翅をまつ平ら

青蔦や露臺支へて丸柱

蛙田に灯流し去れる電車かな

行く春や玉いつぬけし手の指輪

實櫻や羽織かさねてつかね髪

「やぶちゃん注…「つかね髪」束ね髪。」

こでまりや油しまざる櫛笄

「やぶちゃん注…「し」は強意の副助詞。」

紫陽花や剪るや袂くはえて起しつゝ

大枝を引きづり去りて茂りかな

衣更て來し花賣や手覆白し

「やぶちゃん注」は通常は「ておほひ（ておおい）」で、
布帛製の手の甲の覆いをいうが、ここは上五の字余りもあるか
ら、これで「こて」と読んでいるのかも知れない。」

木の花の我れに薰るや更衣

衣更て上陸^{あが}らぬ港ながめけり

笹干すや茄子の添木にあちらむき

熱高き子に水汲むや五月闇

花桐やかかりこする鍋の尻

「やぶちゃん注」：「かりかり」の後半は底本では踊り字「へ」。

若楓の色みなぎれる硝子かな

曇天に漲りたてる新樹かな

鳥の餌の夏菜すりたる小鉢哉

夏山をめがけてはやき燕かな

蠅帳に蟻道つけし敷居かな

夫留守の夕餉早さよ蚊喰鳥

「やぶちゃん注…「蚊喰鳥」蝙蝠の異称。夏の季語。哺乳綱
ローラシア獣上目翼手（コウモリ）目 Chiroptera に属する
コウモリ類は多くが昆虫食で、実際に蚊を多く捕食する。「か
はほり」が転訛したとされる「こうもり」の古い呼称は「蚊^か欲^ほ
る」が元ともされ、そうすると我々が認識していないところで
「こうもり」自体が「蚊を食う」という意を既に含んでいるこ
とになる。」

残り火に煮返す鍋の小鯔かな

木下闇肩當白き竿のもの

「やぶちゃん注…「肩當」かたあて。単ひとえの長着や夜着の肩から背に補強と汚れを防ぐために当てる布のこと。」

梅干の鹽噴く箆や夾竹桃

罎かん並し盥にねぢし水道栓

麥煎るや炮烙まぜつゝホ句見る目

「やぶちゃん注…この句は、厨房で麦茶のための麦を焙烙で手交ぜして煎りつつ、自身の作った句を書き出したものを推敲しているという所謂、当時の『ホトトギス』の『台所俳句』好みのそれなのであるが、私は一読した時、実はこれは久女が「麥を煎る」ために「炮烙まぜ」の仕事をしながら、その自分の「麥煎る」ための「炮烙まぜ」の手元の景に「ホ句」を「見」ていると錯覚した。無論、これは私の勝手な解釈かも知れない。しかし、久女はにつこりと笑って肯んじてくれるような気がしている。」

船港にみちて灯りし葭戸かな

梁暗し尚蟹生くる魚籠の音

「やぶちゃん注…老婆心乍ら、「魚籠」は「びく」と読む。」

濡れし土に影濃き蟹の歩みかな

蟹這ふや濤赤く照る松の脚

熱の子の夜明ひた待つ蚊帳哉

月の瀬の音高まり蚊帳かな

涼しさや厨事をへて畠逍遙

露涼しいまだ眠れるおじぎ草

露落ちて枝長く泳ぐ廣葉かな

崖の船に垂れゐて明かし草の花

草の花に陽のかげやせぬつな纜の石

ポプラ並木

月うけし皆しろがねの葉揺りけり

月光つゝむ木立の霧となりにけり

茶釜上げて唐黍やく火搔きにけり

子等まつやたうもろこしを焼く板間

竈燃すや黍畠翔る蝶くろし

秋雨や母を乗せたる幌車

藪の端に露乾き咲く野菊かな

朝寒のそでなし探す行李かな

秋夕や氣をひきたてて厨事

夜寒さや艫聲きゝつつ厨事

コスモスに障子貼りかへて厨明し

コスモスに俎干して垣低し

湯ざめせる足冷かに板間ふむ

秋雨や文よみさして竈のふち

まはり來て秋日すぐ消ぬ^け厨窓

一つとりて針さして見ぬ鍋の栗

夜寒の灯橋渡る見し外厠

狐火の如く唄行く灯を見たり

幼時追懷

狐火におとなしく怖き父と寂し

打ち上げて忽ち氷る藻なりけり

水鳥に枯蓮皆折るゝ氷かな

氷る底に紅うごいたる金魚かな

折れて惜しむ手馴れの針を供養かな

一間ふさぎて料理並べある寒さかな

送り膳に灯して行きし霜夜かな

「やぶちゃん注…「送り膳」法事などの供応の席に欠席した人
に出席した人と同じ料理を送り届けること。また、その料理を

指す。当初、私は、この場に出られなかったのは筆者の親しい既にこの世にない故人ではあるまいか？ などと読んだが、すると「行きし」の語彙が定まらぬ感じがした。これは霜夜に言葉通りの送り膳を届ける実景と一応はとっておく。」

枯木はづし來て干大根土間にあり

すべき事皆をへし厨や除夜の鐘

大正九（一九二〇）年

門松につきつぎ下車りて棲とりぬ

松立てゝ灯りし町の繁華かな

彩旗のかげ飛ぶ船板や松飾

霜とけてかわきからびし草を焚けり

霜消えて草にみじかき木影かな

焚火あとに焦げて霜おく蔓太し

落葉して雲透き動くポプラかな

落葉ふんで木深く入れば落椿

落葉掃くやいつしかとけろし羽織紐

踏み去るや出代る坂の枯木影

春の人さと染めし澁へ袂かな

芹すゝぐや水堰き覺ゆる足の甲

芹摘むや灯の街に來て裾下ろす

芹洗ふや雨輪見え來し船の横

漂ふ芹に水輪ひろぐる濯ぎかな

波紋ひまなき船の障子や水温む

揚羽蝶花首曲げてすがりけり

切れ蔓に吹きあふらるゝ蝶々哉

桃折るや髪の地に落つ雨雫

塵の中にくさりうづもる椿かな

出代や塀摺りてさる傘のふち

「やぶちゃん注…「出代」は「でがはり／でかはり（でがわり／でかはり）」と読む。出替（わ）り。奉公人が一年又は半年の年季を終えて交替すること、又は、その日。一年年季が春（半年年季は春と秋）が交代期であったことから春の季語。」

しめかへて捲く常帶や出代女

つき来る犬に戻りつないで出代りぬ

菊の芽に曉雨おやまで出代りぬ

「やぶちゃん注…「曉雨」「げうう（ぎょうう）」は夜明けに降る雨。」

夏近し梧桐の苞浮く潦

「やぶちゃん注：「梧桐」アオイ目アオイ科 Sterculioideae 亜科アオギリ *Firmiana simplex*。「苞」は「はう（ほう）」と読み、花や花序の基部にあつて芽や蕾を包んで保護する小形の葉状体。通常の葉と同様の緑色のもの、鱗片状で褐色を呈するもの、花卉と見紛う（実際に花と誤認されているものではドクダミの白い「花」（事実は花序全体の基部を包む総苞）や、肉穂花序を大きな苞が包むサトイモ科ミズバショウの白い「花」（特に仏炎苞と呼称する）など）ものなど多種多様であるが、アオギリ *Firmiana simplex* のそれは独特のヘラのような葉状体を成す。アオギリは六〜七月に枝先に雄花と雌花を交えた大形の円錐花序を出し、黄白色五辨の小花を群生させるが萼片が五つあるものの実は花卉はない。[グーグル画像検索「アオギリの苞」](#)を参照されたい。老婆心乍ら、「潦」は「にはたづみ（にわたずみ）」と読み、雨が降って地上に流れ溜まる水若しくはその流れをいう。」

新茶すゝめて帶高く去る廊下かな

白肌に染みし葉色や新茶碾く

腹かけや頭勝ち過ぎし足弱子

四葩切るや前髪わるゝ洗ひ髪

「やぶちゃん注…「四葩」は「よひら」と読み、アジサイの異名。「葩」は花卉の意。夏の季語。」

玉蟲や瑠璃翅亂れて疊這ふ

月の齒朶影濃く搖るる清水哉

蝸牛に枝岐れんとして木瘤哉

芥子に佇つや胸に手くみて腰細く

夏帯や浮葉のひまに映し過ぐ

風をいとひて鬢にかしげし日傘哉

月光涼しく肩に碎くる湯槽哉

坂人や日の斑すり行く白日傘

黄ばら萎びて香高く散りし机哉

芥子散るや拾ひ集めてま白き掌

涼しさや水つけてかくほつれ髪

梧桐や地を亂れ打つ月雫

肩をすばめて咳く力なし秋袷

百舌鳴くや苔深くさす枝の影

つるし柿の色透けて來し軒夜寒

こまごまと枯枝折れ散る木立かな

「やぶちゃん注：「こまごま」の後半は底本では踊り字「へ」。

枯草に裾かへす時足袋白し

鍋に遠く足袋かわきある爐ぶち哉

地に近く揺れ時雨ゐて菊眞白

葱畑に雨に灯流す障子かな

土に出て濡れゐる小石葱畠

大正十（一九二一）年

水鳥の波紋静かや樓の脚

水玉ふつて水鳥首を立てにけり

雨の菊起し折る足袋ぬれにけり

鶯やうたゝねさめし長まつげ

山吹の枝吹き上げぬ地這ふ風

別るゝ日迫ると思ふ新茶かな

黒蝶に親しむ端居夏残し

傘にさゝやく粉雪うれしや二の替

「やぶちゃん注：「二の替」は「にのかはり（にのかわり）」で、

主に京阪での歌舞伎で言う正月興行のこと。また、その上演狂

言。顔見世の次の興行なのでかくいう。新年の季語。」

大正十一（一九二二）年

重ね着の盥漱よせて笑み貧し

枯れ柳に來し鳥吹かれ飛びにけり

冬服や辭令を祀る良教師

あたゝかや芝生にまはす客の下駄

灯の町深く春潮わかれのぼりけり

病める子に太鼓うるさき祭かな

芋畠に住みて灯もるゝ小窓かな

大正十三（一九二四）年

芒穗に荒れ居る海やどろにぐり

「やぶちゃん注：「芒穗」は「すすきほ」。

大正十四（一九二五）年

誘はれて草つむとなく出でにけり

摘み草の兒等佇ち見るや描く心

松山に來て師にまみえ夏羽織

「やぶちゃん注…底本年譜にこの年の『五月二十四日、高浜虚子歓迎松山俳句大会出席』とある。」

競ひかちて尾ふる大紙鳶峰の上

大正十五（一九二六）年

はし近く金魚見に出し恙かな

雁なくや釣らねどすなる母の供

昭和二（一九二七）年

松籟やこもりなれたる冬座敷

灯ともして雛守る子や宵の尼

厨事すみし婢も居ぬ雛の前

燭とれば雛の影皆移りけり

蜺籠舳におかれ人あらず

大地うつ雨久しけれ瓢苗

海峽の潮こく榮えし幟かな

若あしやうたかた堰を逆流れ

朝涼や芝刈見守る老守衛

苦かけて舳高さよ若葉雨

三日月や槐若葉の雨露しきり

葦葺の簷の厚さよ若楓

戻り去る雲の静かや牡丹園

「やぶちゃん注…「戻り」は「かげり」と読む。」

花茄子や名もなき妻とこもりすむ

夏の夜や月に干衣の玉雫

夏の夜やいでゆ泊りのただ一人

葉鶏頭や紅まえそめて露しとゞ

「やぶちゃん注…底本、「まえ」の右に『（ママ）』注記を施す。」

夏祭渡御の舳をつらねたり

高原の干草いきれ星あかく

銀漢や芝生の映画人ばかり

大阪の母滞在

夕顔や灯とほく母とねころびて

温泉の宿や夜明の青嶺蚊帳ごし

「やぶちゃん注…上五は「でゆのやどや」と読んでいるものと推測する。」

吹きとほす月の蚊帳や濱館

「やぶちゃん注…個人的に好きな句である。」

蚊帳をすくさ青き灯かな戯曲よむ

「やぶちゃん注…個人的に好きな句である。」

小萩野や峰を下りる雲の影

海廊や紅葉しそめし蔦柱

りんどうの濃るり輝く岩根かな

雨冷の俄か障子や葉鶏頭

稻妻のはためきうつる芙蓉かな

冬籠る有髪の僧や子澤山

昭和三（一九二八）年

松の内こもりくらしで雪とけず

足袋白き婢のたちゐかな松の内

寒菊や身をいたはりて厨事

水仙や小家ながらも青疊

如月の海をわたりし句會かな

「やぶちゃん注…同年二月の句会は年譜では『二月五日、若松俳句会（若松市本町ひさや旅館）。嫩葉会第九回句会。一方亭惜春会』とある孰れかか。小倉からなら若松へは洞海湾を渡る。」

ニン月や芝生のざぼん落ちしまゝ

「やぶちゃん注…「ニン月」は「にんがつ」と読み、俳句で見られない用法である。「日本国語大辞典」には「にんがち」

として二月の転訛した語というのが古語として載るが、これ辺りをもとに音数律に合わせるため、恣意的に転訛して拵えた語のように思われる。」

春寒やうすみどりもえ廣野みち

莖立に曇り日ながら散歩かな

「やぶちゃん注…「莖立」は「くきたち（だち）／くくたち（だち）」と読み、春三、四月頃に大根や蕪などの菜が茎を伸ばすことをいう語で、その伸びた茎が、「とうが立つ」の^と臺に当たる。」

春もはや牡丹櫻の落花かな

大いなる古蚊帳吊りて槐宿

「やぶちゃん注…老婆心乍ら、「槐」は「ゑんじゆ」と読み、

マメ目マメ科マメ亜科エンジュ *Styphnolobium japonicum*

である。巨木の槐の木蔭にある老舗の宿の景か。いや、これは

自宅をかく称しているようにも見える。」

青蘆や萬葉遠賀の古江道

「やぶちゃん注…底本の表記は「青芦」「万葉」。」

歸省子に師を招びまつる夕べかな

「やぶちゃん注…老婆心乍ら、「招びまつる」は「よびまつる」。

この「歸省子」は長女昌子さんか。」

唐黍や子らすこやかに夫の留守

新涼の草しきふせり青瓢

葉ごもりの青いちぢくや秋涼し

壺ながら露の日あてゐる野菊かな

熊本水前寺にて

絵簾のかたはずれして泉殿

「やぶちゃん注…同年年譜によればこの夏に熊本へ旅している。」

草堤鯊釣る母に従へり

晩涼や月今のぼる庭木立

小萩原下りくる杣を見上げけり

りんどうや莊園にしてすその原

俳信のくる日こぬ日やむかご垣

とざしある花見の亭やかへり花

むかご蔓こぼれつくしてきばみけり

松風や病養ふ桐火桶

昭和四（一九二九）年

庭隅におちし柑子や冬籠り

一むらの寒菊の芽も根分かな

童顔の合屋校長紀元節

「やぶちゃん注…「合屋校長」合屋武城^{ごうぶじやう}は、宇内の上司である当時の小倉中学校（現在の県立小倉高等学校）の校長（専門は博物学）。坂本宮尾氏の「杉田久女」によれば、彼とは『家族ぐるみ親しかった。久女が没したときに宇内とともに病院で通夜をしたのはこの合屋校長であつた』とある。」

薄氷や橋の袂の緋鮒賣

「やぶちゃん注…条鰭綱骨鰐上目コイ目コイ科コイ亜科フナ属

ヒブナ *Carassius auratus auratus*。 [ウィキの「ヒブナ」](#)によれば、約一七〇〇年前、『中国で発見されたフナの突然変異で誕生した。その後、突然変異などでキンギョとなった。ただし、フナ属のどの種がキンギョの野生種であるかは特定されていなかったが』、二〇〇八年になってDNA分析の結果、フナ属ギベリオブナ *Carassius gibelio* が『直接の先祖にあたる事が判明した』とある。」

探梅やお石茶屋にて行逢へり

「やぶちゃん注…「お石茶屋」福岡県太宰府市宰府太宰府天満宮本殿裏側の北神苑にある茶屋。福岡県観光連盟公社の観光情報サイト内の[解説](#)によれば、明治三二（一八九九）年生まれの前代女将江崎イシさんが始めた茶店で、『イシさんは美しい女性でおイシちゃんと親しみを込めて呼ばれ、当時の帝国大学の学生の人気の的であったという。やがて学生から社会人となり、政界、財界、文学界で活躍した彼らが全国におイシさんの噂を広めた。炭鉱王、麻生太吉は自宅から通いやすいようにとおイシちゃんのためにトンネルを掘ったと言われ、そのトンネルは今でも店の先にあり、現役で使われている』。おイシちゃん

は昭和五一（一九七六）年に『亡くなるまで独身を貫き、現在はお伊シしゃんの姪が跡を継いでいる。梅ヶ枝餅が食べられるほか、食事もできる。松花堂弁当のお石弁当は女性に人気。梅の香うどんは自家製の梅肉とうどんのだしがからまり、フアンが多い。山かけうどんは粘りが強い丹波の丸いもを使用。北神苑の奥にあるため静かで五月の新緑のころはことさら美しい』とある。昭和四年当時は久女三十九、「お伊シしゃん」は三十。『亡くなるまで独身を貫』いたというお伊シしゃんは久女をどう見ていたであろう。久女が固有名詞をかくも詠み込むのは極めて珍しいことである。久女はきつとこの茶屋と「お伊シしゃん」が好きだったに違いない。」

まきかへす遅日の院の繪卷かな

「やぶちゃん注…前後の句からは「院」は太宰府天満宮内の宝物殿で、「繪卷」は福岡藩初代藩主黒田長政が元和五（一六一九）年に「北野天神縁起」を書写させて奉納した九州最古の天神縁起で「天神縁起絵巻元和本」（現在県指定文化財。以上は太宰府天満宮公式サイトにデータに拠る）か？ 識者の御教授を乞う。」

探梅や手にぶらさげし削鷲

「やぶちゃん注…「削鷲」は「けずりうそ」と読み、大宰府天満宮の鷲替^{うそが}え神事で知られる「木うそ」である。太宰府天満宮公式サイトの神事の解説によれば、神事自体は一月七日の午後六時から楼門横の天神広場の斎場で行われるとあり、『「替えましよ、替えましよ」の掛け声のもと、暗闇の中で手にした「木うそ」をお互いに交換し取り替え』る。『これは、知らず知らずのうちについたすべての嘘を天神さまの誠心に替え、また、これまでの悪いことを嘘うそにして今年の吉に取り替える」という意味があり』、『神事の後に手にした「木うそ」はご自宅の神棚にお祀りし、一年間の幸福をお祈りします』とある。」

ふるさとの野に遊ぶ娘やすみれ草

秀枝なる一重山吹咲き初めし

「やぶちゃん注…「秀枝」は「ほつえ」と読む。秀つ枝・上つ枝（孰れも「ほつえ」と読む）とも書く。上代語で「つ」は位

置を示す格助詞で、上の方の枝の意。反対語は「下枝」（ししづえ（しずえ）。」

一二辨そりかへりたる姫辛夷

「やぶちゃん注…「姫辛夷」は「ひめこぶし」と読むが、これは狭義にはモクレン目モクレン科モクレン属シデコブシ（幣辛夷・四手拳）*Magnolia stellata* の別名である。但し、本種は日本固有種で、愛知・岐阜・三重県の一部に分布する周伊勢湾要素（東海丘陵要素植物群）」の一種であるからどうもこれではなく（ここまではウィキの「シデコブシ」に拠る）、ここでは単にモクレン属コブシ *Magnolia Kobus* の樹体も花も小さなものを指しているようである。」

芽杉もてふけるところや花御堂

大蛇のすがりしまゝに風の藤

「やぶちゃん注…久女らしいいい句である。」

青芝や樋割れにのせし石一つ

「やぶちゃん注…個人的に好きな視線である。」

老鶯やこもり馴れたる槐宿

草むしる芝生の所化も紺單衣

「やぶちゃん注…老婆心乍ら、「所化」は「しよけ（しよけ）」で修行僧。ここは若い必要があるように私は思う。」

梅雨雲のかくさうべしや霧が嶽

「やぶちゃん注…「霧が嶽」福岡県北九州市小倉北区にある標高五九七・八メートルの足立山の別名。」

釣蘭や深彫りしたる十字架くすの名

一碗の味なき飯や梅雨ごもり

青桐やいよいよしげき簷の雨

わかるゝや夾竹桃の影ふみて

斑猫の翅をひろげて舞ひ去れり

川上へのぼりつれけり星の笹

青瓢驟雨過ぎたる草むらに

青瓢曉雨凝りたる草むらに

新涼や蒼尖りし白桔梗

夫をまつ料理も冷えぬちゝろ蟲

芋畑に沈める納屋の細灯

月光を遮る簷の廣葉かな

そこばくの稿料えたりホ句の秋

草の實をいつしかつけて憩ひけり

昭和五（一九三〇）年

蘆嫩芽むら立つ中にかぐみけり

「やぶちゃん注…「蘆」は底本では「芦」。老婆心乍ら、「嫩芽」は「わかめ」で若か芽。」

春蘭や雨をふくみて薄みどり

「やぶちゃん注…「春蘭」単子葉植物綱クサスギカズラ目ラン科セッコク亜科シュンラン連 *Cymbidinae* 亜連シュンラン *Cymbidium goeringii*。本邦では各地で普通に見られる野生蘭の一種。[グーグル画像検索「*Cymbidium goeringii*」](#)。」

杜若さげ來し君と業平忌

「やぶちゃん注…元慶四年五月二十八日（八八〇年七月九日）に享年五十六で亡くなったとされ、晩年を過ごしたと伝える京大原野の十輪寺ではこの五月二十八日を業平の忌日としてが法要が営まれる。」

露凝れば垣夕顔の閉ぢあへず

伐りはらふ軒のひろ菓や居待月

英彦山にて

雲海にさ丹づらふ日や秋の蕃

「やぶちゃん注」底本では「さ丹づらふ」の「丹」の右に編者による『(ママ)』注記があるが、何故か意味が分からない。これで問題ないからである。「さ丹づらふ」は「さ丹頬ふ(さにつらふ)」で、赤みを帯びて美しく映えている、ほの赤いの意の万葉以来の上代語。接頭語「さ」＋名詞「丹」＋名詞「ほ」＋動詞を作る接尾語「ふ」で、原義は「赤い^ほを^ふしている」の意。そこから「色」「君」「妹」「紐」「もみぢ」などを形容する言葉として多彩に用いられ、枕詞とする辞書も多い。」

山腹の町に下りきぬ秋の暮

枯鳶を誘てこぼるるむかごかな

「やぶちゃん注：「誘て」は何と読んでいるか？ 私は「をびきて（おびきて）」と一応訓じたいと思う。」

昭和六（一九三一）年

娘にゆづる櫛笄や花の春

塀ぎはに萌えし蕨をそだてけり

むすびやる娘の春帯は板の如

「やぶちゃん注」二句前のものと併せ、長女昌子さんであろう。
この年、二十歳成人式であつた。」

木蓮や人來り去る井のほとり

木蓮の花影あびて去りがたく

竹たてて百合根の上をふまじとぞ

はねつるべ菖蒲の水の上り下り

たもとほる女誰々ぞ濃紫陽花

「やぶちゃん注…老婆心乍ら、「たもとほる」はウ行四段活用
の自動詞で、同じところを行ったり来たりする、歩き回る。徘徊
る。「た」は接頭語で「もとほる」は巡る、回るの意の上代
の動詞。」

星の竹病む娘のホ句も吊り添ゆれ

囀籠かけゐる人を木影より

秋耕の古鋤の柄をすげにけり

干鰯見てゐる欄も夕づけり

すでにして簀子の鰯夕づけり

昭和七（一九三二）年

草の戸に住むうれしさよ若菜つみ

雲影をかき消す波や蓴摘む

「やぶちゃん注」：「蓴」は「ぬなは（ぬなわ）」で、双子葉植物
綱スイレノ目ハゴロモ科ジュンサイ *Brasenia schreberi*
のこと。」

木の芽垣日にかがやいて雫暗

露けしや掌にもぎのせし濃無花果

世の煩ひを忘れて龍胆をつみつゝさまよふこと

七日ばかり

龍胆や孤り來なれし仙の背戸

龍胆の夕むらさきは戻りけり

昭和八（一九三三）年

温室の戸を流るゝ露や萵苣そだつ

「やぶちゃん注…「萵苣」キク目キク科アキノノゲシ属チシヤ
Lactuca sativa はレタスのこと。」

かやむらを飛出す鳥や堤やぐ

春の風邪臥すにもあらずいつまでも

三方にもえ咲く筒やアマリリス

きよらかにすみて子の無し雛の前

甘酒をわかし我まつ母やさし

つれづれの雛づくりす母手まめ

「やぶちゃん注…「つれづれ」の後半は底本では踊り字「へ」。」

ふところに入れし文あり春の徑

雛かざる娘の遊學はなほ許りず

「やぶちゃん注…次女光子さんである。東京の女子美術専門学校（現在の女子美術大学）に合格しても、それでも夫宇内はなかなかそれを許さなかったのである。「ゆりず」は「許りず」で下二段活用「許る」は、許される・許可が下りるの意味の古語である。」

鳳蝶の陽を照りかへす瑠璃翅かな

「やぶちゃん注…「鳳蝶」は「あげは（でふ／ちよう）」のことであるが、ここは下五の「瑠璃翅」からも「ほうてふ」と音読みしているであろう。」

高みより水に降り来る藤しづか

春の帶むすびかへる芝生かな

紅つつじ椽に坐れば照るおもひ

花散らす椽端の風雨猛り來れ

寶塚にて

並び聽く母耳うとし遠河鹿

月涼し四方の水田の歌蛙

於遠賀堤

水上の英彦は白し若葉つむ

沙羅の花降り來る鐘をつきにけり

「やぶちゃん注：「沙羅の花」ツバキ目ツバキ科ナツツバキ
Stewartia pseudocamellia。 [グーグル画像検索「夏椿の花」](#)。

仏教の聖樹娑羅樹に擬せられて多くの寺院に植えられている

が、あれは熱帯性のアオイ目フタバガキ科 *Shorea* 属サラン
ウジュ *Shorea robusta* で全くの別物である。」

鳴りひびく鐘も供養や沙羅の花

鐘つくや四方にわきたつ雲の峰

昭和九（一九三四）年

鴛鴦のゐてひろごる波や月明り

二月十日稚内より巨蟹を送られて打興ず

オホツクの海鳴かたれ巨き蟹

ゆであげて蟹美しや湯氣赤く

釜の湯のたぎるもたのし蟹うでん

紀元節ひとり香春神宮院にあそびて

岩ばしる水の響きや梅探る

「やぶちゃん注…「香春神社」は福岡県田川郡香春町大字香春にある香春神社。但し、こちらの個人ブログ「頑固親爺の独り言」の[同神社の記事](#)には「カハル」の訓読例が示されており、しかも『香春は「かはる」と読むが、もとは「カル」である。

カルとは金属、特に銅のことである。香春の三ノ岳には古い採銅所があり、ここの銅から八幡宮の神鏡が作られていた』とある。」

背山よりたつ^ほ煙や梅の茶屋

裏山の笹の^ほ鳴りや梅の茶屋

「やぶちゃん注…「^ほ煙り」「日本国語大辞典」に「ほなる」の項があり、そこでは方言として火が起こる（山梨県南巨摩郡奈良田）、熱を・ほてる（伊豆三宅島）とある。先行する[こちら](#)の「風さそふ遠賀の萱むら^ほ鳴りつゝ」の私の注やその前後の句も参照されたい。」

探梅や暮れて嶮しき香春嶽

「やぶちゃん注…「香春嶽」福岡県田川郡香春町にある三連峰（地図上のピークは四ヶ所）の^か香^わ春^ら岳^{だけ}。参照した[ウィキの「香春岳」](#)によれば、『地元では香春岳と呼ばず、一ノ岳、二ノ岳、

三ノ岳と各々を呼ぶことが多い』とあり、最高峰は三ノ岳で標

高五〇八・七メートルである。香春神社（古くはこれらの山岳上にあった）は現在、一ノ岳の真北の山麓にあり、山はこの一ノ岳から北北東に二ノ岳・香春岳（地図上に確認出来る四つ目のピーク）・三ノ岳と続いている。」

谷深く探ぐる一字や梅花節

「やぶちゃん注：「梅花節」は「ばいくわせつ（ばいかせつ）」と読み、紀元節の別名。梅佳節とも。」

芹つむで淋しき歩をぞ返しける

春寒く籠りてやせぬもの食まず

いちけゐる我魂あはれ芹つまん

東風寒や孤り來なれし遠賀堤

雛淋しけれども孤りかざりゐる

潮疾しさよりを抄ふ礁ほとり

「やぶちゃん注…「抄ふ」は「とらふ」と訓じているか。」

見渡して帝都は親し花の雲

英彦より

降り^{くだ}来て石楠折るや谷深く

石楠花やここより仰ぐ彦の宮

郭公や太敷たてし朱の宮

「やぶちゃん注…老婆心乍ら、「太敷」は「ふとしく」と読む。」

南國の五月はたのし朱戀咲く

朱戀咲くわが誕生^あれ月の空眞^ま珠^ま

「やぶちゃん注…久女は五月生まれ（明治二三（一八九〇）年五月三十日）。」

ほり出して全き古瓦や草の花

へや深く漂ふ日あり菊花干す

炎上をのがれて尊と御盃

「やぶちゃん注…各所の寺院でこうした話を聴くが、年譜には旅行などの記載がなく（行かなかったのではなく記載がなされていないという意味である）、同定出来ない。」

疾く起きて掃くたのしみや露の花園

澁ぬけて旭に透く色やつるし柿

秋晴の巖にこしかけ釣の幸

雪嵐す帆柱^{ホベシラ}山冥し官舎訪ふ

「やぶちゃん補注…この句、実は底本全集本文には載らない。底本年譜の同年の条に、この年の五月発行の『ホトトギス』雑誌巻頭（三回目。坂本宮尾「杉田久女」に拠る）に次の五句が載ったとして、

雪風す帆柱^{ホベシラ}山冥し官舎訪ふ

生ひそめし水草の波梳き來たり

逆潮をのりきる船や瀬戸の春

磯菜つむ行手いそがにいざ子ども

くぐり見る松が根高し春の雪

と記載されてある（本文同様、恣意的に正字化してある）。ところが、今まで久女の句を打ち込んできた私には、この冒頭の句には見覚えがなかった。検索しても出てこない。打ち落としたのかと不安になったが、坂本宮尾氏の「杉田久女」に発見、そこに『この句は句集には未収録』とあってまずは安心した。以下、宮尾氏がこの句について述べている。やや長いが、山口青邨の評引用など、非常に興味深いので引用させて戴く（アラビア数字を漢数字に代えた）。

《引用開始》

雪嵐す帆柱山冥し官舎訪ふ

この句は句集には未収録である。帆柱山は北九州市八幡東区にある五百メートルほどの山で久女の家からも見えた。帆柱山という名前は、神功皇后の船の帆柱にする杉を伐り出したという伝説に由来するとされる。

「ホトトギス」（昭九・六）でこの句の評を担当した山口青邨は、「官舎訪ふ」という下五のもつ斬新さと力強さに注目して、「此句で変つてゐる点は突然に箴といふ事を拉し来つたことであつて、かう置かれて見ると官舎でない他の家といふやうな生ぬるい事では斯うした強い感じは出ない、何故官舎を訪ねるのかなどといふやうな詮索は無用のことである。久女さんの句は何時もかうした力強い句であるが、此句の場合も洵に力強い男性的な感じを出してゐる」とある。

青邨の指摘通り、官舎というまだ俳句には珍しかった語が、句に斬新さとある種の硬質な響きを与えている。山口誓子は八幡製鉄を見学してへ七月の青嶺まぢかく熔鋳炉と鮮烈な印象の句を残したが、「青嶺」とは、この帆柱山である。

久女も現代的な風景を詠むことに挑戦した。帆柱山という地名の響きも、文字も句に情趣を添えている。「帆柱山冥し」で

小休止があつて、下五につづく。町に迫るように立つ帆柱山からの雪嵐の情景を描写しながら、官舎を訪問する作者の小さな決意を要するような心持ちが伝わってくるのである。

橋本多佳子は、この句の官舎とは八幡製鉄所長官用の官舎で、久女は『ダイヤを捨てた』と云ひながら、『中学教師の妻』と云はれるのをとても嫌」がつて、『有閑夫人のお相手は出来ない』と絶交して了つた」と記している（「久女のこと」）。意欲の乏しい有閑夫人の句会に出ていくことは、久女には苦痛だったであろう。

《引用終了》

橋本多佳子の「久女のこと」（因みに私はこの『俳句研究』（昭和二五（一九五〇）年九月発行）に載った多佳子の久女論については、一部を省略したものでしか読んでいないものの、どうも多佳子にして——少なくともこの文章のある一部は——かつての師の——悪しき「久女伝説」の形成の片棒を——結果として——担いってしまった非常に問題のある作品ではないかと疑っており、いつか親しく解析してみたいと感じているものである）は以下（底本と同じ立風書房版全集のものを用了）。

*

雪嵐す帆柱山冥し官舎訪ふ

久女

かきしぐれ鎔炉は聳^{たか}てり厳近し 久女

久女は常に自己の社会地位が気にかゝった。「ダイヤを捨てた」と云ひながら、「中学教師の妻」と云はれるのをとても嫌った。この官舎——八幡製鉄所長官官舎——に於ても「有閑婦人のお相手は出来ない」と絶交して了った。この句からも久女の何か息苦しい魂を感じる。

*

因みに、この翌六月に久女は『ホトトギス』同人となつてゐる。しかし同時にこの年は句集上梓の希望を以って虚子に序文を懇請するも希望が容れられず、久女の俳句人生——いや、彼女にそれ以外の人生があつたか？——に翳りが差し始めるのでもあつた——」

昭和一〇（一九三五）年

山頭の赫土さす日や小松曳

雪嶺の襷濃く晴れぬ小松曳

「やぶちゃん注：「小松曳」「こまつひき」と読み、平安時代の昔から正月初めの子の日に、野に出でて小松を引き抜いて遊んだ行事をいう。子の日の遊びで新年の季語。」

電車待つ未明の北斗冴え返り

風呂焚くや石炭喜々と鼈鳴りつつ

「やぶちゃん注：「鼈」は底本の用字。」

節分のくらき神樂に詣でけり

御廟所へ向ふ徑も笹鳴けり

陽炎へる老の歩みにそむくまじ

久方に笑み交す瞳も雛さび

古雛や花のみ衣けしの青丹さび

「やぶちゃん注…「衣」の「けし」の読みは、動詞「着けす」の連用形から生じた古語。一般には「御衣みけし」の形で使われる。」

雛愛しわが黒髪を植ゑ奉る

とほくより櫻の蔭の師を拜す

わが袖にまつはる鹿のあしび雨

「やぶちゃん注…「あしび」ツツジ目ツツジ科スノキ亜科ネジキ連アセビ（馬酔木）*Pieris japonica* は晩春の季語であるが、「あしび雨」という季語が存在するとは思われない。「あしび／雨」も無理がある。これは季語を出すための大胆な造語と思

われる。」

叱られてねむれぬ夜半の春時雨

花過ぎし斑鳩^{いづな}みちの草刈女

名草の芽もゆるところに日は濃く

「やぶちゃん注…「名草」は辞書によれば、「めいさう（めいそう）」と読み、花が美しいとか薬効があるなどの理由で、よく知られている草の意とする。」

岩惣の傘ほしならべ若楓

「やぶちゃん注…「岩惣」広島県廿日市市宮島町南町にある旅宿「岩惣」か？ [同旅館の公式サイト](#)によれば、安政元（一八五四）年に初代岩国屋惣兵衛が厳島神社の管絃祭（旧六月十七日）の前後一ヶ月間に立つ市^{いち}の賑わいに着目、奉行所より紅葉谷（現在のもみじ谷公園）の開拓の許可を受け、もみじ川に架橋して溪流に茶屋を設け、道行く人々の憩いの場としたのを始

まりとする実に百五十年の歴史を持つ旅館である。「岩惣」という名も、この岩国屋惣兵衛の名前に因んだもので、旅館形式となったのは明治になって間もなくの頃のこととある。違っていたら、御教授方、よろしくお願い申し上げます。」

秋來ぬとサフイヤ色なす小鯨買ふ

舞下りて山田の鶴やなき交す

菊うりの少女までどもこぬ日がち

隣の日のふたたびうれし黄豆菊

芝にあれば木の實もふらずよき日和

昭和十一（一九三二）年

冬風げる湖上の富士を見出けり

横濱税關

屋上の冬晴にあり富士かすむ

「やぶちゃん注…既注したが、昭和七（一九三二）年八月に長女昌子さんは横浜税関長官房文書係雇として就職していた。」

街路樹の黄葉あたたかし電車まつ

夜の街に去年のなじみの菊うり女

まちあほす冬日の町の時計臺

ユダともならず

春やむかしむらさきあせぬ裕見よ

「やぶちゃん注：久女満四十六歳のこの年の十月、彼女は突如、虚子によって『ホトトギス』から除名される。同月発行の『ホトトギス』上での除名社告『同人變更／從來の同人のうち、日野草城、吉岡禪寺洞、杉田久女三君を削除し、浅井啼魚、瀧本水／鳴兩君を加ふ。／ホトトギス發行所』（底本年譜引用の者を恣意的に正字化した）による一方的なものであった。既に『ホトトギス』には前年九月から全く入選しない状態が続いていたが（坂本宮尾氏の「杉田久女」に拠る）、除名理由は現在に至るまで明らかとなっていない。久女自身にも解らなかったのである。その辺りの真相は坂本宮尾「杉田久女」に詳しいので、一読をお勧めするが、この句については同書中に坂本氏の非常に素晴らしい解説と評釈がある。少し長いが、引用させて戴く（「VI 同人削除以後」の「一 失意の日々」の冒頭「ユダともならず」という見出しを持つ冒頭部である。アラビア数字を漢数字に代えた）。

《引用開始》

昭和十一年に同人除名の公告が出された後も、久女はいつの日にか虚子の勘気が解けて、同人に返り咲くことがあると思っていたのであろう。別の結社に移るということはしなかった。

除名後に「俳句研究」に発表された作品をみよう。昭和十一年十二月号の自選十句のうち、

ユダともならず

春やむかしむらさきあせぬ裕見よ

前書には、除名されてもホトトギスを裏切る者ではないという思いがこめられている。この句は言うまでもなく在原業平の、「月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして」の本歌取りである。業平は月が美しい春の夜に、自分ひとりとは元のままであるのに、自身をとりまく状況はすっかり変わってしまったと嘆いている。久女の句からにじむ思いは、業平と同じく「我身ひとつはもとの身にして」という深い詠嘆である。

紫という色は万葉の時代から情感をこめて詠まれてきた。

大海人皇子は額田王の歌に応えて、「紫草のにほへる妹を憎くあらば人妻故に我恋ひめやも」(一一―一二)(紫の色が美しく句のように美しいあなたを、もし憎く思っていたなら、人妻と知りながら、どうして恋い慕うことなどあろうか)。また、

麻田陽春は同伴旅人を送る別れの宴で、「韓人の衣染むとふ紫の心に染みて思ほゆるかも」(四―五六九)(韓国の人が衣を染めるといふ紫のように、心にしみてあなたのことは忘れがたい

ことだ」と詠んだ。

久女は紫色を純情のメタファーとして用いている。「むらさきあせぬ」の中七で万葉ゆかりの紫色に託して、俳句に、また虚子に対する彼女の変わらぬ思いを訴えている。

同人除名が久女に与えた打撃は計り知れないものであった。蘇峰の孫、名和長昌氏はつぎのような少年時代の夏の出来事を伝えている。昭和十一年の七月に、久女は蘇峰の山中湖畔の別荘、双宜荘で家族のように温かくもてなされた。翌年、除名された傷心を抱えて彼女は蘇峰を慕って、ふたたび双宜荘を訪れた。その年は暑い夏で別荘は千客万来でどの部屋もいっぱいであったため、別の旅館に案内された。蘇峰にも冷たく扱われたと思いこんだ久女は旅館に上がらず、次第に激昂して、大声で叫び出し、駅員や駐在の巡査も出てくる騒ぎになった。結局久女は駅のベンチで一夜を明かして帰って行ったという（「双宜荘の杉田久女」）。突然の除名以来、久女は周囲から好奇の視線をあび、冷たい扱いをされ、もう誰も信じることができなくなっていたのであろう。なんとも痛ましい話である。

《引用終了》

「蘇峰」は徳富蘇峰。虚子の序文が得られなかった久女は、虚子の渡欧中に両者に親しかった蘇峰（虚子はかつて、蘇峰の創

刊した『国民新聞』の俳句欄の選者であり社員の一人であった）に句集出版を持ちかけていた（宮本氏の同書によれば実はこれが虚子の久女除籍の最後の動機でもあったらしい）。この名和長昌氏の話は——久女伝説とは切り離して——事実であったと私は思う。私は——駅のベンチに一夜を明かす——その久女の姿を——見たことがあるようにさえ感じるからである……」

歸朝翁横顔日やけ笑み給ふ

「やぶちゃん注…年譜に同年『二月、門司にて虚子の渡欧を送る』とある。例の虚子の没後の「墓に詣り度いと思つてゐる」（『ホトトギス』昭和二一（一九四六）年十一月）で捏造形成されることになる、おぞましき久女伝説の一つ、所謂「箱根丸事件」（の一部）があつたとされる折りの送別吟であろう。この一句には『氣違ひじみ』（「墓に詣り度いと思つてゐる」の一節。但し、坂本宮尾氏の「杉田久女」より孫引き）た彼女の姿は全く見えてこない。」

粟の花そよげば峰は天霧らひ

「やぶちゃん注…老婆心乍ら、「天霧らひ」は「あまきらひ」と読む。「霧らひ」は「きらふ（きらう）」で、霧や霞が一面に立ちこめるの意の上代語である。これは「霧が立つ」の意（他に「目が曇る」「涙で霞んではつきり見えない」の意がある）のラ行四段の自動詞「霧る」の未然形に反復・継続の上代の助動詞「ふ」（ハ行四段と全く同じ活用をする）がついた連語であるが、平安以後には「語らふ」「住まふ」「慣らふ」「願ふ」「交じらふ」「守らふ」「呼ばふ」などの特定の動詞の活用語尾に残るだけで接尾語化してしまう。「霧らふ」もハ行四段活用の自動詞のように振る舞う語といえる。」

栗の花そよげば晴れぬ窓の富士

こぎいでて倒富士見えずほととぎす

「やぶちゃん注…「倒富士」は流石に「さかさふじ」と訓じていよう。」

灯さぬ水邊のキャンプ早も寝し？

「やぶちゃん注…「キャンプ」の拗音表記や「？」はママ。但し、底本の「？」活字は明らかに半角である。初五は「ともさぬ」であろうが、索引は「ひ」の項にある。「？」は底本文句表示の行の高さの中に納まっており、確信犯で句の一部、下五の末尾であって、例えば疑いを示す編者による附帯記号などではない（但し、表記が半角であるのはやや気にはなる）。無論、久女の句表現としては他に例を見ない異様異形なものである。しかし、この昭和十一年なればこそあつたとしておかしくないのである。」

鳥の巢もぬれて赤富士見に出よと

嶺青し妹と相みる登山驛

「やぶちゃん注…「妹」久女に妹がいたかどうかは不詳。「妹」は久女の句ではこの句にのみ出る特異点の漢字である。「登山驛」不詳。可能性としては箱根湯本か。」

信州

杏熟れ桑照り四方は青嶺晴

賑はしや市場はつゆの疏菜競^せる

わがたちゐピアノにうつり菊の前

雲海の夕富士紅し稻架の上

菊携げて笑みかほす目に情あり

花園に糞する犬をとがめまじ

旅に出てやむ事もなし柿と栗

昭和十二（一九三七）年

筆とればしづかにたのし塗火鉢

圓山應舉墨繪

金屏の蛟竜雲に乗ずべく

「やぶちゃん注…重文の丸山応挙の「[雲龍図屏風](#)」（安永二（一七七三）年作・東寺観智院伝来）か？」

山樂源氏物語屏風

争へる牛車も宮も春がすみ

「やぶちゃん注…重文の狩野山樂の「[車争図屏風](#)」（四曲一隻・紙本着色・江戸時代十七世紀作・東京国立博物館蔵）であろう。九条家の「源氏の間」の襖絵を屏風に仕立てたもので、「源氏物語」「葵」の帖の知られた「車争い」のシーンを材としたもの（リンク先は国立博物館公式サイトと同屏風図）。」

清朝ひすい香爐

春怨の王妃がゆめをまのあたり

信貴山縁起繪卷

百獸の戲畫おもしろしことに秋

「やぶちゃん注：国宝で奈良県生駒郡平群町の朝護孫子寺蔵で現在、奈良博物館寄託の「[信貴山縁起繪卷](#)」（リンク先は平群町公式サイト内）。」

今たのし雉子の玉子草にあり

雉子の雌めのぬくめるたりしこの玉子

愛しけれきぎすの玉子手にとりて

押しとほす俳句嫌ひの青田風

罽子ぎらひかな女嫌ひのひとへ帯

「やぶちゃん注…同年十月の『俳句研究』に載った「青田風」十句の内の二句。徹底した「罽子嫌ひ」の私の偏愛する二句である。」

一人寝の水色蚊帳に夢清き

昭和十四（一九三九）年

あせやすきにせむらさきの薺うち

英彦にて覚えし蝶にこと問はむ

「やぶちゃん注…絶唱、

蝶追うて春山深く迷ひけり

と遠く響き合う句である。」

寶塚聖天に詣れば

聖天の鐘が鳴るなりわらびつむ

「やぶちゃん注…「寶塚聖天」兵庫県宝塚市宝梅にある七宝山了徳密院。大阪浦江福島聖天了徳院別院として大正八（一九一九）年に元真言宗東寺派管長日下義禪によって建立された新しい寺である。通称「宝塚の聖天さん」。因みにこの句の後のこ

ととなるが、この寺には神風特攻隊敷島隊に二名を出した第十期海軍甲種飛行予科練習生の慰霊碑を含む全国陸海空戦没者二百五十万の英霊を祀る光明殿（昭和五三（一九七八）年建立）があり、その殿上に配された零戦のレプリカでも知られる。同寺の[公式サイト](#)をリンクしておく。」

實を揺りて鈴かけわれにめぐむなり

鈴かけの大樹と成りて芽ぐむなり

春雷のうてば松^か魚^づ節^{ぶし}折れちまふ

新樹かけ鈴成の實を仰ぎたつ

土濡れて鈴かけめぐむそよ風に

一月振にて歸宅

トマト早や青き實をつけ目當てよく

群れ通る工女盗むな紅苺

なりはひの苺積みのせトラックに

夕月まろし滿地の苺熟れみちて

大阪へ積み出す苺摘み急ぎ

鐘涼し松間を一人降りくれば

青梅ちぎる小梯子移し次々に

手とどけど梢のみ梅ぬすむまじ

實梅もぐ徑もありて塚涼し

鐘涼し實の塚に詣づれば

武庫川にて

晝河鹿きゝつゝわたる橋の上

「やぶちゃん注…「武庫川」「むこがは（むこがわ）」は兵庫県南東部を流れる河川。兵庫県篠山市真南条地区付近を源とし、蛇行を繰り返しながら次第に南行、三田盆地を潤したのちに再び山峡に入り、武庫川溪谷を形成、宝塚市街西方で大阪平野の北西端へ出て南流、下流域では尼崎市と西宮市の境界を成しつつ、瀬戸内海に注ぐ。因みに先に出た「寶塚聖天」は、この河畔に建つ宝塚劇場の対岸から南西に約一・四キロメートルの位置にある（[ウィキの「武庫川」](#)に拠った）。」

ゆく水をせきとめべしや鮎躍る

「やぶちゃん注…「せきとめべしや」はママ。」

ゆるやかにせせらぐ水よ夕河鹿

月見草手にあり散歩月をめで

むしあつき戀も忍ばずひとへ帶

高柳部隊を見送る

夏草を積むトラックは兵たん部

「やぶちゃん注…「高柳部隊」不詳。戦史の専門家の御教授を乞うものである。」

喜べど木の實もおちず鐘涼し

石角に林檎はつしとわがいかり

「やぶちゃん注…久女句集本文の最後を飾るに相應しい、久女らしい印象的一句である。」

……久女さん、誰が何と言おうと、私はあなたが好きです……」